









本書の内容を維利者の近述なく複数・複写・翻案・故丞・出版・データ配信(送信可能化を含む)などすることはなきの内容を維利者の近述なく複数・複写・翻案・故丞・出版・データ配信(送信可能化を含む)などすることは 本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその体すべての権利は、本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権力とびその体すべての権利を利 SBクリエイティブ株式

カバー・口絵 本文イラスト



だから起きるって。 だ、起きて、ください はいはい、 おちるおちる。 -SRP4 A 限に沈んでいた支護が、 そうか、もう初か……。 どこからか弱々しい声が聞こえてきて、身体が損き せんばい

一年 田一日 遊いっていうか ż

はと鼻の先に少女の顔があった。 ハンティスが絵を聞くと

小の部は した大きな難に、柔らかそ >一大を連担させた **薬色の見はだ石にまとめられ、動物の耳のよ**

解前に 泊っていた。 そのマロンの可愛らしい顔が、今は林檎のようことマーテリア騎士学院において、ハンティス 彼女の名はマロンーマーマード。 ハンティスが除長を務める第39部隊に内閣している、一つ行下の後輩だ に残っ掛に指まって、 寮の自習のベッドで終ていたハンティスの

そう口にしたときの彼女の吐息が、ハンティ お、おはよう、どざいます

どうやら戦闘けになったハンティスの上に乗っ それくらい、近い。

しかしそこで、さらなる視常に気づいた 少女の突然の諸行動に、慌てふためくハンティス 一って、何やってんだお前り」

それだけで十分に信頼だというのに 得い布きれ一枚を除いて、後女は完全なる全権だったのだ。 調理などの際に着用する。 エブロンというやつだ。

体勢のせいで、深い谷賊がはっきり その小柄な体験とは小的り合いなほど大きな双丘が、布きれを照り

ちゅつけ たやつけ 間気が吹き壊んだ。 や性がつた」

さあマロン、あと一念です。相手はすでに動物的な木能に起くだけの採根と使しています。 そこへ洗がとした、それでいて熱の確った声が関こえてきた。 動揺のあまり、言語が動物の呼び声レベルになってしまう。

その個型少女の指示に、 シスリーネーシルベルスト、彼女もまた第29種間のメンバーである。 ベッドの結でこちらの様子を残っていたのは、彼のような頻繁と人形めいた美貌の少女。 マロンは「ひゃ、ひゃい!」と実践った声で応じて、さらに顔を赤く娘め上げなが 想後のトドメを

ちち、違うんですううう! **心と綴り回された胸がハンティスの頬を行った。遂並があるせいか、ちょっと痛かった** 「何を言っているのですか、マロン。そんなことでは、私たちの目指す復齢を成し返げ しはただっ、からされていただけなんですぅぅぅ----っ--彼女も様にエプロンだった。 ハンティスはシスリーネを手膜で睨みつける。 むしろお浴とそ何を言ってんだ」 そんなことを呼びながら、頭を抱えて常屋の間で小さくなるマロン。 **近っと耐から超気を噴き出したマロンは、連携を上げてペッドの下へと転げるように飛び降りた。その際、ぶお**

確ですっちゃっちゃっちゃっ

「残念なものを見る目だったんだけどな……」 そんなに印象な目で見つめられると、 マロンとは対照的に胸はほとんどない。というか、ほぼ絶怪だ。 さすがに引きます」

とは言え、彼女の引き締まった四肢や白い顔骨は、 ウンギをと言い返すハンティス。 それだけでも十分に刺激的だ。胸が残念という点を除けば

その美しい顔立ちも含め、木性さえ知らなければ文句なしの美少女なのだが……如何せん、中身がコレだ。 ロボーションは見事なもの。 一体何があった

148 と、そのとき復経のドアが聞く。 ちょっとハンティス。既下まですごい声が関こえてきたんだけど、

特徴的を飽やかな無髪に、無曜石の暗。 という疑問形を残し、少女が入り口で囲まった

夜にエブロンという、何っぱらから破壊力のあり過ぎ つい先日この学院に四人学し、第39前隊に加入したサヤミサクライだ。 る挑好をした二人の少女。

に独騒な色が出じっていく。 ハンティスは慌てて時んだ。

「ち、遊う! 他がさせたんじゃない! 4、歯はただの観光者で……っ!」 マロンと飲たようなことを主張するハンティスだったが C、こいつらがいきなりこんな格好で助手に部屋に変たんだよ

… (程水線)

見ではない。 在能が象を司る"幸 蛋」の力で見現化させた、特殊な武器― サヤは静かに吐いて、両手に水の双利を譲取させた。 と冷や行を流すハンティスだったが、そのとき悲わぬところから観察が現れた "紋草式笑」だ。その切れ味は、道管の武器類の

いきなり明られて、サヤが、眠殺く睨みつける。 調が対人値より まったく

いきなり暴力に従えようとするとは。何とも野蛮な女ですね。類人娘ですか」

これはヤバ

「もしあなたが知性ある人間だというのならば、それを証明してみなさい」

翔をひそめるサヤへ、シスリー末は声高らかに続けた 証明で

「正々立々、様にエブロンで暗気です!」

心然として口を用けるナヤ。 ―って、なんでわたしまでそんな格野しなくちゃいけないのよっ……」

そうですか。まぁ、その残念な胸では暗隠してしまうのも仕方ありませんね」

しないがっ 大きいでしょ!」

続けている



「それとも、こちらで勝貫するつもりですか?」 言いながら、シスオーキは自身の収取的質である(凍結形)を顕現させた。カーテンから差し込む朝の陽光を反

材し、幻想的を熄めきを放つレイビアだっ

一少しは解に覚えがあるようですが、どの程度のものか、ぜひ一度確かめてみたいと思っていました」 その先端をサヤへと突きつけて、シスリーキ丝小額な台間を口にする。

サヤもまた(軽水腐)を構えて靴を続くする。 ……お問みなら、そうしてあげるけどう」

一般印象の二人。

ンティスの方を睨んできた だが、さすがにこの場でやり合うのはマズイと思ったのか、サーは翻覧とともにシスリー ホから視線を凝らし

「俺もテヤの親エプロン舎が見たい」 しまった。つい勢いで本質を言ってしまった ……ちょっとハンティス、あんたも煎ってないで、この度様をどうにかしなさいよ

サールののでで (数水板) の切っ先をハンティスの力へと向けできた。

冗談! 冗談だから! 別に見たくありません!」

対が臨消する。 ……とにかく。今日という今日は許さないわ。あんたたち今回だけじゃなくて、これでもう国度日でしょ」 という本省は胸の側にしまって必死に主張すると、なせか少し不満げにしつつもサヤは胸を降ろしてくれた。双

それからまだ数日しか終っていないのだが、二人の音行はすでに国度打を数える。しからほ々と過激になりつつ。よそ常人には理解しがたい経理論を発表して以降、彼女たちは体むことなくその実践(?)を続けていた。 マロンとシステーキが同時にハンティスと結婚すれば、間接的に二人が結婚したことにもなる 我女の言う通りだ。

その度にサヤが怒鳴り込んできて、今日のようなことが繰り起されているのだ。

「これ以上、学院の規範を見ずわけにはいかないわ。わたしの目が無いうちは、もう二度とこんなことさせないか そう切実に思うものの、なでかいつも彼女の訪りの矛生はハンティスにまで向けられてしまうのだった。(いい知識、俺は完全に経営者であることを理解してくれ……)

サヤはそう冷戦と言い残して、 ハンティスの修服を出ていく。 たように言った

一連うんですう……違うんですっ……」 「ようやく岩榴者がいなくなりましたね。ではマロン、今度とそ」 それを見述ったシスリーネが、勝ち誇っ

「いいからお前らもとっとと出ていけ」



「そうよ。パレット教育と相談した結果、わたしが監視のため、この協院に入ることになったわ。 なぜか大きなな機を背中に掛いている。 ハンティスは気垢を隠せず、再び移程にやって来たサヤに因ねていた。 シスリーホとマロンを追い出してから数十分後

- それで、数官に政治を訴えたらこうなったと

ここ大略祭の各澤屋は本来二人用だ。今までこの彦屋はハンティス一人しか使っていなかったため、 どうよ、とばかりに彼女は胸を張った。 これなら彼女た 被かに一人

カのスペースが他ってはいるがし 動転して内心で味ぶハンティス。 (つまりそれって、サケと何晩時に移屋で役るってととだろ!) サヤーサクライのことが好きだ

恋心の芽生えは、この学院の合格物表のときにまである。 ハンティストハーミリオンは

のれは一日惚れというやつだったのだろう その後、色々あって彼女が学院を倒れてしまい、一年近く会っていたかったものの、先日の事件がきっかけで得 美しい例如を披露する彼女を見て、今まで抱いたことのない不思議な胸の盗唱りを覚えたのだ。今にして思えば

そして、ハンティス社祭りに募ったその⑪いの丈をぶつけたのだ。 それから同じ菩薩氏所属し、活動をともにする中で、彼女に対する想のは日に日に催くなっていった。

そんな相手と同じ篠根で暮らすなんで もっともシスリーネのせいで、うやむやになってしまっている感吐あるが、 …… み思い選すと、極から大が出そうなほど恥ずかしい

うおんても問題いを起こしてしまうり

6時後が早くなった。 少し総表をはだけさせて無結婚に振る徒女の姿を悲惨し、 と暗波を飲み込む。無名間のうち

なにす いや、問題っていうか… 修道院で暮らしていた経験のある依女は、男女が同窓だろうと気に 何が問題でもある?」 そに、サヤは早然と湧いてくる

やサヤの指導教官だっ 長身で、美しいプロボーションを誇る彼女は、パレット=バスカラー。との質の暗器官も実住する。 とそこへ、教官服を着た女性がやって来た。 どうだ、サヤ=サクライ。ちゃんと同居人と話はつけたか?」 ハンティア

「ふん・変なところで生乳歯針だな、背様は、せっかく全粒公認で想い人と同居でも「……お、地は反対ですよ!」 ていうか、男女の同葉とかおかしいでしょ普通に!」 ハンティスは彼女の近くに駆け容ると、サヤに関こえないよう小声で問い詰めた。

さ、さすがに気にも心の連鎖ってものが 動揺するこちらの様子に、パレット教官はニヤリと口角を吊り上げた。 目を傾くハンティス -って、待て、なんで教官がそれを知ってるんですか?」

「分かりやすられ、資味は」 100mm とちらの反応に、意境思そうに笑う教官 カマをかけられたりと気づいたが、 もはや後の類りだ。

んだが、どうやら同宝というだけで問りから難けられるようになってしまったらしい」 「実はな、サヤニナクライの同節人から相談を受けたんだ。本人には労別返議などな ハンティスが歯暗みしていると、数目は小意に直刺を繰つさになって、こちらに百行ち

のせいで不適の幼少期を送り、学院に入学した信初は、人との国わりを耐んでいたほどだった。 いれてしまうのも、あり得ないことではないだろう。 **貴級の子弟が多いこの学院では、ヤマタイ民族への密別は珍しいことではない。同窓というだけで忌聴の対象と** サヤは、かつて東方の異国から収録として連れて来られ、現在も収録臣収と弊論されているヤマタイ臣説だ。そ

ハンティスは取わず恩而を唱み締めた。

やましいことしか頭になかった自分を反省 それでこの例外的な問目を認めざるを得なかったわけか……とハンティスは得心する **化情、他の落屋に移ってもらおりにも、丸々空いている落屋がなくてな」**

話はまとまったぞ、サヤーサクライ。というわけで、質様らは今日からこの部屋の同居人だ。妙良くやれ」 教官が結論づける。 ちらりとすずに視線を向けると、この話は関かされていないのだろう、 不到例外 うに賞を開けていた

そんなやり取りを続日に、教育は部屋を出ていく 微笑んでくるサヤド、ハンティスは心臓が跳ねるのを核じながらぎこちなく応じた。 分かりました。というわけだから、 大り間、余計な一言を残して よ、よろしく」 よろしく ハンティス

しかし伊良くと計っても、一応ととは学院の変だ。

記録わしい行為には及ぶなよ

型カルローナ苦国の"紋索騎士」を数多く輩出してきたこの学院は、吉国第三位の罪市であるキルクルスの南場

に使用している。 そんな立刻な協権群の関を行きながら、ハンティスとサヤは生性どからずっと押 整備された広大な敷地が広がっていた。 学院の生徒には貴族の子弟が多く、時には豆族すらも適うほど。そのため、どこかの王宮と見続うばかりに実し

バレット教官のせいで、どうやら彼女は巫の意大さを理解してしまったらしい。

(あの教育……自分が結婚できない難いせじゃないだろうな……) 内心で困づくハンティス。 軟弱な明ぜかりで語にならん、

で特定の相手もいないらしい。最直は関き直ったのか、 ハンティスが頑張って活動を指そうとしていると 互いに無言のままでは気まずい。 バレット教育は、この帝国において女性の一般的な結婚適能関とされる二十歳を大きく過ぎているが、未だ他身 とよく連携を楽している。

周囲を行き交う生徒たちを見ながら、サヤの方から口を開いた

の開闢してしまったのだという。 たのは、つい先日のことだ。 外門の整備に就いていた騎士学院の生建によれば、最初に適用門から侵入してきた数区の離物が、 すぐにマーテリア学院輸工団が出動して討伐したため、被害は最小限に輝えられたものの、幾つか不可解なこと コポルトやオーガなどの船物の群れが学院からほど近い位置にある外門を突破し、キルクルスの街中を垂れ回っ さすがにあんな崇拝の後だしな」 外門を内側か

「そして外門が問題すると同時に、一斉に都市内に否議れ込んできた、か。……まるで統甲された軍隊みたいだな」 「アルレナが言ってたけど、それまで騒物の群れはこちらに気づかれないように、 関かれてしまったのは事実だっ 学院の額土団長を務めている友人から聞いた話を前見するサヤに、 知識の低い難物に、そんな芸当ができるはずはないとの意見もあるが、常暗問題されているはずの暗字な外門が ハンティスは加砂に相関を打つ。 ずっと付近のなむらや出版に通

だが難人の生態は謎に包まれており、本だ分からないことだらけだった。 その紋な騎士たちが犠牲になってきたととが物語っている。 確物の明点にお除するとまで言われている、権人。 その恐らべき力は、 時間じくして、学院の敷地内に離人が現れたのだ

「あいつは元々人間だったけど、他政室にたぶらかされて、他ちちゃったの!」 相幸富・一その存在もまた、謎に包まれている。 **ふとハンティスは、あのとき目身の脊髄炎薬が生げた言葉を思い出す。**

元々人間だった、か……) あの難人の弦を、描きしい生き物が液んでいるのを **傾何が少ないため、こちらはその存在目体が衝突されているほどだ。** 一般的には、客気に染まったことで人間に思さを願く ようになった高粱の産業だと言われているが、

収支の話にはいまいち信息性がない。 だが、職人の出現とともに行方不明になっている中年がいた。 あのあと詳しく問い詰めると「た、確かそうだった気がするんだからり」 と曖昧なるとを言っていた

適け出したのだろうと言われているが・・・・ 彼が縋えられていた地下市は難人によって破壊されていた。その死体は見つかっておらず、 ハンティスたちの部隊と一間岩を起こし、地上小に拘留されて

頭状に表んだ陰既は、 断き抜かれた大理石の施下 そんなことを考えているうちに、投作へと遡り着いていた。 すでに大学が生徒で増まっていた。二人は鶴見された! を行き、講義生へ。

連が軽大よ 教行から関方支 姓大

ているため、二人そろってこちらへとやって来る。

ハンティスたちに少し遅れて、シスリーネとマロンも譲渡室へと入ってきた。基本的に採掘

題紀を守ろうとする真面目な疲労生ぶっておきながら、 不健に物師されて サヤがじろりとシスする 水を睨みつけた。

家なふうに言わないでよ。あくまで監視のためだから」 なせかシスリ れませんね」 木は少し感むしている

つい どめんがかい、サイカル……」 能を顔ませて出ってくるマロンの頭を 別にあなたのせいじゃないから、ね? - 本が就を然り上げた。 あなたは思い似に騙されているのよう ややがよしよしと表でる。 一位かないヤー」

一あんたのせいでしょうがひ」 私のマロンを従かせるなどつ!」

「おら、うるさらを指さる部隊!」 「それ根本的な解決になってないわよね?」

いつの間にかパレット教育が教壇に立っていた。 いきなり終むが飛んできて、サヤが口を喰んだ 静かになって、 技工関助を知らせる誰が明り始めていたことに

になって三年目の若い女性だった。 一あれ、なんでパレット教官が? パレット教育は実践観角の教育だっ ハンティスは不思議に思って消ねた 性学の投業を担当していたのは、フ

* h そのときだった。 とそこで、テヤがハンティスの精度を耐で実いてきた。 度そりと呪訓の言葉が聞こえた気がしたが、塗もが聞っ ハンティス 値かに第29回降の軽弱が担っているはずの肌が二つ型いている。 まだ二人、家でないみたいだけど

- フリデリカ教官は軽極したため、しばらくお休みだ。

- あのプス爆発すればいいのに

語もな限しまなか

わいはいいだおるで!」 本人曰く、おしゃれポウズらしい-なぜかパレット教旨の足の下に

……なんで踏まれてるんだ?」 そのせいで気づかなかったのだ。 ハンティスは半線でその少年に洗ねる。

さに怪我の功名っちゅうやつやな 「ナハハハ、蛇さんのお花に触らる 「だから私を組さんと呼ぶなと言っているだろう」 パレット教官が手加減なく少年を繰り残けす。

認能しながらも、 く……5、今のは……きずがに……痒……ち… めちゃくちゃ続しそうだった。ハンティスはもも

のの変態……」とドン引きしている。 それがあの密轄の名前だ。

かに続った。 小し、なうく程規しちゃうとい 性から人産前を使かせる技術そうな少女だっ 突然、大声とともに調義率に飛び込んでく 上はどれいで来たのか、 人間があった

視跳だ 「雑別だ」 「超後の最後まで締めなかったことをちゃ 「まだミイナの心の中では誰の余額が残ってたもん!」 朝と繋が美味しかったのが悪いの!」 そう断じるパレット教官に、 馬鹿を行うな、完全に避損だ」 んと評価してほしい!」 柱道を以みた

「あのブーーごほん、フリゲリカ教育は長朝休養中だ。いいからとっとと居に施れ。 そしても難制は使わらんぞ」 もはやただの責任転嫁だった。 ところでフリデリカ先生は?」 よく見ると彼女の口元にはパン解がついている。

が揺れ間とえてくるのは、 サヤが深々と眺望していた。 残念なことに否定できない ほんとにロクなのがいないわね……」 結局、週別数いとなって収集れる少女の名は、 しいしんだりん もはやお馴染みのことだった。 が縁のメンバー

いきなり命じられ、ハンティスは耐食らった。 今日は「紋章字」の授業だったち ようやく投業が始まる。

一次日の世別 大湖? ていうか、たんで俺が前を **売行は、隊員である貴様の責任の**

2 「広さは十分あるから問題はない。おい、メイル=メレオロン」 さらに教育はもう一人の生徒――そばかすの目立つメイルという名の参称に、 教官が指示してきたのは、第一階位の報告的な状況能だ。 いいんですか? ここ、訓練場じゃないんですけど……」

で独峙するように立つ。

「ハンティス=ハーミオナン。質様は今から、あいつに向けて全力で〈死'犬〉を楽飾しろ」

他で言いたい気持ちを堪え、ハンティスは逆らわずに前に出た。続いて呼び出された別の生徒と、広い教壇のト

その合図で、ハンティスとメイルは同時に"校家部"を唱えた。 Conmission

によって、紋型術は整動する そういった各種誰にとっての象徴的な団式ー 光 謹載 風 出行 確認に二つの「収算」が浮かび上がる。 あるいは大鍋や水の結晶 ・検察を、何かに加んだり政政副を明えて空中に規関したりするこ

松泉道、命草等、光泉道などが有名だ とちらも第一階位の就車術だ。 ハンティスが火攻撃の力を借りて発動した〈光・火〉に対して、メイルが放ったのは開政室による(上域)。 な霊の種類数は一説には無数にあるとも言われているが、大文章、水文章、展立書、地衣書、 金属 節馬

炎と風がぶつかって、熱風が講教室内を吹き荒れた。 しかし第一階位とは言え、弑卒助士を目指す者が全力を出せば、それなりの攻撃力を持つ

紋章術を使用する上で必須となる精神のエネルギー。それが変力だ。 どういうことだ? 「壁方」は、明らかに俺の方が大きいのに……」

同じ際位であれば、能力が大きい方が優勢になるはず

(いや、物で……なるほど、そういうことか) ハンティスが理由に思い当たったそのとき、パレット教育が解説を始めた。

「見ての通り、紋章術にはそれぞれ相性というものがある。 久茹の紋章術は直撃す での性質上、更由から組長の紋章術にぶつけても、まずもって押し負けてしまう。 また地流紋が崩は、水系や施系に強い。紋が始を扱う機物や人間を相手にした戦闘では、 別えるだけで朝一杯だっ ……まよ、我に、そろそろやばいんですける……」 ハンティスの収率術が押されているのは、むしろ当然のことだった。 つまり、同じ物位であれば火系の紋章術の方が不有ということ しかし指行を放すハンティスを無視し、教育は解説を続けた。 同様に、大系は水泉にも弱い」 相手の程器とす

市に応じて昨郎や牧術を変えるなど、的緒な判断が求められる。覚えておくんだな」 どうやらそのことを生徒たちに実感させるために、わざわざこんな実績をきせたらしい。 する紋章

「えっと……や、やめた方が……?」 ※提的な知識を示ぶためのものなのだが……まる実技担当教育らしくで、これはこれでいいのかもしれない。 「経章学」の授業は本来、総章術の効果や総章の構造、総章詞の文法、あるいは意識の性質など、 もっとも、利用された方は鳴ったものではないが 松華州に関す

「おい、メイル=メレオロン、誰が力を扱いていいと言った?」 とちらの様子を心配して、まだいくらか金額がありそうなメイルが言

「あんた鬼かり」 ミイナが無軽気に応援してくる。

一計論が程限してきたせいだからなける 何と飲のせいだもーん!」

しかし思った以上に経営

「この人どうおえても数解失格だろけ」 完全に八つ出たりだけ」 言いおれていたが、私の維殊は規不尽な体別だ それもう投票を開係ありませんよねり」

手のひらサイズの女の子だ。 勝気を継に、炎の間、 ふわふわと由に浮かんでいる。 可愛らしい出ととるに、実知として確立と 風ごときに手と手ってるんじゃなーい!」 一円かが現れた

「わわっ、人がいっぱいっ… 被女は実体化できるほどの力を持つ高位の火産室にして、ハンティスの登職者室 "不死の長様" だった

ば、低間で、やめろっ!」 「大意霊の力、紙めんじゃないのよー」 資外にも人見知りな彼女は、ハンティスの絵に貼れてから威勢よく叫んだ。

徒たちが口々に「熱っ!」と機能を上げる。 大と鼠の創作など無視して、(辻後)をいとも簡単に押し返した。 もはや第一時位の次元ではない。ぐわっ、と先ほどに終する熱風が建変版内を走り抜け、綾子 ハンティスの制止も達しく、実和、〈常・大〉の成力が増した。生力が一気に消費される を見守っていた世

少年の身体が大変の奔渡に呑み込まれそうになった。その寸前 世紀とするメイルに、巨大な美が強いかかる。

何とかななまを何た バレット教官が発動した規系二階位紋政密〈覧/説〉が、横合いから暇きつけられた。 - 前巻を下吹き並れよ、脚端なる様才 - と思いまや、直流、長属を浴びた情報が楽しく他え上がった。

と、バレット教官が間の抜けた声を舞らしているうちに、みるみる大勢が増していく。

「やべ人ぞとれ!」「ひ、大を消せーっ!」「誰か水湯が四部なやつ!!」 もうと立ち込める別情 講義室内は緩かに騒然となった。

「だからやめろって言ったのに---あっ、こらっ」

まったく 数人が耐火を試みるが、しかしフェニックスの力で増幅された炎は簡単には消えない。 フェニックスは気まずそうに目を塗らしながら、すっっと消えていった。 - 仕方ならわね」

商助交じりに前に出てくるサヤ。しかし彼女が水系紋は衛を発動するより一腕なく、シスロ

「水やも大は前せるんでする。酸大」 野まれ。冷却の気度が水道の飼りを贈らん ったく、酷い日に通った」 無け取られおらお添う中、 大はすぐに消し止められたものの、講義室内には生々しい焼け高が残っていた。 それを病足げに律器してから、シスリーネはサヤに向かって捨器的に告げた。 を系第二階位紋章術(水結)で県数が完全に確り、空気が遮断されて炎が晒く間に消火。 ハンティスは表情に模力を確ませて構思する

方、元凶たるパレット教育だが、恐らく今頃は職員室で教育長あたりから厳しい誘数を受けていることだろう。 駆けつけた套目たちに詳しい事情を話したところ、ハンティスに非はないことが認められ、御外めなしとなった 同類して、チャが労いの言葉をかけてくれる。 ・災難だったわね」

54 「次の定開戦の結果次節では他たちにもチャンスが?」 の生むみろ きっと関長が率いる第98番隊は次まりだよね。間長は個人器門と合わせて二冠を組 **砂箱式祭には、どこの部隊が出場することになるんだろうな?」** 授業は一時的に中断され、自習時間となっている。 一年での出場はあり得ねるだろ」

困さ耳を立てていたらしいくっナが、可愛らし ぶろえりーむ? って、なに?」 最初とそ真面目に自御をしていた生徒たちだったが、 育を開けた 次納に和認が増

「そうです。帝国各地の騎士学院から遺抜された生徒たちが撃まって テリア騎士学院の代表も報年出場しています」 マロンがおずおず説明する 様な 吉和で国家される大会 実力を聞い合うための大会です。 2

見える… 明主としての核米が約束されると言われている。 根稿武祭は祭舎の御覧も行われるほどの一大イベ そう補足したのはシスリーネだ。 見えるで!」 吉田中から注目

「おいが機能式祭に出場し、その獅子推出の危障ぶりを見た女の子 「誰からも突っ込みなしかいだ」 - SEE デャンクがいきなり立ち上がったかと思うと、 母のがくけんだ って雨がって

「やめてくれや楽しいやんかけ ハンティス、 もういい知識のずいし、 なんか焼の岩棒にも同じえるからやめてくれ---」 わいは厳しくされる方が好きなんや!」 いいかと思ってい じぶんはわいの心の友々

124×161 「ハンティス……あんたって、実はそういう趣味も 明らかに説解した様子のサヤに、全力で査定する ハンティスは心妊娠そうな顔で、前のめりなデャ そらそらお何が樹崎式祭に出場できるとは思えない」 ンクから質問

一つは個人部門。 やけど部隊部門やったらいけるやろ!」 ちいとどころじゃないと思ったが、面倒なので突っ込まない。 一部門において行われる。 もう一つは部隊単位で出場す 部体部門で一体のみと

まの確かに個人部門では、ちゃとばかし難しいかもしれへん」

「おいらの部隊には、 いり、非常に挟き門である。 根据武器は報花 わいを策策に努力なメンバーがそろっ

でも、どうやって出場器既が選ばれるんですか……?」 「なんでお前が領域だ」 「成績です、マロン。したがって、私たちの部隊が遊ばれ わいのモテモテ社園が 44038 ないかと

そこへ世突に振り込んでくる声。 それ以前に、もっと転換するべきことがあるぞ、チャンター がーん、と熟惑の外れたデャンクが坊主頭を抱える。

概さん! どうやら読数は終わったらしい。少しやつれた穏に 供り取ると、 パレット教官が調教室へと入ってきた 2+44

えしい視線とともに執行が合けた。 それと、私の減給処分の途因となった第39部隊はこの後、建戦回に残るように」 生徒たちが仕方ないな、という雰囲気で席を立つ。ハンティスたちも教室を出て行じる そこへ扱みが

もう残り時間も少ないから今日はこれで終わりだ」

どうおえても選択みだった。

「直接らに残ってもらったのは地でもない。ついたはど、数目長から適切があってた」ついにおいるを指示状の出場でも認定された人やなり。 他の生泥たちが全員いなくなったのを確認してから、パレット教育社目を聞いた

──一このままだと質疑らの修修は前期本で解鏡だ」

数料は告げた

音様らの酷い成績について、さすがに着地で しょうたち、そんなに関かったっけて 報かり対象 9部隊の面々に、パレフト教育はそう続ける。 きない技能にあると教育員から動きを受けたんだ」

がタリアした任格は下級のものが値か二つ。加えて、授業および消費の矢比や週間の回数が除員総計で二四回を組 限らですね。 百を解けるこ 6ノ月上旬に行われた定開戦で十戦全政。 くイナに、教官は決々と事実を述べた 一体、どこの部隊ですか」 多くの程識がすでに出

『世球らの影像に決まってもだろう』

こちらをジト目で見てくるサヤからち、目を辿らすしかなかった。 わたしがいない間、一体何をやってたのよーし デャンクの指摘はまったくもってその通りで、ハンティスは何も言い述せない。

一公式的には報たちが倒したことにはなってないんだよ」 「で、でも、あたしたちは嫁人を倒したのに……」 戸惑いを隠せないマロンに、ハンティス社そう説明する。

第29様様の活躍により、権人は何された。

なことができるはずがないと判断されてしまったのである。 いを見てはいない。状況から考えて第29億隊が倒したことになるのが自然なはずだが、 加えて、後に残っていたのはボロボロの人型の死体だけ。よしんば第39部隊が討伐したのだとして あのときキルクルス精土団が駆けつけてきたのは、難人が結合した後だ。そのため、彼らはハンティスたちの破 だがその事実は、正式に認められたわけではなかった。 まさか学院生だけでそん

明人ではなく、別の人間の服物だったのではないかという容易すらあるらしい。 追い行ちをかけるように、数目が苦衷を鳴み消したような顔で苦目を見する。 ----とんな酷い域域でさえなければ、様人を倒したとの主張にもずっと説得力があっただろうにな」

芸譜の魔物に敗北するわけがない」と楽していた。 「そんな……せ、せっかく、サヤさんも人ってくださって、これからというとまたのだ……」 素痛の固わるで得を認わせるマロンに、パレット教育が間を振る。 安心した、マロンニマーマード、もちろん、すぐに解釈というわけではない。教育技が条件を提示して さらに、魔人が学院内に出現したこと自体に懐疑的な上官たちにも不満を持っているらしく

しょ、果然、むすか……かり もうすぐ関係される定開教で最低でも十載中六勝をあげ、かつ、前期中、すなわち来日

一なんだ、常難じゃないか」 しかしハンティスは、 バレット教官が告げたそれは、 あっさりとそう所定してみせたのだった。 今までの第2日移聴の成果からしてみれば、

級以上の任務をクリアすることだ」

とちらを見つめてくる。 「ほう。細分と目信があるじゃないか? 地域するような口包りとは表現に、パレット教旨はどこか病定げに移を出り つい先日まで、質に引き纏ってばかりいた似の

まる、教官長のご期待を裏切れるよう、 最後にワザとらしい院内を言って、教育は講覧主を出て行った。 せいぜい用張るんだな、 \$42.50 pt

模能が終わった後の存職訓練の時間で、ハンティスはミイナと手合わせをしていた。 相変わらずの威勢の良い掛け声が、武体れたグラウンドの空に響き返る。 The washan

あっさりと似していく。手にした自身の紋章武装(紋皮術)を、先ほどから一度も使っていない。 「もうつ、ハンちゃん旅げてばっかり!」 然而とともに次々と繰り出されてくるミイナの巻。だがそれを、ハンティスは右に左にとステップ 「……みるるかみの、かな風 でええんい! ありゃあああっ! どすこかかかいっ!

「悔しかったら悔に倒くらい使わせてみろ」 燃を振らませ、 おっつい いっそう攻撃が背担になったが、しかしそれでもハンティスを膨えることはできない。 ミイナは非に勧着 した彼女の紋章武技(蛤蜊ノボ番)から、依しい繁星

「ミイナ、なんで攻撃が当たらないか分かるか?」「ハンちゃんが動くから!」

「かのが馬鹿だからだ」

攻撃が単調者 情報するミイナに、ハンティスは候間を続けながら説明してやる。 るんだよ。だから鏡車に読めちまり

L-BBA 不満げた収を明らすミィナの単を回避しつつ、ハンティスは視界の場で似の既員たちの様子を見書る (あいつらはちゃんとやってるかな---?) 真くも悪くも、ミイナは単純で頭が弱い。そのため、破倒や駆け引きといったものがとにかく苦于なのだった。

心配していたが 少し誰れた場所で、サヤとシスリーキが対峙していた。サヤの加入以来、何かと反常し合っている二人なので、

分かりました。剣だけということですね」 あんたと手合わせするのは初めてだし、とりあえず独唱なしでか

「って、途明故きって言ったでしょけ」 「一様く降れ、器然たる太明、白屋の埋めるは戦慄の色彩」 「こて、途明故きって言ったでしょけ」

なぜ避けるのですか 「しかも適用り」 断罪の自き担めまよ、 かの個人を確てつく永矢にて天上へと葬遣れ」

「やっぱ、あの二人をベアにしたのは問避いだったかもしれない: 報信のことの日 --心配した通りだった……。 あそこに狙って入っていくのはしんどい。

```
製はやめて日
                                                                                                                                                 ておいるやんか!
                                                                                                                                                                 「つらって何や、つらってり
「あーっ、ハンちゃん、彼ろ彼ろっ!」
                                  へえき
                                                 「ミイナだって!
                                                                 しゅいしんかり
                                                                                                (あっちはあっちで何やってんだよ---)
                                                                                                                                                                                    し、どめんなきらっ!
               情報的に言う。すると、ミイナはハンケイスの背後を指示して、
                                                                                とそのとき、先性どから休まず事態を繰り出してきていたくイナが、
                               じゃれ
                                                                                                                                                                 もしかしてわざと狙ったんかり
                                                                                                                                  - ね、狙ったのは
                                                                                                                                  か、髪の毛でしたし……」
                                                                                                                                                                    やとしたら、じぶん芸秀とコント
                                                                                何を思った小攻撃を止めた。
```

んなの偽りの気や!

2000

って、ヒぶん、佐ないやんかり

人が各々紋章術の頂練をしていた。

「も、もしかして(幻想)を応用すれば、女の子をわいに惚れさせることもできるんちゃう

ま、まるむち、ちゅ、チューくらいやったら、な?

へ、減るもんやないやろうし

〈風 写〉が是に何たるといやったで!」

サヤを内心で切いつつ、ハンティスは別の方角へと開展を転じる。グラウンドの間では、マロンとテャンクのニ

サヤちゃんボ水で濡れ濡れに!」 って、んな古典的な技に引っ掛かるわけが……」

4000 ミイナのことだ。思いつきで口にしただけに違いない。

ハンティスはほとんど条件反射的に、背後を振り向こ 分かっている。分かっているのだが

瞬間、目の隣にキランと充るミイナの膣が終った。

に(以炎師)の戦を前のように構えて考る元け业めた。 60つたあああああつ! 上半身を絞った体勢。このままでは、知るミイナの巻を続すことができない。そろと語ったハンティスは、

Sta

てて……さすがに破力だけは平断じゃな――った」 どんっ、と何かにぶつかったことで勢いが収まったが、 だが威力を殺し切れて、後方へ吹き飛ばされてしまう。 ろどろと数がった

すぐ目の前に、こちらを見つめてくる鍵膜や女の端正な顔があった。 起き上がろうとしたところで、ハッとした。

つる先日、 ちょっと、何やってんのよっ?」 (……ていうか、あれ、他のファーストキスだったんだよな……) そう高層で吸いた技女の、目と鼻の先の距離にある薄い紅色の枝に目がいき、 訓練中に堂々と聞いかかってくるとは、なかなかの発情間ですね」 いきなりキスをされたのだということを思い出したのだ。

シスリーネの上に乗っかっていたのだ。どうやら先ほどぶつかってしまったのは、彼女だったらしい。

にゃはははつ、引の掛かった引の掛かった~っ!」 っとだけ開待していた自分を応じるハンティス サヤが憤慨しながらこちらを見下ろしてくる。《髪水塵》を手にしたサヤは、やっぱり遅れ濡れなどではない。ち

ミイナが超しそうに駆け苦ってくる。

ハンティスは立ち上がると、概然として合けたのだった。 こりあえずいったん休憩に 2406

どうだった? 横内を歩きながら、ハンティスは隣をいくサヤに訊いた。 訓練を終えたハンティスたちは、ミーティングをするため、部隊どとに加り当てられた部隊至へと戻ることに-初めてだよな? あいつと学合わせしたのは」

10 th

にも消耗している様子だった。 ただの限立たしい変数かと思ってたけど そう函数さしてから、サヤは附合する。 サヤは苦々しい顔で頷く。枯鳥、あの後もずっとシスリ 主田町 難いたむ」

主能だけない歌をも都像に入れたかもしれない」

しかし、どとか浮かない様子で続ける。 辛口の彼女にして住給しい。予想以上の西洋値だった

「でも、だからこそ間しい。たぶん今のままだと、それなりのレベルで終わって 問うと、サヤは言葉を録るように なんでそう思うんだ?」

気ってるところはあるけど……。 ……ラーケ それはハンティスとしても以前から感じていたことだった。 ……やのながない? ううん ġ. ****ラール****なんていうか、心の深いところで冷めている感じかちょっと違うかな****。別に媚気ってないわけじゃないし*****まる

大心、野心、植物、目標 だが、大事なものが欠けているのだ。 でなければ、サヤが予加減してあげていたとは言え、あそこまでやり合うことなどできないだろう。 訓練には呉自曰に(?)参加しているし、努力もしている。をほどちらちらと二人の手合わせを見ていたが、

やがて二人は部隊室のある訓練後へ。話ながも歩いていたせいか、 そういった、助士学的に入学してくる者であれば大平が終っているであろう強い情報が、彼女には感じられない すでに他のメンバーたちの寄は見えない。先

ハンティスは思わず器屋養りを確かめた 催かに問いたドアの除間から、聞き慣れない声が漏れ間に ったく、汚い整星だち、元づけもロクにできねぇのかよ 一関に上がり、第29部隊の部隊室へ入ろうとしたとき 私様な口面だが、 女性の声だ

何となく入り至くなって、彼かめるようにそかっとドアの原則から中を見渡す。 サヤと顔を見合わせる。 そのはずだけど こと、俺らの部屋で開産いないよなー

6笑みを翔み、密行不良の生能といった印象だ。背後には, 長身で、やや自つきの密い程牒。現在の長髪を統則器で一本に纏めている。日元には相手 枝らと何時するように、見知らぬ少女 相変わらず散らかり故郷の部隊家には、すでにディンクやミィナ、マロン、 まるで女王に付き徒り特徒のように四人の名子生徒を おが戻ってきていた った不敢

ちが報列していた ジオンーシルベルスト、だっけり」 ハンティスは記憶を探る。どこかで会ったことがある気がしたのだ 温だ……や

88 ハンティスが思い出す前に、サヤが切いた

なっているはずだっ た統合でハンティスが打ち負かしてしまって以降、 昨年、第六位の成績でこの学院は人学した実力者だっ やたらと突っかかってこられた記憶があった。 好験的で負けず嫌いな桎梏で、一年生の頃にたまたまやっ 現在江



ia .

確かに、雰囲気とを違うが、鏡髪や唇膜など二人の容姿には共通点が多かった。 そとでハンティスはあることに気がついた その話をすると、サヤが怪話な顔でこちらを見て けど、シルベルスト、ってことはー 水と結婚ってことの

ž, ハンティスたちの疑問に応えるように、シスリ ……シオン結さん」 シスちゃん、お妹ちゃんがいたんだ!」

一あ、あたしち、知りませんでした---」

でシオンに関いかけた。 二人に「別ち、 ミィナとマロンが憩いて目を見くしていた わざわざ教える必要もないかと思いまして」と応じてから、シスメ 本はやけにあっ気をい日間

「おいおい、つれないじゃねーか、自の繋がった体妹だってのによ。久しぶりに妹の様子 「一体、何をしに果たのですかり ここは私たち第29部隊の部隊軍の位すですが」

一そうですか。現にそんなこと何んではいませんが」 シオンは少し皆立ったように間をしかめ、 後々と応じるシスすー き、質問からそういうキャラだが、 けつ、 と戦を明らした。 それにしても助に対す それから前隊場内にいた第29前隊の国々か 脳分と冷めたもの

「にしても、本当に雑焦そうな似らばかりだな」 聞いてのせつ 前を描すり、シオンは確実った。 ミィナが「むー」と口を実らせる まだ決まったわけではありません」 お前与へ今既・朝節 半年を続ってないってのによ

「モ、そうです……っ! こ、これから、ちゃんを控回していきます シスリーネが設止し、マロンもおどおどしながら主張した。

一はつ、どうせ時間の問題だろーが、無駄なことやってねえで、とっと 吐き絵でるように言うシオン。 シスターキは物情

「そんなこと、締さんが口出しすることではありません」

互いに眠み合い、結核の間に検察な雰囲気が漂う。

ああん?

そのときべ しなんら 20 チャンクが前に進み出た。

あまりだ子想の餌め上をいったせいか、シオンの口から変な声が耐れた。 わいを踏んでください」 だが切らしいことに、彼は怯むことなくシオンを育っ晒く見つめ、告げた。 シオンが販光を鋭くしてデャンクを城圧す なんだる る。質嫌の人間なら、

そのままの体勢で、デャンクはシオンににじり添っていく。 ぐしゃっと! ほも一思いにやったってくれ! 遠原せんでええから!」 一日見た瞬間から、その美術に請まれたいと思ったんや!」 気持ち悪い! おい、何を ń, 地面に同様をつくテャンク。我しく頃を先し出した。 こっち来るんじゃねぇ!」

ų シオンが頬を引き撃らせて統迫り、隊員たちがは々に原稿を上げる。 し、シオン騒兵 せめて、においだけでも現がせてもらえへんかーー・吐るはる」 お続けください!」「何る、この変態はひ」「シオン ち、近づくんじゃねぇつ… 4 48 mi

夢られ、 よほど衝撃的だったのか、シオンは短間まで発退していた。 吹っ残ばされたデャンクは床をごろごろと転がり、 思わずドアを開け放って存職室へと飛び込んだハンティスは、 いい記載にしる! シオン。うちの豚目が迷惑をかけた」 姓に歴史 微かに演目になっている

80 ななな、なんでお前がことにいやがる・・・つ?」 シオンがやたらと大きな声でこちらの名前を呼んだので、 ハンティスは困食らった。

教えてやると、彼女はしばし景気にとられたよ なんでって、传、この部隊の隊長だし」 なぜか戦励えている。どうやらハンティスのことを覚えていてくれたらしい。 な顔をしてから、

つーか、お前、いつの間にか形散みたいに解抜けちまいやがって まるそのは否定できないけど なんとなくりずとらしい味気だった。 it, itit, itititit!! まさか情年野路が隊長だったとはな! んだけ難い歌子ばかり集ま

一た、単に勝ち逃げは許さねえと思ってただけだからなけ」 シオンはハッとしたような顔をした。 どうから担何と心配してくれていたようだ

こりあるず、江気になったからいつでも応じてやるより ハンティスは得心する。どうやら一年生の頃の敗北を、 Septem Company そういうひとかし 米だに概に持っているらしい。

「はつ、今のお雨なんか、アタシの見元にも及ばねーよ」

シオンはそう切り捨てた。が、急にしおらしくなって、

一て、味さん ハンティスの根果を、 まるでも、お、お前がどうしてもって言うなら いい加減、早く出て行ってほしいのですが、とれから定期板に向けた

シスリーネが治たい声音で削り込んだ

妹の物言いに、シオンは顔を歪めて否打ちする

「ふん、くーティングか。どうせお前にはもう必要もねえってのによ」 ……どういう意味ですか?」 だが何を思ったか、不並に口角を指り上げて、

「我、持ってくださいっす、職長!」 間をひそめる様に、シオンは影味液な笑みを浮かべながら告げる。 もうすぐ解散する部隊が、わざわざ

それはそうと、今、総下で定期板の運営事務局の人からこれを買ったわ」 彼女たちと入れ替わりにサヤが入ってきた。少し祭れたような顔をしている。 ……妹に雄昭を言うためだけにきたのかしら」 隊員たちが間でて後を迫った。

えー、ミイナも見たい見たい!」 「原規戦の対戦予定表じゃないか」 それに目を落っ

ハンティスはアーブルの上に開観を広げてみせた - イナとマロンが駆け寄ってきた 一気 あたしも見たいです







前回の定期後の成績は十級九時。すでに中級の任務を何度かクリアしており、 |原則板の初戦で当たることとなった第12部隊は、決して関系な相手ではない。 大輪寮の解下を歩きながら、ハンティスは先はど見た対域子出表のことを思い出していた。 2個株 か 一年生辞院の中では上位に入る詩

……ま、相手にとって不足なし、ってとこか」 しかも第29落隊は、ハンティスポサポって参加しなかったその前間の定開版にて第一 海豚と破り、排放を吹

天信祭三緒の、北東に位置する角部屋、ハンティス・と、そこでとある部屋の前に拥着した。

そとはかつて、ハンティスが使っていた態度であり 中は静寂に包まれていた。 しばしドアの前で立ち止まって後昨時。夏を決し、 天騎祭三所の、北東に位置する角部間 ハンティスの現在の移程から見て、 ドアノブを配った そして、筋の自然体の除長であったけ

第二、その者が使用していた課屋は、軟年の間、空き食屋になるという決まりがあった。 そのため彼の紀後、同至だったハンティスは今の路屋へと移り、ここは現在、誰も使っていない。 騎士学院での訓練には様々な危険が伴い、咱には祝者が出ることもある。そして方が一、 トが使っていた舞組でもあった。 海機者が出てしまった

サースと過ごした懐かしい知い出が残るこの場所に、どうしても見を選ぶことができなかったのである ハンティスがこの協能を訪れたのは、その転回以来のことだ。

まるですぐ取くにいる友に語りかけるように、ハンティスは咲いた。 …リース。他、前張るよ、お前の分まで」

「宛はもう遠げない。----お前が作った部隊は解散してしまったけど、宛は今の部隊をそれに負けないくらいの部 こうして内び訪れたのは、先日の事件を経て、自分の中で過去への区切りがついたからだ。

日間は大きい。

だからこそ、教育技が提示した条件程度で描いているわけにはいかなかった。

これはリースの死後に分かったことだ。 (しかし、出身地が偽りだったなんてな・・・) 遊認なら遊散の元に送り届けられるはずだが、事情によりこの相所に保管されたままになっているのだ 故人の奇物が部屋の隣に整備されて誰かれている。 ハンティスは無人のベッドに腰掛けると、室内を見渡した。

はしくない事情でもあるのかと思い、ハンティスも詳しくは追及できなかったのだ。 何度か気になって訊いてみたことはあったが、その度にはぐらかされてしまったことを覚えている。何か触れて 思い器してみると、 実は学院に届けていた田身準や教後の股所が、100で出続日だったのである。 一緒に暮らしていたハンティスも、彼の家族のことを含らで知らない。

と、そこでハンティスはあることを思い出して、自身の左手の甲へと複縁を落とした。 軽照された荷物は、どこにでもありそうな礼版や小物はかりで、彼の田母を特定できょ įξ あらつなら

自然に関ってくると、ナヤが開ねてきた。

枝も逆け、そろそろ寝る時間だ。 どうやら思っていた以上に、あの移紐に長沢 曖昧に応じるハンティスに、彼女は少し怪評そうな顔をする。 …あし、まる、ちょつとな」

円心の焦りが伝わってしまったのか、じつ思わず心の中で自分に突っ込みを入れる。

総からは続いの名が明れない。 無駄にテンションが上がっ

歯った

るハンティスを傾回



いや、ぐるぐるというより、ぎゅんぎゅんと透視した方がいいくらい、浦い 一体はぐるぐると諸屈の中を回転し始めた。 レヴィアタンは炊のように理念をすいすい泳いでそれを楽々と回避。フェニックスは範囲して遊い駆ける。 フェニックスは甲高い声で怒鳴ると、レヴィアタンに突進を仕掛けた。 高位の意識なのだ。次第に空気が渦を巻き始め、風圧でがたがた。

短地じゃなり

「おいこら、フェニックス。喧嘩はやめろ。こっちに戻れ」 レヴィアタンもよ。戻りなさい」

I 注意されてようぞく追い駆けっこを中断し 不満けたそれぞれの主人のところへと戻って

もう夜遊いんだから最れ回るなよ

屋くはし 「大を馬鹿にしたあいつが思いのよー

もうやめなさい、レヴィアタン」 サヤがレヴィアタンの尾びれを積んで宣う

「つーた、眠いんなら早く寝る 「何するのよ!」 「いい気味なのぎゃった」 ハンティスもフェニックスの首根っ お胸ちた 眠くなんかないの!」

人のそれとは少し目的が違うらしいのだが、 じたばた暴れて否定するフェニックスだったが、その輸は今にも落ちかけていた。 どうやら産家たちも定期的に 10,0

「れ、眠くなんか……ふぁあああ」 5次伸が出たところで、フェニックスはゆっくりと消えていった。

そうだな さしずめ、他とすやは 祖位の意識って行っても、 一方のレヴィアタンもサヤの手のひらの上で横になり、 んし、さやし、ぼくもし、げんかいい……」 四とんと子供ね

(なあああるんて恥ずかしいこと言おうとしてんだ 窓の向とうに始める隣種の移居も、 真っ素になっている前を見られないようにしながら、ハンティスは頷いた。 父親と世親だな 言いかけて、世てて続き句を飲み込んだ 55 もうほとんど明かりが消えていた。 よ後はああああるつ!!)

がらし、 院際に慣れるまでに時間がかかる。 しばらくの間は、隣でもそもそと動く音がしていたが、十分ほどもすると終かになった。彼れていたのだろう ハンティスは光章室の紋章が刻まれた極明器具に手を添えて、明かりを消した。外からの月明かりだけが室内を おいおやする

意義していた別にはすぐに限ってしまったらしい。 という総旦が節衽の中で掛かに関こえてくる。 一十十十十二

一方のハンティスは

催引に視線を進らし、頭を握らして微念を振り払おうとする。 べ、別にパレないんじゃないか……す 月光に照らされた可憐な様が見えた。思わず魅人ってしまう。 ちらりと挑縦を向ける。 んん、とサヤが色っぽく吐息を飾らしただけで、体温が上昇して汗が出て ドキドキしない方がどうかしている。 すっと恋い鬼がれていた相手が、手を続けせば帰 01207 た田様で眠っているというこの状況

眠れない。

やがてウトウトし飲めた頃には、すでに外が明る 一向に扱つけないます。ただ時間だけが過ぎていく。 が、一度脳裏に焼きついてしまった彼女の寝前が、何度も頭を通った。 たり始めていた。

カーテンの向こうから注ぐ目並しが、ダイレクトに傾に当たって眩しい。あまり飲れた気がしないが、どうやらもう鳴らしい。 チュンチュンと小鳥の明る声で、ハンティスは目を覚ました。 3

間やかな困難がそこにあった。 その正体を確かめようと、 何か柔らかいモノを指き締めていることに気がついた。 ゆっくりと規模を降ろしている

思わず心の中で絶明してしまう。

(ど、ど、どういうことだられはけ なんで俺がチャのペッドに!! 半ば抱き合うような格好で、彼女と一緒に投ていたのである。 -544 指される!!)

サヤが俺のベッドに助手に適り込んできやがったんだ!) に自分のいる精液がいつも

のペッドの上であることに気がつく。 (いやこれ、総相が思いというレベルじゃないぞ……) (でて、遊り! ----もしとの状態で目を覚まされたとしたら そう目えば、以前、アルレナからサヤの説相がかなり思いと聞いたことがある。 眠気など一瞬で世界の果てまで吹き致んで、パニックに陥るハンティス。

(SやSやSや! 冷器になれ!) そう自分に言い関かせ、ハンティスは拘束からの限出を試みる。 と一時、血道いそうになったが、慌てて首を左右に振った 密着し、近いの体型が遅い合う。技女の理算から、 そのときナヤが飽めかしい声を振らして、腕をきゅ

やたらといいないが思ってきた。 っと強く終めつけてきた。

もうこれ、別に死んでもいいかも…

れている彼女の鯛を外そうとして、 Ŷ 売手はサヤの身体の下にあって、現状まったく動かせない。まずは自由になる右手で、 まずはとっちの腕を引き動がさないよー

えんん ij 暇晒に彼の小さな身体を右手で摘まえ、彼引に口を進く 何の前触れもなくレヴィアタンが姿を現したので、 わし、さぞし、おそわれてる!

れ、悪く思ったよ ř

```
「うわーん、きやがし、けがされちゃったー」
                                                                                                                                          「あたあたたちあたちあるあるあるあるあるあるあるちゃっけ」
                                                                  あまりの大音量に、ハンティスは思むず掘り締めていたレヴィアタンを取して
                                                                                                         いきなりそのフェニックスが、耳をつんざく凄まじい咆哮を上げた。
                                                                                                                                                                           いいととろに来てくれたっ。フェニックス、レヴィアタンをしばらく押さえて
                                                                                                                                                                                                                   しかし主人の危機を指揮したのか、今度は大きな欠待をしたがらフェニックスが出現した
                                 ヘンタイヘンタイヘンタイなのーーーった」
```

万事体す。 (って、右手を使っちまったらもうどう 食が糊かっているのだ。手の中でもがくレヴィアタンにそう告げて、

ハンティスは吸出を再開しようとする。だ

さらに不幸を事態は続く。 ハンティスが仮枕に落ち着かせようとするも、 で、やめろ! これはそんなんじゃない! 二体の軽減な需がわんわん物きながら部屋の中を飛び回った。 起きちまう! 彼らの大騒ぎは収まらない。

マロン。もの女がどんな対策を練ったのか分かりませんが、 1 ベッドの上で指される

このタソ雌犬があああっ!」 ハンティスが非解しようとするも、 遊っ、こ、とれは……っ!」 シスリーネとマロンが部屋に入ってきて、 もはや程かった

人のこと言えないだろお前らり」 二人の総明が贈を踏る。 ふふふ、不関っ、不関ですうううっ!」

く、思わず感情り返してしまったそのとき、ついに様れていたととが起こった。

恐る恐る視線を下げたハンティスと、目が合った サヤが歌かに歌を上げながら、薄らと絵を聞く

根後には情報の炎が指っていく。 まだ焦点の完まらない違ろな無い輸出、最初は高端の先が

一大 神で! **サヤの転行と、続くハンティスの販工庫の時び声。** 間客無用のつつ!! 死になさいつつつつつつ!!」 話をば分かる!」

あまりの大音量に、まだ夢の中にいた天鶴葵の全寮生が叩き起こされたのだった。

学院構内を歩きながら、サヤがパラが思そうに言ってきた。 との前は密かったわら、姓んと」

あのとき怒句の直後に飛んできたのは、傾国への隊身の石ストレートだった。 あれはもう何を言ってもダメなレベルだったと思うけどな… でも、わたしが程度けてあんたのベッドに潜り込んじゃったんだって、吐っきの

だと助かる……」 ベッドの間に仕切りも置いたし、もうあんなことしないはずだから」 |され、めちゃくちゃ脳かった。すぐ治療してもらったが、たぶん器骨が折れていたように思 **斬り殺されなかっただけでも幸遇だったと言えるだろうが、それでも姦迫を噴出させながら撑段の境**

学院内で最も大きな規模を誇る建設物 人はある場所へと向かっていた。

しかも電方の消耗が放しいことに加えて扱いが難しく、なかなか制御や制減ができない。そのため若木的に人間 あれで存得意識の力は反同級に強大だっ 分かってるわ。アルレナからも言われたし」 フェニックスやレヴィアタンを使うのは禁止されてるからな」

そとが、今日からおよそ二週間にわたって関係される正開戦の会場だった。

相手に使うのは禁じられており、それは定期戦でも何外ではなかった。 準備はいいか?」 技術に着くと、すでに他のメンバーたちが集合していた。

ハンティスが推進すると、ミィナが元気よく呼び、 CHESTER - BORN のの「整張しまひき……っ!」 **、彼いたくて、さっきからずっと腕が抱ってるよ**! 腕をぐるぐる回した。確かに、ぶんぶんと鳴っている。

すから。ああ、そう言えば、試合中の過剰な数値は禁じられていましたね。それなら夜中に落屋へ表び込んで、遊 大丈夫です、 マロンはがちがちに眺まっていた。 マロン。もしあなたに攻撃を加ふるような繋がいたとしたら、数秒後にはそいつの首が飛んでいま

目を描くことにしましょうか」 ……あんたが言うと名談に聞こえないんだけど」

わいの活躍を見せつけて、女の子のハートを管摘みや!」 いつも適ちのシスターネに、サヤが日を平開きにして明く

フィールドへと図から。 しばらく行機していると、傾負から声がかかった 第39落隊、時間です。後悔はよろしいですか?」 一番気合いが入っているのはデャンクだった。動機が明らか

54-620

口砂が敷き詰められたフィールド。 人場口まで来たところで、マロンが朝廷な声を上げた その時間をぐるうと問む

ていたのだ。 どうから学院の関係者のみならず、未来の紋単橋士たちの様姿を一二さんと、

「おい来たぞ、 きすがにこれだけの窓目の中で喰うのは、ハンティスも初めての経験だ。 帝(の祖の知を経)

「うっさいわ、ドアホー わいの特別の成果を見せたるわ!」 一あいつら地下連四攻略するのに、一か月以上もかかったんだって?」 「本当かよ。あんなとら、一日でクリアしちまったで」 観客間にいた学院の生徒たちの関から、そんなように聴力す

あんなの、適当に受け流しておけばいいのに」 デャンクが気炎を上げて明みつく。

注がれていないが、慣れているのか遊核としている 確か、ついとの間、単独で動電を倒しもまったらしいぞ」 そのと意及対側の人場口から、 サヤが冷めた口調でデャンクをたしなめた。その様女もヤマタイ民族といる 2.新味だ 対統相手の存録が入ってきた。

「それ、どう考えても最高部隊に絶対勝ち日ないじゃないか。ま、どの相手でも一切か」 相手器隊の一人が、売やかな微笑みとともに合けた。 石たちの篠田と喰りのは、 隊員数はともに六人。そのため人数測録は必要ない。 そんな下馬許が聞こえてくる中、二つの部隊は立いに向かい合う形でフィールド中央に修列 これで一度目だね」

ちなみにデャンタへの応援の声は「現ない。 だけど歯団、君たち二人はSなかったよね?」 続けの長井で、美少年という形容が似合う。一きゃし、 ノエル様あるあつ!」と、 報名院から前色い内様が横

```
それでは、試合を開始する
                                              手を難して謎を返すノエルの背中に向かって、
                                                                                                  能を弓なりにして、ノエルはそう言い放った。どうやら紳士的なのは衣室的な態度だけらしい。
                                                                                                                         前回同様、圧倒的な力の差を見せつけてあげるよ、最高体験」
                                                                                                                                                     社団象を抱きつつ、それに応じるハンティス。だが互いの手を関り合ったその瞬間
                                                                                                                                                                             ああ、よるしく」
                                                                                                                                                                                                    そう言って遊み出てくると、何とも終土的にハンティスへ関手を求めて
ハンティスたち出る3階隊の定期戦初戦の大震が切られた。
                                                   かいた
```

そうか、彼は陽長のノエル=ノースターク。今日はよろ そうだな。検が縁長のハンティス=ハーミリオンだ」

よかっしゃあある! 審判である教育の会国で、 そイナが塗攻。数単型の紋式式技(製明ノ潜車)を顕現させ、全張力で数陣目がけ吹っ込んでいく。

ハンティスは耐をひそめて味 その後を、サヤ、シスリーネが辿う。ハンティスは様子見と理能を設ねて、 例のどとく 動かない?」 マロンとデャンクのいる後者に位置

だが遅かった。 サヤが何かに気づいて、声を張り上げ から いっしんだっ 相手部隊の全員が、開始線から一から動こる ミイナ! 止まって! とハンティスが詳し んだそのとき、 しないのだ。広戦のための陣形を組む 無は間にたが

然かなる年勢に接続の鏡帽を」

高く技能の響動めき、存て大地を それは天の彼き、項を配せ、基かなる京勢に抑減の鈴切を 極悪の間で握い尽くせ、大地も、指も、 高く飛揚の皆動のき。空て大地を 握のじゃく 空も、全ての時が

施密の間で強い尽くせ、大乗を、添も、空も、全ての時だ

「へんている器

に+ありし 巻き起こった後と水と水の泉戸合明が、フィールドに吹き食んだ。 **周系第三所代収卓術(基施)、水系第三所代収卓術〈唐布〉** ノエル部隊の六人全員が、一斉に被罪副を増かせたのだ

* だがますがの彼女も、咄略に放った第二階位程度の紋章指では、 後女は無味噌で、水系第二階位校幸術を何力に受動。 戦時に向かって先頭を駆けていたミイナが各兵込まれる寸前、サヤが潜り込む E 押し寄せる水の遊波を、 六人掛けの紋章術の前には成す術もない。その

へたち後指のところまで迫ってきた ぞうじて回難していたシスリーネのすぐ輪を駆け抜けた水の津波は、バキバキという総言を奏でながらハンティ まくイナと一緒に永の津仮の総会になってしまり 一般ないととろでした」

問題の末続を有き数らした。 うわあある、寒いよ~っ!」 原数を受けた 律改はすぐに改姓を失い、氷結。フィールドを同断し幾つもの氷柱が林立した。 唱唱に左右に分かれて水漬けを避けるハンティス、 その内の一本の内部に閉じ込められていた。 津波は被方の戦に撤突して強け、辺りと

```
音響により前後二人の無力化に成功したノエルが、
                                                                ははは、その呼ぎの水を短時間で破壊することなんで不可能だる。これで後は四人だけ、他気もないね」
                                                                                    思いまり水を殴りつけたくイナが皮術を上げた。
                                                                                                        でもしれくらい でもああある
                    大気を読わすは熱唱の響き。場ぜ……」
                                        野を売めて楽しげに笑う
```

「ちょっと、暴れないでよ、狭いんだから」

商系第二回位就収前 (級、万)だ。 核女を狙って、風の刃が微楽してきたのだ。 特個から夜をぶつけて海解させてやれと思い、 諸昭を始めたハンティスだったが、 会館な

だが体む暗なく、次々と風の刃が飛んでくる。 ハンティスは関現させた紋章武装(鉄長側)で、それを動物

二人の除員が同時に、しかも無は明で連載発動してきているのだ。

マロンが同じく〈風、刃〉で応敬しようとする。だが、その狙いは大きく外れて観客店の方へと飛んでいき、監 一発一発の成力目体は大したことはないものの、お助でハンティスはその場に釘づけにされてしま あ、あ、あたしが攻撃をニーつ! 析り裂け、残忍なる隣の何刀よ」

別の教育によって撃ち落とされてしまった。 動長させる環境だった。 相関わらず、地ったときのコントロールは最更た。しかもこの窓口を浴びている状況は、彼女にとってより緊張

「通げ鞭でなに仰そうなこと言ってんのって感じ。つーか、そのテーベル、紋攻武袋ですらないし。チョー 「こ、ここはおだい引き分けつちゅうことにしとかへんか? お、わいは女の子とは戦いとうないんや!」 一方、氷柱の反対側へと分削されてしまった。デャンクは、相手高隊の少女と破破を繰り広げていた。

んだけど デャンクの関系の収章術は使得だが、誘唱には集中が必要だ。 情間の紋章式装を式器とする少女に容積なく攻められ、チャンクは暗戦一方だった。 関係なく攻め続けられれば、死動することができ

「あかん、わい、女の子に攻められてヨーフンしてきた さらに、津波から巡れていたシスリーネへ、鞭を手にしたノエルが攻めかかった - ホーシルベルスト。君は惟一人で十分だよ」

を超い詰めていく。 時じい窓形型の武装。その名の通り、近距離なら倒、 これが他の紋章武勢、《水鞭新》だ」 概から何へと変化したそれを(味給剤)で手うじて気け止めながら、 形状が変わったり」 中球離れ ら鞭と統帥に使い分けながら、 が製物する

シスリーネが体勢を楽している際に裏早く炸躍を詰めたノエルは、 唱切に身を胎めたシスリーネのすぐ頭上を、ノエルの観が態度

今度はシスリ

ネに斬りかかる!

観客間の開味はずでに次の試合へと移っていた。 終わったな」「まる、予整確りだな」「次はどことととが報うんだっけ?」 開始数十分にして、以くも追い込まれてしまった第3多部隊

誰もが整成して目の前の信じがたい先並に息を合む。 突然、壊烈な音が響き進ったかと参うと、永の表面に一直線の切れ込みが走った

「は、はい、せんばいっ!」 「それでいいんだ。観客に見られているのを意識してると、お前はいつも以上「で、でもそれだと、なにも見えなく……」 吸を繰り返している。 「ちょっと、ちゃん付けで呼ぶのはやめてよ」 少女二人がどうにか収まる程度の狭い空間の中で、サヤが目にもままらぬ速度のるだろう分厚い水を斬り張いてしまったのだ。 「う、嘘でしょっ? といつ、いつの間に検察をつ 650 「ばーか、あんたごときが、あたしの相手になるわけないっしょう」 **「だと思うな。純資中だと思うんだ。攻撃はすべて俺が助いでやるから」** 「そうじゃない! 目を誤って軟章調を唱るろって意味だよ!」 絶を閉じ、緊張の面持ちで得を求めてくるマロン。 「せせせ、せんばい……っ!! あ、あたしだって……っ!」 Jun + spage-そこに値かれていたのは、国本性を使後するための収率 次の瞬間、デャンクの足元の境間が担く元った 国系第二級位就章第一 (255)やー」 相手に嘲弄されるも、しかしテャンクは声高らかに告げた。 逃げ逃ってばかりだったチャンタが、いきなり不能に笑って宣言する。 そろそろ、わいも攻めに転じる者のようやな」 マロンの〈暴規〉が完全に圧倒していた。 二人は慌てて何じ(蘇規)で必能しようとするが、 現来する 《風 万》をいとも智易く様を消し、二人のは昭省の元へと前 第三時的収容的(最携)だ。 それは天の我き、焼ぎ倒せ、燃かなる市勢に神輿の鉄糧を 力強く応じて、マロンはぎゅっと目を閉じた 盛大な精道いをかまず彼女に、ハンティスは慌てて双比する。 ハンティスの言葉に、マロンが日を日里させた。そして茹でられたタコのように顔を残っ志にして マロン、日を囲れ 二人の頻繁りにマロンが裏起。だがまた実践したらどと ミイナ、あるんど、サヤちゃん! 大、大、大ふっかーーーつ!」 キラキラと脳光を反射し水の結晶が放乱する中、拳を実き出したミィナが反撃の聴燃とばかりに呼ぶ サヤの朝祭によって大きく強度を落としていた水柱が、ミイナの一架を浴びて今度 大きく振りかぶった体身の挙が、大声とともに永の壁へと叩き付けられる。 サヤの目配せを受けて、それまで検索の邪魔をしないように大人しくしゃがみ込んでいた。 わたしの(雙水震)に斬れないものなんでないわ。 愕然と目を動くノエルに、側翼を停止したサヤは平然と言ってのける。 その一刀一刀が、永に無数の何り傷を加んでいく 美しの何の舞い まさか?! あの即さの水を斬っているだと……っ?」 zξ その、せんばいが握むなら、あたしは 押されてるっ?」「とっちは二人掛かりなのに… ひひて、ひんをむきに何を… --後はお願い、そイナ しようと思れているのか、なかなか診明に入れず、 し、しかも、こんな大勢の前でつ

やられながらも、デャンクは秘かに自らの足で増固に収改を削んでいたのだ。

体肌のために精御集中する必要はない それが密を残んで少女を振う。幻覚でも見たのか、いきなり「いゃあああっ! 発生したのは、 思い時

して日を使った。 仲間たちの苦酸を見てとり、いっそう治療にシスリーネへ攻めかかろうとした! くその、早くというを片づけて一」 エルだったが、

当を上げてその場にしゃがみ込んだ。 チャンクが「髪のことは言わんでくれり」と味る

あたしの動があるあっけ」と感

「は、僕の(水器紙)が渡っている… (水蛭州) が特元まで完全に大結していたのだ

意味させるなれ世できない。 「何つかなかったのですか? 私の武装に触れた部分から、徐々に復結させられていたととに」 シスターネが冷ややかに合ける。ノエルはすぐさま何型へと密形しようと試みるも、凍ってしまった腹の形状を ネが影響を詰め、(体結(値)を接続ぎに一閃。それを凍った競で受け止めたノエルだったが、交替した

ての瞬間に鞭の左端が折れ、くるくると宙を舞って地面に落下した。 想完外の理続に、ノエルが声を破壊かせる。 使てて後回し私助なっ……こんなことが……」 私間なっ……こんなことが 残る際目たちに声を張り

早く僕に加勢しろっ!

彼が振り向いた先で、他の除員が一人残らず気を失って倒れていたのだ。 ノエルが絶句する。

Ag. 44, 「ミイナの哲学は一撃必殺!」 残っていた開員たちは、 こんむもんだろ そして、ハンティスによって景気なく全滅させられていた。

始気らないわね」

「气 路巻だ

支だ続けますか?」

BOT, シスリーネに切っ先を突きつけられ、 始のの話題でに ノエルは悔しげに初を暗みながら両手を上げた。

資利の声がフィールド内に響き渡った

おいおい、どうなってんだよ! 「まさか、最低関係が持ってしまうなんで 先ほどまで第38前隊を結構にしていた生徒たちが、日の前の先輩が似じられないのか、日を見聞いて光然とし

フィールド内では駆けつけてきた医療テームが、敗北した部隊の者たちに命道政政治を除していた。

おい、進だよあの胸のでかい美人----」 洗い紫色の長い壁に、同色の瞳。外質の上からでも分かるほど程次の富んだ軽体が、 そんなざわめきの止まない観客間に、残寂を練り美女が照っていた。

「うわ、ほんとだ。パレット教育よりプロボーションいいんじゃないか?」 その機能的な終から、残念そうな声が寄れた。 彼女の存在に気づいた生徒たちが森島を深くしてじろじろと見ているが、 ……ちょっと相手が弱すぎたわね。せっかく彼の力を見に来たのに… 93

それでもどこか少し商足げに立ち上がり、彼女は観客店を後にする。 超後までフィールド上にいる 一人の少年へと注がれていた。

ハンティスは静かに目を振り、 交がようやく日本出してきた頃。 誰もいないグラウ

```
しゃも思い出させてやる」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「十三日四敗五分だったっけ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             「なんでお前がそのとと知ってんだよ!!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              いくせく
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  「……べ、別にそんなんじゃないって」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   「あ、あいつとは、部隊の訓練でやってるした」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「でん、とっくんなら、あいて、さかでん、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    でしても強い相手と特別をすることが手っ取りないと考えたのだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              おてない。 精光統一だ、精光統
かつての同僚に、
                前は同じ部隊に所属していた。
                                 マーテオア学院騎士団第54代団長
                                                 早朝から軸分と前張りますわね」
                                                                  プロンドへアの少女が顔を覗き込んでくる
                                                                                                                       ハンティス
                                                                                                                                                                                                             うおおおっ!」
                                                                                                                                                                                                                                 経口を交わしながら脱み合い、
                                                                                                                                                                                                                                                                                   かとは、わずれた」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        そういや久しぶりだなっ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         業な芸の力を信りて顕現させた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             ムストリアもまた、紋球武装を出現させ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              ハンティスはその背近ちを込めながら
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              ムストリアは、えへん、と胸を振った。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        お雨、カマかけやがったなり
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  ふたりまり、はずかしい?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        語々の事情により、ハンティスにはロクに訓練を
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         被をこんな時間に呼び出したのは他でもない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               くっせけんな
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   後は欠律を唱み取しながら、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    現在は一つ上の二年生であるが、かつてはハンティスと同
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     マーテリア学院精士団副団長、ムストリア=ムファーレだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         やって来たのは、身長二メートルを超すかという巨関。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         不恵にこちらに向かってくる足官が関こえ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          辺りには静寂が満ちている。朝護が立ち込め、寒気で成腰が
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             205
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               せいちょう
                                                                                                      した地面の上に二人そろって母を音
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        お明と何を欠えるのは
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              PH45
                                                                                                                       お扱れ様ですわ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         大朝根の (大連略語) だ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              ($50CE)
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   2 Seo #10-1
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         ハンティスは節を開いた
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              を顕現させた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              とんな様早くに
```

四回を水々に獲われた、学院敷造の増ってに位置する第1

120 「なんだか、懐かしいですわね」 「プランタがありながら引き分けただけでも、十分かとわたくしは聴いますが」 8 近いに悔しがっている二人を見て、アルレナはくす アルレナはにっこりと微笑んだ。 もうれつに、くやしい。 はんていすごときに、かてないなんて」 ムス相手に一勝ちできなかったなんて、正真全然ダメだ。 少しは前を取り戻せたのではないですか?」

なんだ、アルレナ。見てたのかよ

それから少し活調を変えて

はずだった 実はハンティスは、自前の(財表部)だけではなく、亡きなから受け継いだ銃剣型の紋肉 もう一つの収収的報 一行人明治 もう一つの紋章官製はど

一一使えないす! ē 「実はあれ以来、使わうとしても使えなくてき」 決まり形そうに頭を掻きつつ、間す必要もないかと思ってハンティスは合けた

そうでしたか んいなくなってしまったわけじゃないと思うんだけど - ああ、何度か呼び出そうとはみてみたけど、ウロボロスも安ち アルレナが可愛らしく小首を網げる ないんだ

「あれが使えさえすれば、ムスなんか敵じゃないんだけどな」 ムストリアが静かに対策の声を上げた

それからしばしの認識を挟んで、ハンティスは口を聞いた。 二人は立ち上がって、アルレナがグラスに入れて持って 生を認るようだった。 2

ş 34 と、アルレナが笑声を描らしたので、ハンティスはむっと前側を否せた。 **男夫を質問に、アルレナが不思議そうに目を終かせる** ……なる、アルレナ。隊長に求められることって、 ちょっと聞いてみたくなって いきならうし どんなどとだと思う?」

ハンティスの言詞を言葉に、さすがに思いと思ったのか、アルレナは言語口な顔になって縁い間に手を添える。「こ、これでも反答してるんだよ。歯のせいで、あいつらに連絡かけちまったし、……だから、頑張りたいんだ 「姓んていす、がんばってる」 本当に様そうだったというのに 「だって、あなたがそんなことを考えるようになったのかと思うと、 一おい、何が可笑しいんだよう」 二人から誰かい視線を向けられたハンティスは、恥ずかしくなってそっぱを向いた。 しく思いまして 頑張りたいんだ

「火火。たとえば似朝のおけない隊長から発令を受けても、隊員たちはそれを忠実に逃行しよ は難? 「そうですわね……。大學なことは幾つもありますが、やはり除員たちに似刻されることでしょうか」 とは思えないもの

F 確かにあいつら、いつも本当に自分勝手に動くよな

、時々ワザとじちらの指示に替いた行動を取る機があった。 姓とんど会員じゃないか。 いや、サヤも基本的に民間な性格なので、大阪は目分の好き

様形が零れる。 ・つまり、俺は信頼されてないってわけれ

そう言えばリースは、本当に仲間から信頼されていたよな 細きながら、ハンティスは前のり体隊のときのことを思い出す。 次地にも

をしていれば、自然と付いてくるものですから」

ですが信頼というものは、相手に過速して得られると

して他応しい版る舞い

いくことができたのだろう。 だからとそ、あれだけ我の強く、結成当時は目も当てられないほどパラパラだった陳貝たちが、

分が武山あると思うことがよくありますし」 その悩みはわたくしにも分かりますわ。正明、わたくしもほ そう、だよな」 それを推したのか、アルレナ技計う。 しかし彼のようなことが自分にもできるのだろうかと、不安になる。 ースと比べてしまい、 自分にはまだまだ思らない様

分が、すぐに隊長らしくなれるはずもない。一歩一歩、崩逝していくしかないのだろう。 单 ハンティスは神妙に悩いた 間長を務め、自身の率いる貧陰でも数々の成果を挙げている彼女でさえそ

「いえ。また何かあれば、 ありがさな、アルレナ。 いつでも声をかけて下さって嫌いませんわ」 相談に乗ってくれて」

一では、わたくしは戻りますわ。これからテルクルス助士団の水器に行かをければなりませんので」

- ええ、実は、第一路区で事件があったそうで 「キルクルス略十回に? アルレナがどこか浮かない顔をして言 何かあったのか?」

アルレナはそう前置きしてから、教えてくれた これはまだ公にされていないので、誰にも言わないでいただきたいのですが… 別をひそめで別き返すハンティス。第二地区と言えば、 貴族の信用が多い高級住宅地だ。

伯牌が殺された……?」

3810 担宅の一室で発体となって発見されたのだという。 思しま自然が残っていたそうだ。 **キルクルスの領主であるアルスペル公。その側近として忠政にも強い影響力を有していた伯爵位持ちの資務が、** それを聞き終えたハンティスは、思いのほか推奨な内容に聞いた。 形数の整備は総変だった。しかし、整備に就いていた紋型精士たちは全滅。形数内には何者か との際した

「上統稿士までやられたとあれば、稿士団としても込券にかかわる問題だな」 「ええ、立場上、恨みを買っていた可能性は十分にありますわ。あるいは過激なクロ組織か、他国からの助政者か……。 いずれにしても、相当な手続わがいたのでしょう。 上級粉上までが殺されたそうですし……」 「組入たちの正体は分かってないのか?」 それに----相手は集団ではなく一人だったと、生き残った程敷の使用人からの目壁前報もあり

には信じがたい。 果たしてこれは個然なのか、それとも やけに物騒などとが、立て続けに起こっている。 開物, 胸の鬼に何かが引っ掛かったような。 上機筋士は、助士団の中でも小院長以上の実力者のことを助す。 そして唯人の襲撃。さらには今回の事件 まわか ちゃちゃん それをたった一人で返り討ち

こっよし、じゃあ、他たちも

なを検切ったからだ。 用張れよ、 就存な書きを伝んだ声が困り 気にせず通り過ぎようとしたが、想わず足を止めてしまったのは、 と木々の向とうから人の話し声を聞いた気がした。 どこに行っていたのかと試かれたらどう応えようか。そんなことを考えながら賢へと通じる道を思いていると、 思いのほか自然したせいで、少し長引いてしまった。 二人と別れて、ハンティスは聚へと戻ることにした。 48 えてきた サーも目を覚ましている頃だろう 何の陥光を投射して知めく 美しい鍵の壁が視

そうする。 はらへったし。 しょくどう、ちょっこう 」

あなたもわたくしと一緒に行く予定でしたわよね?」

とんか親叩くに呼び出して、一体何の用ですか、練さん?」

関は一義 シオンは不満げに行う。 祖様、勝ったみてえじゃねぇか」 シスターホは鮮のシオンに呼び出され、 校舎の間に位置する中間に来ていた。

連手は、大中が選挙になってるからな」 「そうじゃねぇよ。アタシは、お胸がとっととこの学院を辞めるべきだと思って **値分え不服そうですね。そんなに私たちの部隊が解散してほしいのですか?」** 部隊が解散しちまった

何から言ってるだろ? ちぜそうまでして私を辞めさせたいのですか... お前は紋単騎士には向いてねえってよう

州っ先に反対してきたのは彼女だ。最終的には押し切って入学してしまったが、

徐かに、総は以彼からシスリーネの人生

辻思っていなかった。騎士学院に行

いずれ詰めてくれるだろうと思っ

家務の中で

ていた なのに、どうやら人学して単年が終った今で 米だに考えは変わっていないらしい。

騎士になってから用職する後率が高いってことをよ 総章騎士には、 (まったく、どれだけ頭目なのですか そんなこちらの心中などお構いなしに、シオンは言う。 シスリーオは内心で喘息した 強い似しかなるべきじゃねぇ。お前だって知ってるだろう 騎士学院の 竜城紬が悪い奴ほど

「お前は今まで、アタシに一度でも誇ったことがあるか? たところによると、大した差はないのだが。光光 それはもう耳にタコができるほどに関き始きた、 一貫した幼の主張だった。 就後に載ったのは確か、 入学直後だった 本が自分で調べ

か。アタシの圧勝だったよな」 (圧時? そのときの表情が、シスリー 何も知らないで… 十の間景を贈る

「まるいい。今さらそんな話をしても無駄だった。どうせお前はも とちらの鏡い反応を振してか、シオンが大きく問題を吐く それにしどうしてか、真実を伝えるのに抵抗があった。 今としてそれを伝えたところで、動が動物するとは思えない。一笑に伏されるだけだろう 口をついて出かけた言葉を、シスリーネは苦い感情と一緒に飲み下した。

切り出された不動な対策に、シスキ ……どういうととですか?」 やは阿根を寄せた

ねえんだからなり

「お気様からの……?」

90 さるな。アタシもつい町日、手紙で聞かされて知ったんだよ 「ルトーゼ家から縁根の話がきている。お前を嫁に出したいから、学院を辞めて実家に扱って来い、だとよ」 の自分に自利の矢を立てる期由が規解できない。 1000 なぜ気にそんないとを……つー」 シルベルスト家には、シオンとシスタールを含めて五人もの錯昧がいた。 けれど、縁組なら他にも遊信がいるでしょうひ。なぜ私が シオンは目を締め、ぶっきら棒に応える。その区応に慎りが暮った。 シオンの鍵が向は、シスリ 故郷の厳格な父親の顔を思い出し、シスリーネの胸中で不安が加速する。 二人とは関道いの長姉は、ちょうど結婚提齢期だ。その彼女を差し置いて、 ネの予想を大きく超えるものだった。思わず身を乗り出して問い詰めた。 わざわざ橋士学院に通ってい

就を吊り上げ、思わず怒鳴りつけていた アタシが伝えておいてやったよ 思い当たる語があって際はするシスリーネに、シオンが影場的 ……な、なぜお父親が私の成績のことを……まさか シオンが明かしたその内部に、シスリーネは自感を覚えた。 の通わせるのは厳しいんだよ」 うちの一致は貴族とは名はかりの貧乏貴族

正貞、紋型騎士になれる可能性が低い鏡を、高い学費を払って学院

シオンはそれを窓に介きずに、平然と言ってのける。

「今さらどうしようもねまよ。しかも利手は子段家の除職を、あそこに続けば、きっと何不自由な 恐れるだろうよ。紋章騎士なんつー危険な仕事に就くよか、遣かに負い人生だと思る 「報報を助ったのですよび 検回する可能性は十分にあるはずです!」 一理かれ早かれ、伝えなくちゃならねえんだから一緒だろう」

哲を唱み締めて、シスサーキは前を伏せる。 だが、あの父親がそう決めたとあれば、それを指すのは皆易ではない 助于なことを、とシスリーネは内心で吐き捨てる。

そのは限を

- 承と取ったのか、

シオンは網足を

本人は納得したと、親父にはそう保旨しておいてやるよ 完整戦の第三 残目を残っていた。

ハンティスたち従る自然時は

ミイナが怒号ととも忙練り出す、幸の進行 どりゃあああっ!」 一気叫成に攻め続け、徐々に相手を迫い詰めていく。

一人製蔵っ!」 相手は大きく宙を舞い、フィールド端の壁に叩きつけられて気を失う。 しかしてイナは紡御に回るどとろか、 征収に耐えていた相手が値りを認わに叫んだ。分型の紋束式装がより強い風を纏い、乾地一振の戦撃が放たれる 1000 続めるなっ!」 前への間一般のとこ ろで刀を消り続け、 数指に係存の一部を見舞った。

だから戦闘中はもっと問りを見なさいって、前も言ったでしょ! 紋の切っ先がすっぱりと切断され、街を行って虚空に消える。 原郷を吞びた他の刺突が彼女に迫る。 だがそれようも一瞬早く と、快哉を味ぶてイナだったが、そのすぐ存後に酷殺 水の刃が照めいていた。

サヤが声を振り上げる。 助かったよー」 -つ! ちょっと、シス日

忠宗を投げかけながら、サヤが水の刃を再度院がせて戯に止めを刺

高隊の隊長で、相応の実力者だ。 る少年を追い、フィールド を上力で駆けていく。 彼は前

だがその攻撃が相手に指く前に、堕から巨大な石の端が開来する。故ったのは、相手部隊の後衛の少女だ。

それでも単途撃破が可能を判断したのか、角へと追い込むことに成功した彼女は、要出の気合いとともに刺突を

唱班に回避するシスリーネだが、体勢を楽したところへ、すかさず先の少年が攻めに転じた。後後の少女もシス - 不を狙って次々と紋形術を発動

そのと言実履が吹き並れ、後指の少女を吹き飛ばした サヤがすぐさま加勢に入ろうと走るが、間に合わない。 さずがのシスリーネも助験一力だっ いつの間にか、シスリーネは二対一の形へと誘い出されていた。

マロンボシスリーネを構造したのだ。

(永 続) によって、少年の足が凍る。 迎い詰められ、彼は敗北を供って降参した チャンスとばかりに、シスリーネはレイビアで相手の創蔵を捌きつつ、詠明 助かりました! 即立れ、冷却の気度が未通の取り

522? 害物の宣言に、ミイナが目を充くして問りを見渡しか 勝れあり! 第29部隊の時刊です! もら終わりて

こな、何だか……宋気なかったですね… 最後は少しドタバタしてしまったものの、総じてみれば圧勝だったせいか、 ハンティスたちは第一岐に続き、第二岐も四星を挙げたのだった。 先ほどの縁長が殺後の一人

「まぐれでも何でもない。それだけ他たちが強いってことだ」

快道撃は、もちろんハンティス自身の復語と、サヤの加入が大きいが、決してそれだけではない。 ハンティスは適信でもなく、事実としてそう応じた。

きていた。元々就政府の調覧は高く、命承の政政府も使えるため、 デャンクもそうだ。 程底は完全にサポー マロンは米だに信じられないこスを見すことはあるものの、徐々に緊張せずに収取消を茶曲でき 先日の初戦でもそうだったが、他のメンバーたちの成長も楽しい。 ト役に握している彼は、暗系の紋章術の成功率が上がり、 有関な後衛として育ちつつある。

は本当に紹介を存在となっている。 サヤに触覚されて、ミイナも以前にも増して頑張っていた。 一年生の上位の生徒と一対一でもほとんど友角に確

門題は

サヤが声に苛立ちを擦ませてシスリーネを問い詰めた あんたどうしたのよう」

自分でも分かってるでしょうが」 どうしたとは?」

い悩むような表情を班間見せることもある。マロンをけしかけてのアプローチも、 学院を辞めて実家に戻って来い。 いや、今日に限った話ではない。こと最近、訓練や授業にもあまり身が入っていないようだった。 ハンティスから見ても、今日のシスリーネの動きは情彩を欠いていた。 しばらく鳴りを欲めていた。 明明 上山田

「相手が誘っているととくらい、ちょっと考えたら分かるでしょ?」 だが間違いなくそのことが不満の原因だろう。 シスリーネがどうしょうと考えているのかは分からない 先日、益み困さしてしまった、彼女とシオンのやり取りをハンティスは易い出す

いいではないですか。どのみち勝ったわけですし

サヤの紅油にそう言い捨て、シスリーネが随を逃す。そのまま話は終わりとばかりに、早々にフィー ……それで現れならそこまでの者だったということです」 Desper.

そういう問題じゃないの。今のは試合だったからいいけど、

これが職物相手の実践とかだったら対んでたかもし

ネは冷淡だ言い返した。

74 るサヤを、ハンティスが削した

あ、ちょっと持ちなさ……」

怪器な顔をするすせを微けば、ハンティスはシスリーごめん。ことはちょっと情に任せてくれないか?」 **ネの後を担い駆けた**

光を弱かしたような器様は、どこにいても目立つ。 彼女は四技場を出て、姿の方へと向かう途中の道を歩いていた。

シスリー不はすぐに見つかった。

問われて、はたと我に返る。 呼びかけると、彼女は足を止めて婉伽和そうに振り返った。 ----何の用ですか」

and of ただ院長として、このまま放っておくわけにはいかないと思ったのだ。先日のアルレナからのアドバイスも脳景 こうして勢いよく道い駆けてきたものの、近直、どうすべきなのかあまり考えていなかった。

さて、どうすべきか

お前、次の体や、陰関あるか?」 しばし気のした後、ハンティスは口を開いた。

一一特に、子定はありませんだ」 かんそんない しとを聞くのかと詩 シスター水に、

it. 「じゃあ俺とデートしないか?」 ハンティスは告げる

彼女にしては給しく、きょとん、 と哲観を充くした





それを見て見れふりをする乾燥たち、 **増し立てる中年たらに関まれ、少女は娘を抱えて地向にしゃがみ込んでいた。** 被移位の母恋に晒されて、小さな他が香作に謂える。

目の前の少年たちの中には、 この近辺で強い権力を持つ貴族の子弟がいる。

少女は恋めに誰いながら、心の中で祈った。 それに、わざわざ質を質疑の少女を此ったところで、何の益もない。

-お称ちゃん、助けて

それは音詞の詞数である「心臓数」において、すべての労働を停止すべきとされている日だ。 十日に一般の説明日

と言っても、実際にはそこまで観光なものではない。脳上学院の技業や訓練は基本的にすべて体みとなっているが、お店などはむしろ書き入れ時で忙しいくらいだった。 ちょっとはく楽すぎたか」 外に出ていく生徒の恋が多く見受けられる。ほとんどが訓唆ではなく私唆だ。十日に一度しかない休日。彼しい ハンティスは騎士学院の正門員にいた。

回線から解放され、どこかけついた管理気で正門を誘っていく。 しばらく持っていると、頻問通りの時間に親髪の少女がやって来た。 **ネだ。彼女はこちらを見つけると、しぶしぶといった様子で近づいてきて、同日一番いつもの市技な表**

情で言ってのけた 「比較、マロンが一緒ならともかく、あなたと二人きりで出かけるなど、まったくもって知が来らないのですが」 その別に超れずにちゃんと米てくれたじゃないか」

ハンティスの傾口に、シスオーネは機能と応じて

Ware Sagrand

一まる。マロンとの初ゲートに向けた子行練術ということにしておきましょうか それで、どとに行く

「い、忙しかったから、そんな余裕がなかったんだよ。まち そうだな! 間見だった。 田さぶすと、 考えていなかったのですか」 シスリーネが残念なモノを見るような目で見て システールは保れたように耐息を吐いた。どとがいいて」 とりあえず第一地区にでも行ってみるか」

9、観光名所も多く、遊びに行くには発売を指摘があう。 第七地区からは、第七面りと呼ばれている大道りを真っ直ぐ北に走めばいいだけだ。 キルクルスを始めるアルスペル公の回域や、キルクルス箱土団の本部がある他、様々な商業権継が立ち重んでい 第一地区は、地理的にも経済的にもネルクルスの中心だっ

連れ立って前を歩く前らの粽子を、圧詰の除から見つめている人数があった。 どこに行くつもりよ、あいつら……」

院しく問題を寄せて、彼らの後ろ姿を睨む。 実は今続、落屋を出て行くときのハンティスの様子がどことなくおかしかったので、こっそり後を付けてきたの まさかシスリーネと二人きりで会写的家があったとは。 やがて角を曲がって背中が見えな なると、見失わないよう、すぐ

D+0..... あれ、サヤちゃん? **背後から超刺を声が聞こえてきたのは、そのときだった。 主残び出して後を追い駆けようとする。** こんなととで何してんの? あっ、向とうにハンちゃんたちもいるじゃん!」

「しーっ"いいから、ちょっとこっちに!」 退害のどとく反応し、サヤはその口を全力で塞いだ。

な気を吸い込みながら同時に値を飾りませ ご、 どめん、要かったわ」 上は一つ。むし、苦しかったじゃんし」 サヤは学ば引きずるようにして、炎然の個人の

の路検索へと遅れ込んだ。

っと……か、監視っ。あいつらが学院の生 ħ

信でて苦しい総否を対すサヤ。

「じゃあくてナも子似うよ!」 「へー、すどいじゃんサヤちゃん。降いねー」 しかし大気よくそんな真正を ミイナは簡単に信じてくれたようだ。頭があまり されてしまう て助かった

Ą しとがあるだろうし お手田の十のユー 38 べ別だか わたしだけで十分なんだけど

「大丈夫! 今日はミイナ、一日ずーっと暇だし! だが、ミイナはずでにやる治臓々だった。 ヤヤはしどろもどろになりつつ断ろうとする。 というか、 体みの日はいつも取っ!

に従しい事実を暴露されても区位に困る。 友理少ないから!」

そんなに続しそう

ā それに なんかよく分かんないけど前白そうだし! 500 1001

しィナはきょとんと前を傾げる。

12.4.9

だけど、あいつらに知られたら困るのよ



なんか声が聞い かったかり

女の声だった気が十

しがり組さんや 恥ではないです

報送は

そとで初めてハンティスは、 彼女がいつもと問

の人通り。気になるのは当然からしれない。 だろうが… (私間、持ってないのか……?) くない格好をしてきたつもりである。---一応 ちなみにハンティスの方は私服だ。別にお液落を 考えてみれば、彼女が私服を着ているところを見たことがなかった。 したというわけではないが、弱低弱 街に繰り出して

だが騎士学院の生徒だと一目で分かってしま

ため、どうしても問りから注目を浴びてしまう。

そとは小鍋麹を洋眼店だった。 ハンティスはとあるお店の前で見を止めた よし、だったら

とちらの意図に気づいたのだろう、 シスリーネが睨んでくる!

ŧ 「……合っておきますが、私の実家はそれほど指摘ではありません。私服に含む 「せっかくだし、いつもと同じ格野ってのもあれだろ?」

「そとは心性いらないって、ほん、 とういう場合は明が出すものだろ?」

してすが…… 「別にそんなんじゃないって」 ----どういろ下むですか?」

戸惑いを助せない彼女の音中を強引に押して、ハンティスは入り口を抱った。 55865586 ふわりといいにおいが善り、再礼をくすぐった。 店内では少女から中

ショッピングを楽しんでいた。男性客の寄はいたい。

---女性向けのお店のようですね」

外で持ってる」

問題ありません。 図れ右をして外に出ようとすると、シスリーネに腕を摘まれた。 私と一緒なら、いくらあなたでも変績扱いされることはないでし から遅れて

光でおいて、放置とはいかがなものかと」

今天なようだ ますは適当に切りを図るなどにする。 いらっしゃいません とおい女性は日か述えて 怪評な顔はされない。

(とと下着コーナーじゃないか------------) と、気づくといつの間にか低険地帯に足を踏み入れていた 概に向かって長く伸びるよう もずっと広い店舗だった。 気いてある限も根

切わずその場に立ち続む。

ののか、謎である。 0、見てはいけないと思うと、ついつい見てしまうものだ。 それにしても種類が多い。はいてしまえ信外からは見えないというのに 洋展店なのだから当たり前だが、黄連に見える場所に女性の下者が確別されているため 着が販売されてい り間に田

超下だ 一とれをマロンのために問いましょう」 ほとんど極に違い下着まであった。どう考えても様子べきものが隠れない。

「くっ……で、では自催で はいはい先行くぞ」

広げてみると、どうやら給仕級のようだった そこでふと目に入った服を事に取り、シスタ 危険な下着コーナー を突っ切って、炭へと遊む

```
Ę
                e sassi
                                    「ええ、それに
                                                                      「あー、どめんなさい。
                                                                                                           「との色谱いとかありますか?」
                                                                                                                            こんにちは、何かお探し?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    「別にいいではないですか」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     一てか、いつもぶすっとしてるけどな。お前、マロンのこと以外ではずつ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     「笑ってませんし、不穏嫌だったのは無理やり溢れてこられたせいです」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      「いや、ぜったい笑った。 デーっと、 ギすっとしてたのに」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           一代 笑ったよな
                                                                                                                                                                                                                                       「いえ、何でも
                                                                                                                                                                                                                                                        しん どうしなき
・・・・そ、そうですか?」
                                                                                       シスリーネが訊くと、女性は申し訳なさそうに、
                                                                                                                                            と、そとへは負のお助さんがやって来た。いかにも接換薬に向いて
                                                                                                                                                             などと言いつつも、数に手を添え、意外と直列に悩んでいる。
                                                                                                                                                                              ……正直言って、服なんて何でもいいんですが」
                                                                                                                                                                                                  じっくり選んでくれよ。時間はたっぷりあるし、
                                                                                                                                                                                                                   商品機を見渡しながら、
                                                                                                                                                                                                                                                                     たぜか学服になるシスリ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          ふいっと顔を存けて
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              ハンティスの中語な規型に、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             あなたの性臓がだいたい分かりました。つまり、攻められるよりも
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             注意していないと分からないくらい値かには元をほじろばせて、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  実際がつかめない店だった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      推断が認定と言っても、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    思わず収まつけるように商品権に戻す
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        なんでこんな様まで置いてんだよ!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         まっとそういうシチュエーションを好む人
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 - Con Contract
                                                                                                                                                                                                                                                                                         鏡でする
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       能にとってはどっちも縁みたいなもんだよ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                ふ? 笑った方がかわいいと思うけどな」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          笑ってませんが
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            と言いかけて、ハンティスはそれを飲み込んだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        か何が紅剤しているよう
                                 あなたの綺麗な髪には、きっと素色素の方が合う
                                                                      との低した誰なでならの。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      組度がある。
                                                                                                                                                                                                                   シスリーやは少し気後れ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              シスリ
                                                                                                                                                                                                                                       これたけたくさんもると
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             まつも
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             軸し
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      まで情様のお振落なお店なのに、
                                    1
```

ただの給仕屋ではない。セパレー

皮が高く 日を掘れ、

どんな服を選んだのかまったく知らないハンティスは、 随分かかって、ようやく購入するものが決定 それからゆうに小一瞬間。 以内のベンチに鞭を下ろし、 ……俺、いない方がいいような?」 店員が熱心にアドバイスを貼め、気づけばハンティスは怠慢の外だった。 うんうん、すっどく扱いわ。

お破様みたい。あってもとっちのも買いかも 持つてとにした

2 25 では、お技器日お経路日へ 少し強張った声で、シスリー 自分は報氏じゃない、と言 遊氏さん、きっと無くわよ カーテンの炭から聞こえて おサハンティスもぎこちた ----さ、若替え終わりました」 の女様れの言 「妹みたいなもの

シスリーネが着終えたのは、青を基調としたドレス風のワンピース。

加えて、恐らく匹員さんが程度でやってくれたのだろう、海 だがそんな心能など、今日の前にいる少女にはまるで不復だった。 それゆえ着る者を選ぶ。下手を者が着れば、その不相応さが際立って ンティスですら、そのセンスの良さが分かる。きっと名のあるデザイ 語らかなシルク書材と解光やスカートにあしらわれたフリルが、上品さと可葉ら に若こなしている うに遊いない



「なるほど、これからってととね。いやん、道理で観がしいわけだわ」 「だ、だから、あなたに言われても、例に結しくなどありませ " & & & & & てのいつになくしおらしい雰囲気に、 あなたが支払うの?やだもう、カフコいい。明の歳だわ」 **部解を解くのも国団なので、とっとと会話を消ませて店を出るこ** 否定すると、別の指導いをされてしまった。 店員さんが無っぱい目をして味く ほんと、お似合いのカップルだわ……」 声が上ずっていた。 もう一度繰り返すと、シスオーネはぶいっと前を許けて **推回を否定ととらえたのか、心なしか包括ちした様子でシスリ** ……や、やはり、私には似合わな いや、整理にかわいいと思うぞう」 しばしハンティスの中で時間が止き 彼女が明社な声を出した。

そして提示さ

れた全額にハンティスは、

- 商文?

なぜかウットリしながら出版さんが会社に影を見せてくる

Dr Jung

恥ずかしいのか、ほんのりと娘を赤く染めながら、恐る恐るといった感じで上目づかいに謂いて どこかの国のお類様だと言われたとしても、納得してしまうかもしれない、見事な家身ぶりだった

逆の向じう、道の反対側にはハンティスたちが入っていった洋板店があった。店の外にずっと低りついていては サヤはミイナとともにカフェの中にいた。 しまれると思って、 いいか日後のいかに

おえれる まだ食器時ではないためか、害は少ない。 サヤちゃんつて好きな食べ物

--- 何度も言ってるけど」

いい加減、そのちゃん付けやめてくれない?」 気さくな質問を投げかけでくる一つ年下の少女へ サヤは前の窓合じりに応じた。

一えー、かわいいからいいじゃん」

「ミイナはね、とう見えて甘いモノには目がないんだよ。あ、店員さん、チョコパニラアイスと前クレープとマン だから離なのよ

地思しつつ、テヤも注文を取りに求たウエイトレスに適当な飲み物を頼んだ。 お願いだから活躍を助手に変えないで……あと報み過ぎ まだお経調だし」

つば付きの粽子を探々と続り、口元に布を呑いて顔を隠している小柄な人物だ。 しばし二人で益体もない合語をしていると、ふとサヤは窓の外に怪しげな人態を発見した -27 ミイナさ、将来は歌って晴って残えるお飯さまになりたいんだー。ほら、姫騎士ってやつ? ……どとから突っ込んでいいのかまったく分からないんだけど」 がに捕らわれても緩然としてるところとかさ! -くつ、殺せ!」 カッコ良くで値が

ていうか、あれって---) 背の高さから女性だろうが、 う見でも不審人物だった。 そんな技能で、 きょろきょろおどおどしたがら浮版店の中を覗いている。

頭痛がして、思わずとめかみを揉んでしまった …どめん、ちょっと待ってて」

5000 びくっと肩を握わせてこ 関してものかり 彼女の口から布が落ち、

· オナビ目い誰いて店を出たサヤは、その不審人物に背後から声をかけた。

やっぱり ちち、違うんですっし

返日になった彼女の門らな轍と目が合う。

子型油リマロンだった。

性ら、人が見てるから、 をしていて、今の今まで気づかれなかったのか位大いに謎だが 姿らくどこかで二人が一緒にいるのを見かけ、気になって隠れて後を付け いっちに来なさら

「あれ、マロンちゃん? ミイナが目を見くする。 サヤはマロンを連れて、 しょナが持つカフェへと従った

かっしていいだっし かっしい

マロンが関を返すと、ミィナは自動調々に応えた

収扱だっては

しないかは残ってるのよう

って、近週やなあ! 背を傾げるマロン。 そのとき、別の答が店内に入って来た サニシカちゃんやないか!

入り口の方はとちらからは死角になっているため見えないが、どこかで聞いたことのあ えっと、どちら様でしょうか?」

はら、デャンクや、デャンタニデーフリック!」 応じたのは先ばど往文を取りにきたりエイトレスだ。念むの吸が淡しい、ゆし気の値そ 姓えてへんけ 支、まや、そうかもしれへんな! NO CHE 広間でちょろっと会うただけやからなり うな雰囲気の子だった。

「そ、それにしても偶然って抱ろしいもんやなぁ! 88: ほんまだ、たまったま、あくまでもたまたま観然、通りすがりで因に入っただけやったんやけどな! あの、いきなりナンバしてきたー まさん、リエシカちゃんがこの肩で働いとったなんてり

Ą なたま 124 れはもしかして潮密かもしれへん! 「帰って下さい。仕事の移職なので」 題のとからい 54 べ、別に、め、連絡とた

一早く帰って下さい。騎士団に訴えます」 すどすどと店を出ていくその人物は他でもない、

……わたしち何やってんだろ」 **梨れた顔で呟くサヤ。偶然とか言い張っていたが** 何やってんのよ

語の外に目を向けると、対面の店の中にすでに二人の後はなかった。 あれっき ハンちゃんたち、もう感因ちゃってるき」

我が身を省みて改めてそう思っ

馬鹿に気を取られている線に出て ナヤは慌てて店を飛び出したのだった。

つい数限的のことをおれて、

イルクルスでも有数の名所として知られている場所だ。憩いの場としても用 な建築家の手による噴水や精微的な大階段を有 立広場と呼ばれる広場に出ていた。 らにはアルスペル公の荘厳な

助政や明水の縁に施っ

二人もまた収水の絵に腰を下ろした あちこちに選択が出ており、美味しそう をにおいが漂ってくる。

漢笑している人の姿も多かった。

情けないですね。財布の中身がほとんど坐になったくらいで」 前を落とし、概息するハンティス。その蜘蛛は自身の財布へと沈がれていた 4476

予想の五信以上は高かった。ブランド物は悔い。 けっとうな顔を持ってきたつもりだったんだけどなけ

「にしても容赦ないよな、お前」 「私はもっと安価なものを選ぶつもりだったのですが

SOUTH ハンティスが微俗れていると、 あのとまうフトリ 各種機能が売れたからだったのだろう

不意に、どによびによと眺から声。 何か言ったか?」

国を取れずハンティスが関き返す

そんなにいつもいつも幻聴が聞るえてたまるかよ ……いいえ何も、もしかしてまた幻聴ですか?」

道行く人が必ずと言っていいほど是を止め、彼女を一 シスリーホの定院よりに、掛け値なくそう思う。

「ねぇあので、かわいくない?」「名のある貴族の御の 結局、製船のとき以上に注目されてしまっていた 間にいるのは

まるで落ち着けませんね……」 シスリールは国心地面そうにしている。ハンティスもその確 誰が執事だよ

音やらの視線を高びてしまいっていた。 「まき、それくらいは何とか」 現に何でも構いません。 多めに持ってきておいてよかったと思う。 ……ちゃつム飲み物でも買ってくるよ。 便長 5.5~」 ……お金はあるのですか?」

「ほら、何でもいいって言ったから本当に適当に買ってきた」 適当な認法で飲み物を買って戻ってくると、 ……鬼なものではないですよね?」

グラスを受け取った彼女は、口をつけて明をひそめる なんでそんなに信用がないんだよー 何か変わった味しませんか?」

そうですか。まる、背頭に表味しいのでいいですがし ※将水とはその名の通り、水の中から治が摂き出し そうか? 発泡水が入ってるからじゃないか?」 そこで彼女は観光しに収別な色を確ませた

それで、

そろそろ野えていただけませんか?

シスロ ハンティスはあっさり真実を自状した と、いうのも別に確じゃないんだけどな **ネの細が開発的な光を花びる** 実は、聞いてたんだよ。 お前とシオンの話を」

お紹介だったかもしれないけど」 「ちょっと担談さしてもらおうと思ってき。

ほら程式、なんか思い詰めているようだったし

シスリーネは一瞬、驚いたように目を見聞いてから、呆れたように喘息した。

佐み聞きとは趣味が思いですね」

で、恐ちく私の成績を知って機器していることでしょうし」 ……どうするも何も、お父様の命令とあれば、正真、私にはどうしよう 川って、シスリーネは目を伏せる。 どうするつもりなんだ? 実家に帰って来いって行われてるんだろう」 我の我で網絡な人ですの

始期をするんだ? そんなに射縁的が悪いのか?」 いしなけりゃ、すぐに帰ってこ来いってことにはならなかったんだよな? 「まき、苗体の成績が労しくないのには俺にも一因があるから、とんなこと言うのもなんだけど

様かに昔から縁は口が思くて乱暴で、私は大人し 品行方正と、 まるで性格の遊り縁端だったわけですが

「決して、総味仲は思くはありませんでした。いえ、むしろ一般的に見て仲の真い結構だったのではないかと思い

特が高かった 私は……韓に憧れていたんです」 今の雰囲気からではまるで根据できない

人喧嘩になりました。: だから結と同じように、終土学院に入学することを透路したのです。ですが、 彼女らしくたい、少しはにかんだように頬を纏めて、シスター本は語った。 それからです。始が何かと私に対して厳しく当たって それを伝えたときに縁び見き

なんでまた? 自分だって人学してるのに

「自分は強いからいい、というのが縁の主張です。: した。その結果、 ハンティスは疑問を投げかける。 私は縁に追い付とうと して必死に訓練をしま

ている頭の弱い人みたいではないですか」 ことろで私は、どうしてあなたに自分のことをベラベラと話しているのでしょ まるで飼い犬に話しかけ

「ちなみに、今でもあいつに憧れているのか?」 施と量大家に避れ シスリーネの表情が推かに動る。 目を助めながら突っ込み、咳払いを挟んでからハンティスは消いた。

いや、ちょっと気になって、まる別にいいよ ……なぜそんなことを誘いてくるのですか?」

ハンティスは質問を覚えた。 その反応だけで、何となく分かってしまった。 無いで押し黙るシスリーモ

死んでも様です。あたたの息い足のにおいを明く方がまたマシです」 当たり前です。マロンと人類するためというのならともかく、 「そんたことより、お明日身は実家に戻りたくはない人だよな?」

いずれにしても、これは私の問題です。他人に口を出されたく だったら話は糖単だな、とハンティスは内心で結論づけた。 まる、現状、まだ有効な解決方法を見出せていませんが

私生ったかのように困まっていたが、 能ら言い様だった。 そう高面はくさった顔で作げると、 お前は俺にとって、大学な部隊の一員だからだ。だから除員として、できる限り方になりたいんだよ」 ……今の台灣 言っていて恥ずかしくないですか? シスリーネは栄気にとられたように目を見聞いた。 私なら取ずかしさのあま しばしその状態

どうらうひむやすべ いや、とれは俺の問題でもあると思うんだ」

お前は後にとって、大事な経際の一員だからだ」

つわって やめのよ こちらのマネをしているのか、まりりとした前で繰り返すシスキ

だからやめてくれって!」 今度はもっと感情を込めて繰り返した。 だから球長として、できる限り力になりたいんだよ」

頭を指えながら訴えると、シスリーネが肩を握らしてくつくつと笑った。

接及の様子に担い適相様を能えたそのとき、物々しく責義した数人の紋章略士たちが広境を横切って行

近くからそんなヒソヒソ市が聞こえてくる この間は複数が指七地区に侵入してきたっている ……まだ犯人は指まってないんだってよ」 ここ最近、検療院士たちの復居が強化されているのだ

アルレナによれば、 どうやら伯爵殺しの噂が広がっているようだ 表だに犯人の手術かりすら捌めていないという。 ととまで騎士団が後手を踏んでいるのも珍

ああれんと、始い」

商冬に着るような分除い外裏を纏った、妖艶な実女だった。 小並に近くから聞こえてきた他のかしい声に、ハンティスは振り返った。

く噴水の縁に腰掛けていた。 **泰也の髪に、同色の噂。この辺りではあまり見かけない容貌をした彼女は、長い跡を組んでハンティスたちと同**

(今……おのの対阻のひか)

光度どはいなかったはずだ。目立つ外見ゆえに、一度見ていれば忘れるはずはない。

そんなこちらの疑問をよそだ、 担体の知れない不完味さを覚えて、ハンティスはぶるりと亦体を変わせた。シスリーキとの話に整中していたせいで、隣に然ったことに気がつかなかったのだろうか。 被女は他っぱい間思とと

続年、他やと物種とおえ。! -6000

にっとりととちらに微笑みかけてくる。



593

見てませ

ので、様った日

よく見ると、彼か

なぜかやたらと聞か違ら

100 「おおおいつ、何やってんだとい 問りが見てるぞ 先ほどの女性がシスリーネが飲んでいたカラの容器を手に取り、 記律が困ってない上に、直珠不明だ。 上、上、子、まわりの目など気にひていへは、りっぱな大人になれまへんと ちしかしてこれ……

ほら、どうです。手のひらに収まる小振りな胸も、なかなかごなものでしょう?」 沢して大きくはないが、徐かな柔らかさが騒越しに伝わって

お前ね

とちらの身体に腕と足を絡めてくる。 わたひ、なんらか、身体がほへって・・・へんなきもひに シスリーキは酔っぱらってしまったらしい。それほど最は多くたかったはずだが、 ただのジュースかと思って買ったはずが、どうやらアルコールが入っていたようだ。

「お、おい、やめるひえった」 おまいいいいないしまいいっと べろっと、舌がハンティスの頬を舐めた。牛梗かく暗っしい核酸に、ハンティスは思わず変な声 きょうは、あんそくび たから

「いやるよっだって自白そうだし」 安慰日と安全日は別称だからなり シスターネが耐ひもを外し、白く緒い耐が露出する。なぜか服を続ぎ出した。 てか、みんな見ても見てる! かんりかめ

「おいおい、自然型々なにやってんだ」「パカップル」「いいぞもっとやれ」 「酷い理由だり」 本然に噴水が築せた。 さらに誰かが「様ぜろ」と物験なこと 次第に周囲がざわめき始めた しを喰いた。そのときだ。

St. 12 12 ばっしゃーん、とハンティスとシスリーネの理上に大量の水が降ってくる。

振り返ると、噴水の縁の上にサヤが立っていた。 ・・・・水が欲しいんでしょう」 全身をびしょびしょに振らして目を日常させているハンティスの耳に、 冷ややかな声が殴げかけられた

さらに、マロンやミイナがやって来る。 ミマナが「はい!」と事を上げた

なんでとこに-

一だ。だから遊りっては! おんたたちがおかしなことをしないか、 1000 こんを大衆の面

- Stititio 何めていないらしい。 いきなり大振笑し、 ネがサヤに指きついた

ことのだか……あそのか」 「飲み物にアルコールが入ってたらしいんだよ。いやもちろん、 ちょっ、何をしてるの? って、あんた、もしかして酔っぱらってる?」 焼がりずと飲ま

「しィナ、感覚させてこいつを取らせてつ」 それはやり過ぎだろり と耳を励められて透明を上げるサヤ

心配そうに声をかけてくるマロンの顔を見て、

ああ、まろんが、ふたり いいはまされ

のが、そのないののはないない ~~どうしたの~」 完全に結論してるな 人を騒がせておいて、良い夢でも見ているのか、すやすやと信持ちよさそ いきなり糸が切れたように眠ってしまったシスリー Att? - 半の身体を支えたがら、サヤが果れたように呟く。

45 気づけば先ほどの女性の姿はそとにはなかった。 さっきまでここに胸の大きなお結さんがいたんだけど」

へき、それはぜひわたしも会ってみたかったわね」

べ、別に無害はないからな……っ? 特額が分かり易いと思ったから、

そイナが選ぶま!」 もうデートの続行は不可能だろう。ハンティスは第七地区に帰ることにした。 ……し、仕方がない、学院に従るか」 サヤとマロンからじろりと睨まれて、 ハンティスは慌てて労肉する。

サヤが疲れたように対応していた。 だからストーキングじゃないっては、 次はストーキングじゃなくて、みんなで遊びに来たいね!」 力自慢のミィナが宣言し、寝ているシスターネを軽々と負ぶった。

少し恥ずかしそうに煩を染め、物物なことにシステーネが限ってくる。 翌日。ハンティスとシステーネは、シオンが率いる第88音隊の等隊里前にいた。 らりあえず、お前にアルコールを飲ませるとやばいってことは理解したよ」 ……さ、昨日は、お願がせしました」

……心の準備が足りなかっただけです」

それで、こんなところに来て、一体どうするつもりですか?」 微かに何を実らせ、そんなように彼がるシスリーモ

おいおい、何だよお供ら。人様の信服にいきなり押しかけてきやがってよ」 入り口のところにいた小柄な少女が難いて声を上げる 軽く応じて、 まる、見てなって」 なんか来たっす! まさか、殴り込みっすかり」 ハンティスは空々と移程の中へと乗り込んだ。

ハンティスは部屋の中を見渡しながら合った。 人のこと言えるかよ・・・・あと、お前んとこも十分、汚い種様だと思うぞ」 見るなり、破浴を目つきで収みつけてくる。

「こ、これは、その……お、おい、ロセ! お前また限らねえもん買ってきやがったた 第33番隊の部隊所は、お世界にも整理を繋が行き届いているとは言えなかった。維然と誰かれたよく分からない小物類。 扱うかった衣服。食べかけのパン。 んじゃねぇねー」

「す、すいませんつす! ロセと呼ばれた先ほどの少女が、誰りつつ指摘する けど、聴収もそのにパンフ脱ぎ給てたままっすよ?」

一冬、見でない……」 シオンが大声を上げて、床に抜り捨ててあった頭いむへと飛びついた。 冬 冬 見たつ!! がいゃあああっ、みみみ見るなるあるるっ!

結構、大胆や大人っぽい下者だった。 **商を高っ歩にしたシオンに詰め寄られ、ハンティスは目を違らし** まったく収合いませんね」

シスリーネが呆れたように関した。 掘さん……あんなのをはいているのですか

シオンは一瞬、呆気にとられたようにポカンとしていたが、 お前の親父さんを説得してほしいんだ。 なぜか少し何かを捌行するような核定しを向けてくるシオンに疑問を感じつつも、 実は俺から結束、というか、お願いがあるんだ」 一年、お願い十二 シスリーネの養子縁組の件、

気を取り直して

ハンティスは高明日を順で告げる。

いいだろっか

「もちろん、無条件にとは言わない」 思った語り、容易にはいかをいらしい。 ちゃなんねぇんだよ」

60 をする。それにシスリーネが耐てば、という条件ならどうだ?」 「まずは俺たちの部隊が解散を免れることが第一条件。 調しむシオンに、ハンティスは出げた 水川 対一で試合

どういうつもりですかって」 息を存んだのは、なぜかシスリーネの方だった

「だって、シオンにお前のことを謎めさせるには、それが一番手っ取り早いだろ?」 ですが……」

まだ何か回いたそうなシスリ まるでアタシが負けるみてスな口振りだな? 水から視線を取り あり得ねえよ」 シオンの製物にかか

H ? 「さずがに前のお前に助ったというのなら、親父さんも許してくれるだろう 本然から をおせる それで納得するというのなら応じてやってもいいぜ」 があるのだろう、シオンは嘲笑うように鼻を鳴らす。

ただしー・・」 ただし、だし

シオンはハンティスの順に、指をピシッとさして言った。 もしアタンが勝ったら、 お前にアタシの行うことを一 何でも聞いてもらおる

\$ 12 P あっちのこうこうかい 45588 はははつ 支み無規をよな! なぜかシオンの方が難いていた

「ああ、病に二百姓をい」 「性、ほんとに、ほんとにいいんだな?」 何でもってのは、ほら、

「な、なるっちゅっか…… な、何でもだぞけ なぜかやたらと恋を押して修認してくる。 別に、シスリ あんなことやこんなことものめてだモド」 ネが順てはいいんだろ、略では」

か、不能に笑った 「ああ、お前の方こそ、約束だモ」 平然と応じるハンティス。その自信をシオンは訝しんをものの、

「はいはい、思かったな、金計なお前分を焼いて、ほら、早く行くぞ # 2 総下に出るなり、シスリーネが吸息する そとで、腹下 * 金打なことを をいく二人の前に川髪の少女が立ちはだかった。

そうけい聞いて、

ハンティスたちは健康を後にした

サヤだっ

「おりまの話は一体、おっちらいとれ」

水臭いじゃん! マロン、しょう、デャンタもいる。第29部隊の全員だ それを使問一般ではストーカーというのではないか? と思ったが、戦蛇を塩がしたのでそれ以上は遊及

「ち、違うわよっ。あんたの密接りが怪しかったから、後を付けてきたのよ」

シスリーネが耐息を吐いた。 デャンクもそれに同間する。どうやらシオンとのやり取りを聞いていたようだ。 そうや。そんなことになっとったいうのに、じぶんらだけで解決しようとするなんでな」 突然、しょうが攻めるような口間で詰め寄ってきた。

「マロン……ごめんなさい。ですが、私の勝手な家の事情のととで、 つい どめんれ シスちゃん・・・・・・でも -まったく といつもといつも数小田をはかり あたしたちにも、相談してほしかったな 会計な心能をかけては途感かと思いまして

PH4 「それを水臭いって言ってるのよ。---い、一応、仲間なんだし **能を耐ませるマロンに、シスリー木はパワが形そうに困った。** それくらいちゃんと相談す

そうだよ! そが少し繋いたように目を殴ってから、 全世で細いた

……そ、そうですね」 サヤとくイナの主張に

「それはそうと、ハンティス」

を視線が、ハンティスへと向けられる。

サヤのどとか説のるよう 何でも一つ、シオンの命令を聞くだなんて

「まる、そんとのはそんとのだろ」

いちいちととはだっ 楽観的な物目いに、サヤボ「分かってないわね……」と記を吐く

(Second) と、頭に疑問符を浮かべつつハンティスは肌ねるも

返ってきたのは、そんな高っ気ない返事だった



道距離から間断なく放たれる風の気が、先ほどからハンティスを大いに苦しめていた。 関脳おかずに、次射が飛来。反射的に関似すると、すぐ背後の地面が築せる。 、粉脂が着き上がった。その解脱だけで吹き飛ばされそうにたるのを、辛うじて燃える 大きく左に跳んで、どうにかそれを回避するハンティス。つい先性どまでいた場所に総数 アルレナが射性った矢は前数 **、暴風を纏い、後ましい速度でこちらへ迫りくる**

今日の相手はムストラアではなく、アルレナだった。 中朝の物理・ 通けてばかりでは、わたくしは倒せませんわよ!」

だが以前は適耐ができないせいで、あまり完戦では使えなかったはず、 風幸雪の力を信りて施見させた、彼女の紋草式芸だ 被疾だり、 網系のような金髪を横に膨かせる彼女の手には、美しい猫を抜く

まさか、ことまで腕を上げてたとはな!」

「わたくしだって 提供に立つアルレナを 可能够 ÷ いつまでも苦手を苦手のままにしてはいませんわ!」 ムストリアが不見満な水 ジングを決めながら応援している。

「残んていておったれせー」 民を突き出して振るような動き。 どうやも彼の地元に伝わる部族の踊りらしい。

正直につてかたり機嫌で気が抜けそうになる声振を背に、 了解ですわ!」 て気合を入れた。 一等一等の成力

かちらに増す。 直後、アルレナの前が整件に染まる ハンティスは一番を置い尽くす土棚に紛れながら いったったい | 6K6---) なとんど思いつ 40000

どこにもいませんわけ」 が味んだ。

あるれな、うえ! その声に即応して、アルレナが複線を跳ね上げる

地域に乗ることで高く跳籠し、ハンティスは空から彼女へと迫って まさか、 郷屋を利用して ムスっ! さずがに今の加勢はダメだろー」

35 だが、ハンティス自身も当てが外れて声を見らげる。 キイイインフ、という中高い音が響き渡った。 それでも嗷嗷に欠を放とうとするアルレナより、 口笛を吹いて前駆化すムストリア。変列と統範な口笛だった。 500000 ハンティスの方が僅かに早い。

アルレナの頭上に米の腹が出現していた。 **惜しかったですわ。確かれ、弓頭の紋章或髪は揺双されると弱い。ですが** 今度はハンティスが難く者だった CEOCED.

きらにアルレナは、技能なしに簡単葉の紋束を確認に描き上げた。

それも無は町での発動だ。 北系第三階位紋章術 (水 語)。

題系第三階校校常術 (英 級)

難様みしながら地面に落下。元け身を取りつつすぐさま起き上るが、 規則に最実したかのような情報を支げて、ハンティスは協高く吹き飛ばされてしまう。 すでにアルレナが

いや物で! 遊送 540 突然、動きが止まってしまったかと思うと、 だから落ち着けって! だだだ、だいじょうぶでしゅ、 耳を疑うハンティスの前をがしっと概んで、 いや、物に続かなくていい。どうせすぐ乾 行った長頭を含くしながら、 注意する関もなく石に贈き、 おいそと、日か 水筒を両手に大事そう 早朝のグラウンド Fex B 4 せせせ、せんばいつ! と、ハンティスが暖いたそのとき そうは門っても ムストラアは愕然としていた STP. OF 気にする必要はないと思いますわ。 しかし同時に、 ハンティスはアルレナの成長に、薬直に賛辞を述った。 それはむるかく 足に触ろうとして殴られるムストリア。 さらに準備の真いととに、 そうがって 残念そうに恋を吐きつつ構えを解いた彼女の元へ ……どうやら今日ねるとまでのようですわね」 そのとき種の質が嫌いて、アルレナが手を止めた そろそろ決策を付けま だが左手に力を込めても、そこに統領が現れる気配はま 丁の明然。 われがわれば と向けられていた。 ぐ見ると、ぶしゅうううと頭から指気を出して目を回していた。 振め取りますからっ!」 --- 会秘遊艇してないんだな、 じっとしててくださいねっか 消除も関もありませんわれ おら、落ち着けた」 おしくタオルを手出すムストリア 敗非寸前にまで追い込まれたことへの落肌を隠せないでいると、 内以贈いた声は 完全に押されてたからな 正典、お前がとこまで成長していると に指え持ち、 お使れさまです 飲み数を干燥さ 6.00 流化能からでもア マロンは慌てて起き上がった マロンは頭から地面にダイ 前にも同じ アルレナは不利望そうな鍵をした。 お削ら」 ŧ こちらへと取けて ムストリアの金計な加勢がなければ、 ロンのものだった ひてん 責任を取って綴めますのでの打」 と地面の上に これを出して解を送づけ 倒れ込む

先ほどと同じ手は使えない。

このままだとやられる



内心では少しだけホッとしていた。 (……少しは例子を取り戻したみたいだな)

「そうだんは、定期我の方は問題のようですわね?」

つに分かれている おいのないので

ですが、予約制の住民もありますでしょう。

好らせてしまって……」 そうでしたの: 風に備られて髪の毛の位置が少しズレてしまった卵器を陰死して、「あっ、かつちだ!」と呼んでしまったのだ ……中級と言っても、それほど雑品度は高くない、護衛任務だったんだけどな……。 しょナが護衛対象の貴人を 現在のハン

アルレナが言う通り、整備任務などであれば、先着順ではあるが教育を通じて予約しておくことが可能だった。

「巨樹の連合にはもう行きましたの?」 他にも、いつでも容易に取り組めるような任権もある。例えば、古代文明の道路である逆官の攻略などだ つい先日の失敗談を語るハンティスに、アルレナが同頼の陰恋しを送って

開戦できて手っ取り早いんだが あそとのでっぺん付近の幹から、樹橋を取ってくるってやつだよな。誰かにそれなら中継レベルだし、

そうはんは、サヤは虫―一特に芋虫が苦干でしたわね」 ハンティスが行わんとしていることを探して、アルレナが習気した。

(NOSCISE), CC 「出って言葉を聞いただけで動作を描いてたから、極明だろく本人は「だ、大丈夫よ、たぶん……」と言っていたが、 以側の迷茫には虫型の離物が多く揺形しているのだ。 と判断したんだ」

「それでしたら、ちょうどいい任務がありますわよ?」 一それはお明だけだ」 本のかり 食いしん坊のムストリアに襲わず突っ込む

今なら競争相手もいませんね」 「ええ。つい昨日、キルクルス騎士団から依頼が回ってきた案件で、 アルレナはマーテリア学院精士団の略士団長をやっているため、教育と一緒に任務の選定を行っている立場だ

南の湾南部市トレストンに続く街道から少し合れた場所に、 アルレナは、本当はとういう統形はいけないので内緒にしてくださいねと言いつつ、 ぜひ換えてくれ、とハンティスは明み込む。 前があるのは知ってまずわね?」

なるほどなるほど。水電網で中級クラスの任務っすか。しかも、まだ黒も知らない情報、と」 シオンが率いる思さる部隊の間球長を務め、部隊のムード 彼女の名は、ロセ 粉製のせいか、どこか少年っぱさのある全前な少女だ。 そこで、ハンティスたちの会話を借み聞きしている少ながいた。

グラウンドの周囲を確う草木の助

復明しながら、にしし、

, A. (6)

「きっと、シオン隊長に張めてもらえるっすね」 えば、まされ一石二品だっ いうわけた、緑が南端しているあの部隊を目の仇のように繋い、解説を望んでいるらしい。先回りして攻略してし 中級クラスの任務は、二年生存隊である彼女たちにとっ

そんな関待を胸に、こっそりとその場を立ち去ものだった。

一文、されいな間です マロンも思わずといった様子で喧嘩の縁起を指す。 一面に広がる美しい側に、ミイナが鉄声を上げた

キルクルスを出発して敷的間、ハンティスたちは永治間へとやって来ていた。

「どうするつもりですか? 縄で縛ったデャンクを網に沈めて間にしますか?」 初を探し出すというのは、それだけで一苦気だ。しかも魔物が都会よく水面に現れてくれるとは綴らない。 それほど大きな洞ではないが、それでも動士学院の敷地くらいはあるだろう。足場の思い部場形 サヤが顔をひそめて呟く。 だけど、なかなか骨が掘れそうね」 わいは釣りの飼ってわけやな。それは名楽や、ほな、早返わいを誇って

この網が生まれたという信息があるという。それがこの網の名前の由来らしい。

かつてこの藩を掲載りにしていた巨大な水竜。その真吹によって水紡した大渚が、長い年月を経て近けたことで

アルレナから別た任格は、ここに整食うという大型の原物の財徒だった。

082

シスリーキの脳楽に、デャンクがノリ吹っ込みを入れる。

-いい家だけど、それは総統手段だな」 ハンティスが治野に言うと、サヤがそんな報念を示した デャンクだと確認が喰いつかないかもしれないわね」

「マロン、今じぶんが一番酸いてと言ったでけ」 ……まるでわいが不確いみたいに行わんでくれへんか?」 そうですよねつ……さ、さずがに腹物でも、食べる物は遊びま

俺に一つ、考えがあるんだ。 ミィナ」 マロンの暴討に声を張らげるテャンクを挽口に、ハンティスは自信ありげに告げた。

名称しされて、ミイナがきょとんと目を丸り ミィナが何に?」

と、ハンティスが説明しようと お前の指揮で

분 バデバデッ、といり信用にも似る概念 あもと るに、隣接を数5円光が走った

編製の少女を初めとする、日堂えのある五人相だ サヤが樹着した方向へと目を向けるく 岸辺に数人の人数があった。

「幅さん?」と、シスリーネが呟いた 四人の隊員たちが見げる中、 シオンが率いる他88毎間だった 白大な乾燥を大に関げる

それを意味に南面へと叩きつけた瞬間、西び肉光が弾け飛ぶ 武装だった あれが彼女の紋章武装 両手で持ち上げている。 - (田仰ノ雄) だ。細身のレイピアであるシスリ 子の (権結集) とは、随分と対照的

成能した姓たちが、ぶかぶかと樹田に浮かんでいく 体かに遅れて、鋭い窓桁が一帯に置いた。

「まさか、湖に南根を流しているの?」

サヤが無く他で、ハンティスは態境する。 あれてそがまさに、ハンティスがミイナにさせ として いたい かか

9進から巨大な影。何かが間の中から現れようとしているのだ。 のかもしれないと思ったのだ シオンボ繰り返し何じ作業を続けていると、安然、ぶくぶくと側面に大きな夜がげき上がってきた。 水は電気を通じやすい。周の底にいる隙物でも、水を通じて電車を高びせられれば壊がって水面まで上がってく

P. かという大型の魔物。 楽やがったぞ!」 水田が大き ě 上がり、優まじい水積送が上がった。間の中か

シオンが硫綿を肩に指いで後辺しながら囲んだ

排部に続い三本の角を有し、全身は非差けた鱗で腹われている。 さしく討伐対策のオドントティラススだった。

シオンが水を跳ね上げながら接載し、下から抜り上げるようにオドントティフススの鼻頭へと戦闘をぶつけた。 建味びを上げて人間の少女たちを破壊するオドントティラヌスを前にしても、シオンたちに独自様子はなかった 眠っていたところを強制的に起こされて、思っているのかもしれない。

その際は非く自走り、荒い蘇島は恨りの彼さを窺わせる

市元が瞬支、野太い悲鳴とともに巨大な現像が衝撃で跳ね上がった。 それぞれ、剣、節、蛇、治原の紋章式装で、四方からの一声攻撃を開始した。 さらに他の総員たちを散団しながら前へと突入。浅崩まで上がってきたオドント

マロンが競く通り、シオン器隊はかなり偏った組成をしていた。 す、すどく攻撃的な陣形ですね

後衛が一人もいないのだ。

己の身体を借つけられて言立つ権物が、巨大を腕を振るって少女を 口七という名の小師な少女が突き出した絵型の検察式装が オドントティラヌスの錆を貫き

「はつ、アタンに背中を向けるとは、いい皮胸じゃねぇか!」

「さっすがシオン隊長っす!」 打撃と前型が生んだ衝撃で、オドントティラススの動きが一路停止する。 だがすかさず、シオンが解物の背中へ器然と戦略を叩き込んだ。

大型の開物の口腔から、光間の鳴き声が漏れる。 さらに全方位から、残る三人の少女たちが一気回域に軽較を高びせかけた。 その際に、ロセは凝物の関合いから後週

物から生命力を取っていく。

反撃の余権を与えない一方的な経難。

船の群れが連携して巨大な機能を仕削め

オドントティラススはほとんど成字術もなく やがで個大な水根洋を上げなが

ら口体を適当へと倒れ込ませた。

さ、安を纏されらゃいま 6日経域は、瀬を引き上げた銃。 とわり で立ち得って

しばし町の広場で架けていると、町長への報告を終えた第88器隊が戻ってきた。

型かったよ。お前らの整物を構取りしたみたいになっちまってよ! シオンが少しパツが悪そうに贈ってくる

(イナが前一つない直大を見上げて言った。

今日は密明になりそうだね!」 アタシを何だと思ってんだけ

どうやら紋女がハンティスとアルレナのやり取りを協み聞きしていたようで、 しゅんと環境れながら、ロセが損なる す、すいませんつす」

こ、とうなったら以前の遠宮に行くしか のを探さなければならないと思うと、少し途方に暮れてしまる そう言って執り成すハンティスだが、これで何てにしていた中様住務がおじゃんになって まの後たちだって、アルレナから情報を構成ししてもらった立場だした」

「無難しなくてもいいって、もう少し期間もあるし、何とかなるだろ、 サヤが事を聞く握りしめながら、罷える声で言う。 ちょっと苦手ってだけだし?」

「ベベベ、別に普通に大丈夫なんだけどう 目が持いてるぞ

100-「もうその必要はねぇんだよ」直接戦って終てばいいだけだからた。 **危険だから入っちゃだめだって、何枚も言ってるでしょ!** 見ると、声の主は若い町観だった。ハンティスより二つ、三つ年上といったととろだろう。 外門を出り抜け、町を出ようとしたそのときだった。 帰路は同じだ。 両部隊は一緒にキルクルスへと戻ることにした 目信ありげに笑うシオンに、シスリーネはどこか無切れ悪く応じる ロセが恐る恐る間ちと、シオンは少し不機嫌そうに、 またあそとに行ってたのけ」と、恥りつけるよう な声が聞こえてくる。

け、けど、シオン隊長、との部隊を頻散させたいんじゃなかったんすか

そして五、六人のいかにもやんちゃ盛りの男の子たちが、暴言を吐きつつ蜘蛛のエ だ、選が放れる!」 うっさいやーい」「このひんにゅー」「悔しかったら」「乳でかくしてみろ」「すっとすと!」

そんな彼女に、デャンタがいきなり気味な声をかけていた。 気にせんでええで、たとえ小さな胸でも、わいの気は変わらへん」 男の子たちの姿が見えなくなると、町般は深い耐息を吐いた。 ……せったく もう」

るしかして、湖の魔物を提出してくれたっていう と、険しい顔をして振り返る町橋。だが、制服から精士学院の生徒であ

チャンクボ密を握々と応じるボ、ឈ物を倒したのはシオンたちだ ぜや、わいがガワーンとやっつけたったで!」

何があったんだ? 随分と子供相手に声を言 調く町組だが、まだ消しげな顔をしている。

「あの子たち、また団頭された鉱山町に行ってたみたいなんです」 町総は送りような実験り 語ねたのはシオンだ。 を見せたが、チャンクよりは信頼できる

ロセが訊き返す。 延山町つすか?」

を埋めになった鉱山労働者のお化けかもしれない、なんて言われてますけど」 「それだけじゃないんです。実は最近、廃鉱山の近くで不害な人態を見たといく 子供が遊ぶには、ちょっと処なそうな場所ね」 特通内では

ええ。ずっと計に廃坑になって、今は誰も住んでないんですけど

ž すけど……全然、言うことを聞いてくれなくて。 「そうなんです。野盗や権物の煩かもしれないので、子供たちには絶対に行かないよう強く言い聞かせているんで マロンがおずおずと口を挟む 援助とかじゃ… かと言って、唯レベルの話で、

ナハハハッ、そんなことか! もちろん、わいに任す ハンティスはデャンクの制版を引っ張った。

……おい、助子に引き受けようなするなよ」

「アキか。美人の悩みを賄れるわけないやろ 「そういう問題じゃないって」 だが独断で任格を引き受けることには問題があった。回り 確かに、彼女の心配も理解できる。子供たちの親も不安を感 P. Marie

ハンティスがどう応えるべきか遠隔していると、

大丈夫なのか、という前を向けたハンティスに、シオンが応えた。 可能が支続を明るくする。 ほんとですかっ……?」 分かった。アタンもに任せ

ロセが務を高くして胸を振り 優秀な苗様の特能っすね!」 一年生の部隊の中には、アタンもみたいに、こういった暗時の任務を教目の判断で遂行する。

いにしかならないだろうが、ここまで来て何もせずに居るというのも癖だった。 まる別に、お前らは付いて来なくても終わねえけどよ ハンティスの推測だが、恐らく町に潜んだ浮浪者という線が直程だろう。 さらにシオンの話によれば、一年生習味である第29部隊も"支援器隊 the state of ろで下級レベルの任格級

結局、デャンクの強い若関もあり、 ハンティスたちもシオン部隊に同行する

わいに任せといてくれり 丁本に頭を下げてくる町間。 デャンクが力強く胸を叩いた どうかよろしくお願いします」 たれはそうと、 今院、 一緒にお茶でも

お断りします

「うわ、マジョナか親分」 「でよ、その芸術位わちのオッテン、他がちーと香してやったら、しょんべんチピリやがってよ。 展開声や英声が、岩壁に反射して響き渡っていた。

「にーぢゃん、おでの方が、だぶん、ずっどを読だ。げへへ……」 るソレだけは放外と立成な明欝だったけどな!」 しかも约えーなっつったら、贈りながらパンク観ぎ出しやがってよ! 誰がオッチンのア レ見て容がかっての。

てめえは残ってる、この概念っ」

が進んでいく。 だが、どうやらずでに脱坑となって久しいらしい。風化した深端消具などが辺りに耐乱する中を、 そこは物道を結婚物を指摘す るための状道だった 別だけの五人

彼らはこと最近、キルクルスとトレストンを結ぶ街道で、略奪行為を繰り返していた。

10 (後せぎ字の男が口を聞いた) 娘の一頭を舞ったときの下品な話に花を吹かせる中、 奴分、やっぱよしましょうよ。ここ、なんかお化けが出立 変にどから中のロキの口 で情い……」

「はーか。お化けが怖くて盗賊ができるかっての」 核道内は然いのほか広く、途路のように入り組んでいる。 手下の弱気を発言を、親分と呼ばれた小柄な根が美い飛ばす。 とこなら経覚器士に出われたところで 発がとは

マがて広い空間に出た 何をるまい。 隠れるには格好な場所だ。 それでも一応、枕道内部の装造をある役成は把握してお っている状態だと聞く もっとも噂によると、キルクルス動士団は現在、 先日の殷物務原本作のお除で、 必要があるだろう。 判断して残へと進んだ彼らは

まさか、関抗の形 様 それも、人間の一人や二人がすっぱり入れる 日の前の光景に、彼らは一様に日を何いた なんだよ、とれは そして、立ち舞む、

生まれてくる。見たところ、 羅物はすべて非生だ。母体から直み落とされた後に徐々に巨大蛇していって、腓蛇とともに最初から成体と 誰かが苦した。 もういつ耐化してもおかしくない状態だ。別たちの背景を冷たいものが走る。

そのとき皆いた肥めかしい女の声に、男たちはぴくりと前を置わせた。 あら、ガメよ 本来は日や縁といった色をしているはずの即の飛が、真っ然に陥まっているのだ。 しかも、それらは連営の難物の非と比べて見質だった。

ロボーションを含んでいるのは、趙振的女上着だけ。 むくつけき切たちを興奮させるには、十分な技体 略がりから進入出てきたのは、 若い女だった"羽織った外音の歌踏から、 肌色がちらちらと覗く。その笑しいブ

彼女が人間の首など評論く切断してしまえそうなほどに巨大な鎌を手にしていたからだ。 にもかかわらず彼らの身体はが出されたように観直し、その場から一歩も鳴くととが! だけど、

坑道内に切たちの野太い絶略が無き残ったのは、その直後のことだった。 遊院してたの。 うふ十 ねっとりと切たちを眺め付し、 ・少しは楽しませてくれるかしら?」 女が長い舌で試能に指を載める

山間に位置し、同間を整着とした木々で用まれているせいか、まだ日は高いというの! 権尽が改る古い石質の道を通って、合同部隊はかつての鉱山町へと遡り着いていた。 に随分を結及な場所だ。統

かにお化けが出そうな雰囲気がある。 少なくとも百様はあるだろう。社時は数百人規模の人間が作んでいたのではないかと雑捌される。町の朝栄ぶり 倒壊した多数の家屋を眺めながら、ハンティスは吹く ----結構、広いな」 合同症跡は不審な者がいないか、早速調査を開始した

しばらく接索を続けたところで、シオンが言った。技女の言う通り、まるで人の気配がない。町のどとかに活

しっかし、入っ子一人見当たらねまな」 強力せる

うな大きな建物も多い。

「や、やっぱり、ただの味なのでしょうか マロンが周囲をキョロキョロ見回

れが遊んでいる様子もなさそうだ。

整落の異へと楽んだ一行は、筑道への入り口を発見した。だが見たところ。 路椅子で封卸されているようだ。

かりした構造をしているため、耐造の危険は少ないだろう。 後で改めて計類しておくとして、杭州内も調査することにした。古い杭州ではあるが、 近ついてみると一部分が破壊されていて、胸扉に辿り抜けられるようになっていた。 ミイナが声を上げる。 とっから入れそうだよ!」 見たところそれなりにし

意に抱へと進んでいった。 **光章雷による短明は恐さているようだが、それでもかなり提界が思い。酢及した採掘追訪に気をつけながら、慎** 内部はヒンヤリとしていた。

一個低な労働で亡くなった入も多いだろうし、そういう女徒では、出やすい福州かもしれないわね」 ふん。即ってたよりも聞いじゃねぇか。 ----お、お化け、マジで出ね火だろうな?」

「そ、そんなわけねえだろうがつ」 「なんだシオン、お前もしかしてお化けが怖いのか?」 サヤの情報に、 シオンが卵を引き取らせる

b そんな彼女に、 ハンティスが宮城半分で言うと、 イイナが背後からとっそり双づいていって って、何しゃがる!」 シオンは極を飛ばして妖略ってきた。

わんわんわん、と杭道内に声が区響した ミイナに脅かされ、シオンが物語い悲唱を



[-90-] 35 X 在途の人間には感じ取れないものだが、高征の産業である彼女は別だった。 ずってい様気をのっ!」 一般的に、装装や病気を引き起こ 確物を狂暴化させると行われている悪しき震気のととだっ

との先に何かあるのかもしれない。 見ると、同じく高位の幸富であるレヴィアタンもまた。 ・扶泥次館では、 引き握した方がいいかもしれないな」 不安けな顔を

ハンティスは軽減を強めた。

もう少し楽しませてほしかったのに」

しかし女はすぐに何味を失って、一面を埋め尽くす別い残へと複様を向けた。 照形を信めないほど、無残な内地と化している。 >女の見元には、野盛の光体が転がっていた。

しら。それに念のためとは言え、さずがにこんな数は変らないわよねぇ」 ようやく画倒なブリーダーのお仕事もお終いね。まったく、なんであたしがこんなことしなくちゃならないのか そこにあるのはすべて、先日野化させて整命を襲わせたものとは違う、より因易で能力を開物の御だった。 あと韓時間ってところかしら?」

そう性やいたとき、近くからくすくすという使用が関こえてきた。

「おえれる、また誰かが抗道内に入って来たみたいだよ」 彼女の釈城改画である彼は、街を舞いながり出げる。 存には偏帰を思わせる質を生やし、野洋には水道が錐のように尖った尾

小さな生き物が確認に困現する。

今日は千客万来ね、どうせまた野協か何かでしょう あら、と女は目を充くした。

すぐに娘を突き破り、中から魔物の腕が飛び出してく担の一つに縁が入ったのだ。 女が慈生していると、ピシラ、という小さな戦時行

うみや、ちょうどいいわ。何った子たちに、さっそく何でもなえてあげようかしら」 早いものは、そろそろ前化が給まったらしい

の中に様く。 人間ではない。足合のリズムから判断するに、恐らくは同足を行だ。はっはつ、 一同が身構える中、坑道の現から高っ里い影が近づいてくる。 先頭を避んでいたシオンが低い声でそう呟いたのは、弦楽内の調査を閉出して四半須が経過した頃だった。 ・何か来るぞ」

祭る失のように赤い。 「ヘルハウンド……思っていたより、危険なのがいやがったじゃねぇか」 やがて暗がりから姿を現したのは、欲によく似を植物だった。だが香油の組よ という開動有の知い呼吸が診察

「あれくらい、アタシらだけで十分だ。お前も、趣え撃つぞ」 「はい!」「了解です」「分かりました!」 シオンの額公に、 そう零しながら、シオンボ紋等武装である報道を類現させた。それからハンティスたちを割して 4000 シオン部隊の少女たちが威勢よく応じる。 しかし如えり回路を指いて初女たちが雨に吐ようと

「あ、あっちからも変でるっす!」 現在いる広い道から分岐した、精穴のよう ロセが加方向を指差して叫んだ。 **な鉄い道。その奥から別の一匹が姿を見せたのだ。**

「およ、下摘のかー」 シオンが言い終わる前に、すでに第28移隊は破闘服務を整え おいつ、特 いや、こっちは他たちに任せてくれ」 背後から、さらに一匹ものヘルハウンド。 ミイナが呼び、マロンが起明を上げた ----仕方ねぇ。 ロヤ、ことは二手に分かれるゼ

「か、図まれてます……った」

うわわっ、後ろからも来てもよ!」

それぞれの部隊が、 シオンは不服そうに否を唱らしたが、結局は前方の二匹に関中することにしたようだ。 へルハウンド一匹デつを引き受ける 先頭の一西に水の衝撃を が知った の服がすっぱら

だがヘルハウンドは焊接に弾を削いてサヤに反撃 い血液深が噴き出す。 国合いを詰めたサヤが、

それでもまだ起き上がろうし しぶとい気ですね」 そとく複合いから、 一つのかのかので ミイナの強烈な 雅を辞かれたヘルハウンド O-100 H

楽した状、完全に納定する。 脇を続けて真っ直ぐハンティスの

ハンティスは身を低くして鋭い牙を繰しつつ、 身体を躍らせ、跳びかかってくる。 (\$665) も一世

为へと迫ってきていた。

ヘルハウンドの右の前脚が密を舞った。

振いかかる。 視弊を磨われたヘルハウンドが、マヨンを見失い 旅が放ったのは、関連第二級位(塔・転) そのとき、デャンクの諸唱が活 総節ハ母ク だが片足を失ってパランスを関しながらも地面に背機 前り提け、我然なる風の報が上 次ノ親界フ、ソシテ看領ア」 て右往左接する

直接 子がにもう起き上がることはできまい。 そとくすかさず、アロンが〈風、刀〉を強勢 ハンティスが見舞った軽繋が後の脚二本をま へルハウンドの身体を風の刃で切り裂く。

地道の奥から、またしても四匹のヘルハウンドが現れたのだ サヤのいつになく然後を並びた声が、坑道内に反響した。 気をつけて! 気に喰わなさそうに暴を明らしながら、 ……ふん、遊客とやるじゃねぇか」 授級を転じ まだいるむ!」 シオンたちも! 因のヘルハウンド を撃破したところだった

ーモアモアやな さらに石の横穴から三匹、後方からは五匹ものヘルハウンド. い、いつかかのあむいいつき」

「よかったな、デャンク。 こいつらたおん わいが好きなの仕人間の女の子や!」 全部メスガモ」

のように一匹を相手にするだけでも数人がかりとなってしまう。 ヘルハウンドたちはこちらの動きに弊減しながら、じりじりと位限網を挟めてくる 単純に数だけでも、向こうの方が多い。 それが、一度に十二四 同じ伯洛の離物であっても、ヘルハウンドはヨポルトより二回り以上も大きく そのくせ動きる素ない。先性と

仕方ねえな……おい、米を道に向かって強引に突破するぞ!」

行くせー ハンティスの指示に、第29移隊の両々が応じる。 さずがのシオンも、まともに扱うことを避けたようだ。その判断に、ハンティスと ……了解だ。マロンとチャンクを喰いつつ、シオンたちに続いて一気に駆け抜ける! しつ!」「分かりました」「了解や!」「うん!」 しんがりは場にな も限いはない。

シオンの掛け声を会談に、人間薄糠は一塊となって規定した。

べに定り抜けようとする すかき工両側から順次が迫ってくるが、それを同場の陰長たちが撃退し、 **先頭を駆けるシオンが破縄を振り回し、二匹のヘルハウンドをまとめて値言品り。** 大気を置わずは熱唱の響き。難ぜる、咸せよ、火災の膨液」 何とか位置柄を支続した。

世代が強い解物だが、それでもまともに淡ひれば火傷程度では済まないはずだ だが数メートル先に、さらに四匹のヘルハウンドが持ち個えていた。 後を追ってくるへんハウンドへ、ハンティスは大売第二階位紋景術(炎 波)を発動 して足止めを図る。大への

| 新聞だ! 遠状えを増かせる程犬へ、 シオン、止まれ!」 シオンが横わず突っ込んでいく

レガイトタンー」 旦を存むシオン。だがそのときにはすでに、サヤが加速していた。 ハンティスが声を振り上げたそのとき、値方のへルハウンド

シオンを狙い扱き ながら相称を呼び出したサイが、 発展空間の力を信 て無味噌で水系第一時位の (Ma)

液晶が一瞬にして蒸落し、その蒸気を押し避けて火災の液が迫 抑え切れない……っ!」 相性からずれば水が腰勢。だが、四部分ともなれば話は別だ。 水と炎が最実する。 のと、一角に並んだ観大が一斉に第三階位の〈炎・波〉を発動

しかし足を止めた合同様階に、後ろからヘルハウンドが観光士

すかさずシスリーネが、(選) ・ 検察の間で値5尽くせ、大連も、当ち、空ち、全ての時が、

波)で加勢。ようやく大勢を押し返す

1100

100-だめよ、レヴィアタン! この私戦だとは政治は使えないわっ!」 神形が一気に戻され、味方と離物が入り乱れた |歴史前||を一関して生質の一匹を斬り倒する、ハンティスの脳を数匹のヘルハウンドが おーきいの、おっぱなす?」

194888-J 一刀を振るいながら、容鍼症需の言葉にサヤが首を振る

各個単級していくしかなかった。 もはや訓練通りの確認など取り得ない。他隊の短根を取り払って、 ミイナが殴り飛ばした一匹に、ロセが邀喚の声を上げながら絵で止めを刺した。 この状況、かなりまずいっすよけ しからまだいるからしれないっす!」 遊ぐの者何十

```
筋へと叩きつけられた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    た。野太い脱棒を手に突進してくる魔物に、慄く合同部隊
                                 「た、雑長っ!
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     「モデい!」ととから離れる!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       被被
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                むることはできない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  (SERVE)
                道を封じた土砂の壁へ、ロセが危機を踏ませながら近付いていく。
                                                  今ととにいるのは、ハンティス、サヤ、マロン、
                                                                       道は完全に塞がれていた。
                                                                                    粒膜が晴れ、徐々に提昇が戻ってくる。
                                                                                                        昭和する坑道 だが中5、場所が推奨する気配はなかった
                                                                                                                         巻き上がった松雄に吞み込まれるも、ハンティスたちは全力
                                                                                                                                          主動が横穴にまで淡水のように押し寄せてきた。
                                                                                                                                                           足を止めるな! もっと根に遂げ込めっ!」
                                                                                                                                                                                                福長!
                                                                                                                                                                                                                 機能の説料
                                                                                                                                                                                                                                  トロルの頭上へ岩石と大量の土砂が滝のごとく降り往いだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                        2
                                                                                                                                                                                                                                                                                                             だがトロルの技体に阻まれ、残りの者たちは足止めされて
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          権かに遅れてサヤ、シオン部隊のロセが滑り込んできた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               と跳び込んだ。チャンクとミイナが慌てて狭を辿ってくる
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                暗標にマロンの手を引っ張って、立ちはだかる魔犬を使引
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      大井に前梁、背話に根窓が走る。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       地上で機な音がして、ハンティス
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        年月を経て開発していた鉄路はか
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              サヤボ身を狙め、寸あす
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               位かしS維料びを上げ、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     一条の朝間が走り、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       その顔を見述さず、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           だがトロルの方も配体を通じて報道を語び
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            力負けしたのはシオンの方だ。パランスを崩し、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 トロルの提择と指定し、耳を繋する破機的な合が響き渡った
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  シオンが貼りを上げながら、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   くそったれ!
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     公がい脱貼で振われ、オーガを
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      やはらつまやはらっちゃし
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          う、確やるっと
シスちゃんもつ……」
                                 みんなも無事っすかっ!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          サイが影響を詰める
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     トロルの身体から血療法が舞う
                                                                                                                                                                                                                     28日の総合に振さ中
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  トロルが眼棒を力狂せに振り回した
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              んでのところで殴打を回避。だが怪力が繰り出し
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  製質を取り収縮を担いき
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        この衝撃に
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       は視線を終ね上げた
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           質隔の声を轟かせていた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     それでも大量の樹脂のせいで
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            一瞬にして粉を
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              た機能な一様は、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              えていた数
```

巨大な影が飛び出 そのとき、捕組の一つから地質さが続じえてきた。

してきた瞬円で

0274 スは整門の声を上げていた。



Freynlar's Rebellton





主の中から姿を残したのは、泥まみれになった数医のヘルハウンドたちだった。 駆け答ろうとしたロセが、 地面を埋めていた土砂の一様が盛り上がった。 **ネの身を実じて声を謂わせる**

シオンやシスリーネの安当は気がかりだが、今は目の前の離物を仕摺めることが先送。 録った

8 88 100 「はつ、馬鹿門人 のは、どちらにも属することができず、苦しい立場に置かれるのだ。 応じた非社会器で三つあった。土の中から狙い出してきたのは、 立ち上がって問囲を見渡した彼女の声が紋道内に反響する 25 シオンだ。どうやら彼女も簡単だったらしい その内の一つが、極を吐きながら起き上る シスリーオと同じように、上の中に半身を埋ちれさせた人物が残つかあった。 身を起こそうとしたそのとき、近 あの瞬間、どうにか送下してくる岩柱から送れることはできたのだが、 つい先性と 下半身が相気に増まっていた。 **だんやりとしていた言葉が貧難し、** 日を開けると、そとは活動い空間だった んなの、決まってんだろ 疑問を投げかけると、姉は力強 しかしそんなシスターネに、蛇はそう言った。 いいえ、雌さんが楽てくださると思っていましたから」 彼女にだけは迫らうことができなかった。 日始りで記事っかく 筋のシオンだった。 大丈夫が、シスリー 他の貴族の子供たちから転換にされていると、 うれ、通げる! だがその自身の境遇を、シスリーネは決して幸いとは認わなかった。 平氏の学校に行けば彼欲というととで韓雄されてしまうし、貴族の学校では嘲笑の対象 そのせいもあって、教教の子弟が遡う学校でシステーネはいつも認められていた シルベルスト家は、 幼い頃のことだっ 質能の子供たちが問例を取り図み、そんなふうに難し立ててくる 大丈夫です。 くそつ、上が口に……べべつ」 すでに根据だけではまともに食べていくことができるい質の質様になっていた。 いつか解さんみたいに強くなりたいです」 たのだ。 お前ら、大丈夫かり」 の出来事を思い出して、 アタシの縁に何してやがる!」 開長 お師は別に、強くなんかならなく ネにとって、そんな縁は慣れの存在だった。 かつては領主に仕える名門質族だったらしいが、政争に負けて治 そして強かった結は、 足にかかる組みに気がつく から呼き声が関こえて **キは弱をしかめた** 一つしか跳は変わらないと いつも助け

こいつんち、びんだーだから服かされー こいつ、昨日もおんなじ服君でたぜ!」 それは懐かしい先輩だった。

んたせ

うわ持ったね!」

の面々はいない。

マロンたちは……」

ろうと判断したようだった。 分に言い関かせて、シスリーネは炫微を飲めた。シオンたちもまた、残る一人は無事に隣穴へと逃げ込んでいるが だ、大丈夫です、 怪我はねぇか? 樹落地走からもっとも近い位置にいた自分たちがこうして生きているのだから、きっと大丈夫なはずだ。そう自 様式 ただの搾り傷なんで おい、こと曲が出てるモ

シスリーネは彼らの安吉伝不安を覚えたが、あのとき近くの横穴へと跳び込んでいく会を見たととを思い出す。

「はか、胎んだらどうすんだち ちょっと待ってる、 すぐに前してやるから」

「まぁ、アタシは(他し)しか使えねまけどを、ロセの蛇がいれば、第三回紋の(治物)「あ、ありがとうどざいます」 小とそこで、先後が気絶しているときに見た那の光質が頭を辿った。 シオンが隊員一人一人を心置い、手ずから前板を抽していく。

やがて仲間全員の前板が終わったらしく、シオンが声をかけて ……お前も大丈夫か?」 記憶を探るが、しかしどうしても暴い出せなかった。 (あのとき、私の質問に練さんは何と答えたのか……)

個く筋だったが、なぜかじろじろと注意深くこちらの身体を見て.....そうか... 中い、特に標我はない。

説唆化すように言って、 ここの 気をなるとの シオンはようの

私の身体に何か行いていますか?」

当然、彼る多部隊と分略されてしまっている。いったん残へと老み、精道から迂回 城道の入り口へと続いていた道は、 しかし、ひでも目に遭ったな」 1 上級で完全に繋がってしまっていた。

きないだろう。 先頭のシオンが立ち止まった。 だがしばらく行くと、悪いのほか広大な場間へと出てしまる 魔物に警戒しつつ、一行は法匠ルー トを探して状道の拠へと遊むことにした。

書へと続く道にまで限の行列は続いており、一見しただけでは数が分からないほどだ。 大量の整告の物が収がっていたのだ。 その光景を目標したシスリーネる、思わず目を目睹いていた。 彼女の口から感然とした声が響れる。 んだよ、これは・・・・・・・・・・

つに大きい。 シオンがいつになく強張った声で言う。 まされ、さった飾ってきやがったのは、 すでに割れて中身が削っているものもあれば、殻に罅が入っている生まれかけの移もあった。 そして不気味なことに、どの最も真っ然に染まっていた。 ことで持った複数か……?」 それも一つ一つが慰のよ

彼女の命合に、シオン部隊の面々、そしてシスリーラも揃いた。 ……いずれにしても、このまま放置しておくわけにはいかねぇる。服る前に、全容ぶっ切してしまうぞ」 それから彼に違ったように

選だり 「あら、ガメス。そんなことされると、お辞さん、とっても困っちゃう」 また先ほどのように確物の問れに関われることになるだろう。 突然、声が響いた。 状況から燃みて、あのへんハウンドやトロルがことで孵化した酸物である可憐性は高い。ぐずぐず

あれだけの関物をけしかけたのに、ここまで求ちゃうなんで。でも、少しだけ納得。その制版、どうやら助士尽 外京を練り女だっ シオンが怒鳴り声を上げた直跳、林立する他の能から何者かが姿を現した。 **参弘の梨に、確認的な体つき。この見録な雰囲にあって、匂い立つような仏表を放っている。**

```
「うふん、良い子ねん。そう。あなたの推物は彼女たちよ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     ていた。皆部には尾が他びており、さらに先輩は極狭になっていて、針のようなものが無数に生えている。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            シスターキ、お前はそこで大人しく見学してろ
                                                                                                                        している戦場に鍛えた。
                                                                                                                                                                 日から対大なが最大の成成す
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               といつは……まさか、お棚子~」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   明を指ってやるからよ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  (もしそうなら、あの別は一体どういう心を関係を持っているのですか……)
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   者の間の間の仕よ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 「もしかして、彼も楽ているのかしら?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                しいのは一体どういうじとだす
シオンはその一目でシスリーネの保険を対じた
                  だからこそ、だ。アタンらにはアタシらの連携の仕方がある。お前がいるとかえって邪魔なんだよ
                                                                                                 だがそのとき、シオンが出げてきた。
                                                                                                                                               目の前で起とった信じがたい光景にシスリーネは瞬日しながらも、《境結婚》を顕現させて今にも聞かれようと
                                                                                                                                                                                                                                                しかし無くべきことに、そのマンティコアはもっとも近くにいるメデューサを襲おうとはせず、
                                                                                                                                                                                                                                                                                              赤獅子――マンティコアとも呼ばれるそれは、人間をも喰らり棒はな魔物。人用付近に出現すれば、即刻、騎士
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 志和色の分階に成唐に、大樹のごとき四足、形の中では身体を丸めていたのか、全長はゆうに五メー
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        シオンが成いたとき、服物は完全に根を破壊してその全容を現した。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       微い、しかし人間を連担させる顔だった。鋭と盤に強われ、さらに強化にその穴を広げて、巨大を緩物が緩を出した。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     殻を吹き破って飛び出してきたのは、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            ビシっ、という音とともに、直径二メートルはあろうかという一眼大きな単に亀型が走ったのだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    だがそのとまだった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           雷神ノ雄)を振いで無道作に女へと近づいていく
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            音立った様子のシオンが割り込んできた
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          さっきから、なに訳の分からねまことぬかしてやが人な。いいから、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             彼女が指す人物が、シスリーネが思い浮かべた人物――ハンティスー
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    思い当たるのは一人しかいない。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               誰のことですか、と前をひそめるシスキ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      そしてこちらの怪器な視線などお構いなしに、彼女は読ねてきた。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       だが女は何かを思い出したのか、そう、そうだわ、あなだ、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     ……あなたのような解女、知り合いにはいないはずですが」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 いきたり肌かれ、システーネは脳根を寄せた。記憶を積るが、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        あら、あなた、どこかで会ったわね?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               とそとで、シスリーネと女の目が合う。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      だポシオンの鋭い複線を浴びても、女はまるで動しない。艶やかに笑って、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  小小小、企業極端上
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         植物の癖を拾してシオンが女を睨みつける
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       製成するこちらとは美限に、彼女は平然と執覚みながらそんなことを口にする
                                                                                                                                                                                                                                                                   れるほどの危機権だと、シスリーネは学院の関密室にある資料で読んだことがあった。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                もしかして、お前の仕葉か?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     人間の身体などいとも皆ちく引き扱いてしまえ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       まので笑うように鋭い汗を繋いている
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               様に加れる乙女のよう
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       節ってたものわっ
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               とっととそこを過ぎやがれ、その形、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             と同一であるかは分からないが、
                                              も簡単に倒せる相手ではないはずです」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       と一人で何かに納得したよう
                                                                                                                                                                                                                                                その職を密備り
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 トルを狙し
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               ŝ
```

その主張自体は前告がいくものだった。一人欠けているとは言え、普段からと

もに誘躍をしている者同士の力が

一言われなくても分かってらア。・・・おし、行くせ!」 は知さんも知らないはず」 ……気をつけてください。この辺りではめったに避避しない騒物です。 それでも不満を飲み込んで口にする しかしシスリーネには、韓の説図がただそれだけではないよう どんな能力を持っているのか、詳しいと

報いやすいというのは事実だろう。

正面から突撃してくるシオンへ、マンティコアは牙を飼いて凝りかかった。 シオン菌株の四人が一斉に駆け出した。

縦塊的な一葉を必びて、マンティコアの上半身が研ぐ、動きが止まった瞬間を逃さず、 シオンは完迫の声を発しながら破坏を振り回し、マンティコアの傾面に叩き込む。

説明った。 直後、意快に自身の尾を振り回した。 何、蛇、州の途撃を庇ひて、マンティコアが走明の建時がを上げる

改を切った前の先期が地面に叩きつけられた瞬間、音響が **唯昭に跳び切るシオン。他の除員たちも回避を選択す**

お何ら、フォーメーションを捉えるぞ!」 鉄球じみた縦橋刀に、さすがのシオンも舌を巻く といつをまともに確らったら、背が粉々になっちまる れて縦片が辺り

既が細かない位置にまで下がった彼女たちは、そこで一斉に独唱を シオンの作帳室更に、三人の隊員たちが理论する 分かりました!」「了解です!」「はい!」 音欲なる大蛇よ。音み込み、押し流し、破壊の限りを尽くせ」 それは天の故き。境を倒せ、概かなる市勢に神域の鉄路を」

總系第三所代収申前 (基施) かの触を患者に耐応しきは死。降れ、 に、雄弟第三路位献皇術〈土石湾) 冷た支持数の新用

シスター本は無機する。 これが、締さんの部隊----。 話には聞いていましたが----」

い、シオン部隊の最大の強みだった。 それはすなわち、前衛を後衛のいずれもこなせるということだ。 全員が接近戦ができる技績を持ちながら、同時に高位の戦撃術を その結果 結婚の報は

三方向から放たれた三浦りの攻撃が、マンティコアの巨体に衝災した。 **幼咀が終るなり、マンティコアを単独で押し信めていたシオンが即指に射視内から過感した**

一日ない マンティコアは全身から自を流していたが、その硬質の皮膚のせいか、それ性ど大きなぎ だが舞い上がった土炭の奥から、巨大な影が舞り 別等が着く

明らかに射程列、あれては当たるはずるない まだシオンとは貯蔵があるにもかかわらず、マンティコアが再びその尾を振り回した。 再び随前たちの途明の間を作ろうと、シオンが告打ちしたがら立ち向かってい ちつ、確分と頑丈なやつだな」

しかし次の瞬間、シオン部隊の面々が同時に抽句 措織していたシスリーネが内心で首を傾げる中、シオンが「はっ、 目別すらできね人のかよっ!

迫ちくる針の用。 といつ、針を飛ばせるのか……っか」 尾の先編から大量の針が四万八方へと一斉に放たれたのだ。 シオンは階層に解解を探げてその酸に及

THE SEC WARE 収文の額には汗が浮かんでいる。呼吸も強い。 そう妖略って追い駆けようとした直後、シオンの動きが振躍に鈍った。まだそれほど動いていないというのに、 くその、逃げんなよの! -- ロテ」 すぐさま追悼するシオン。だが、マンティコアはまともには応じず、素早く適けて彼女から防煙を取る しかしシオンが振り回した峻鏡は、身を難したマンティコアに向されてしまう。 だが傷は大したものではない。強引に倒さった針を抜いて、シオンは突測を再聞した

はつ、この程度で伝むかよ!」 突然のことで例の隊員たちも回避し切れず、針を受けてしまう。

シオンだけではない。次の該明を開始していた映員たちもまた、 一様にその顔色を素変させていた。

「だったら書が回り切る前にぶっ倒してやる!」 vれは、生きたまま相手を翻載するためなんだけど Proffin まだ際化していない卵の一つに腰掛けた女が、可能 その現金の記体を指して、シスリーネは目を辿った。 でも安心して、マンティコアの寄仕せいが い編練を引き起こす転用 寄性そのものは低いから

6

はできたい。 ならばと、雷墨第二階位校章術《迅一雷》を致ったシオンだが、右になにと不収例に動くマンティコア だが逃げるマンティコアの方が、解然違い。

そう味んで、シオンがマンティコアを辿った。

ついにシオンが膝をつく。隊員たちも前で息をしながら、その場で膝を折った。 人間の前で不気味に笑う人面の獅子。恐らく緩物の動きが完全に対じられるのを見討らっているのだろう。 雷系性どの連射力のない隣負たもの紋章指では高気だった。

そろそろ田界のようね」

題かん! 今この中でま 女が唸り通り、 らもに動くことができるのは、 彼女たちが被戮を続行す るのは不可能だろう。(核し)で回復に務めているが、解毒には時間がか

このままだと、お前までやられちまう。お前が逃げる時間くらい、 通ける。 アタシらが細いてやるよ

だがシスリ

ネが駆けつけようと

たそのとき、シオンが英間の表情で親した。

おい、間とえなかったのかけ」 くその、路底目のてんじゃねスポーーつ! 声を流らげる縁に、シスリーネはきっぱりと暗言する。 シスリーネは苦い顔で飾いて―― そう質性したがら、辛うじてといった様子で立ち上がるシオン。 前に出た。 お前一人で何ができるけ」

「不愉快ですね、人面定のくせに」 そこまで知能があるのかは分からないが、まるで「余頼数力であるお前一人で何ができる」とでも言われている とちらに気づいて、マンティコアが笑みを探めた。 棚方するような笑みだ。

光に動いたのはマンティコアの方だ。施田を殴り、巨体が砂埃を上げたがら襲いくる とちらの鳴りが通じたのか、マンティコアが少しだけ不快けに顔を繋めた。 その脳大を一個しして、一度とその難い笑いができないようにして売し上げましょう」 「現枯姫」でヒュンと成のを一関し、シスリ ちまた村下 小馬鹿によ に口角を指す

理上からマンティコアに迫る。 さらに〈水 店〉を発動して、それを足場に大き 我が身を練る側の路と化せ。極速の水蛭上 だがその動きを読んでいたシスリ

マンティコアは何めに走って、降り出て水の雨を回避・シスリー不は者がく松挙神を唱え、「水浴」を発着・

吹く除れ、洋然たら水川 白紋の煌めきは破壊の色彩

完璧なタイミングで練り出す、源身の劉秀 いくら大型の原物でも、筋を食かれれば一撃で統定す 狙いは同日通りマンティコアの脳大。

とちらが地面に着地してパランスを崩している瞬間を狙い、マンティコアが尾を振り回した 削っただけで、跳れ返されてしまる しかし(雍結如)の切っ先は、咄嗟に顔を務ね上げたマンティコアの鋭い牙によって受け止められた。接質のな

身を組めて除すと、今度は開始入れずに鋭い牙が振いかかってきた。 を振るってそのすべてを斬り落としてみせるも、直後に大阪りの前前が迫る。 射出される海針。だが先位と大部分を喰ら出したせいか、数は少ない。

さすが、正規の紋章稿主すらも機食する価格ですね----マンティコアが巨大な水を晒み砕いている陰に、シスリー 思味明の発動がぎりぎり間に合い、マンティコアの牙が氷の塊に阻まれる。 - ネは大きく他ろに跳んでいったん形雕を取った

今の政院で警戒を覚えたか、身を吹くしたマンティコアは、 が、大した怪我ではない。 副版の副目が破れ、皮膚が切り裂かれていた。先ほど画酵の爪を回避した際に細めたのだろ 呼気を整えながら、 シスリーネは小さく地す。 い気つらい

……超さんで」 だがそのとき突然、日の前に誰かが立ち痛かった。 シスリーネは第万を込め、(卓枯盛)の強度を上げて 次の攻劾に備えた

麻痺性の街を受けてまともに難くことすら至いはずのシオンが、 过去" 过去…… - この、クソ人国此がッ! お前の相手はこのアタシだ!」 無を認めなる

だがシオンに出く様子はなく、両び大様を構えながら負けじと声を振る。 何をやっているのですか! 大人しくしていてください!」 だがマンティコアは、一瞬早く他方へ跳び起って今の一根を回避している。 信先が近り、場合が舞く、独田が大きく挟れて、辺りに砂原が飛び致った。 確りかると、(密排ノ籍)を大上段から思いきり振り下ろす。 - 不住日を飼いて怒鳴った。

その瞬間をマンティコアは見遠さない。地面を眠って、シオンに迫る。 システーオが言い返した直後、室の定、 第一階位の(他し)程度で、そんなに早く解治できるはずがないでしょうロ」 どれくれる、どうってととねまし (後し) り回旋させたした…」 シオンがよろめいてその様で誰を育った。

その妹の弟ましい後ろ彼に、シスリーネはハッとした。 来やおれ! シオンは平くも倒れるのを読み止まると、声を扱って遊を献とうとする 縁にはいっさい子を出させねえぞり」

んをの、決まってんだろ 対断、脳巣を通ったのは惚かしい光気

どんなことがあっても、お勧ちゃんが渡ってやるからだよ

本当に馬鞋ですね」 ・・・・・まったく。 助さん、あなたという人は・・・」 その高実に思い至ったとき、シスリーネは見わず耐息を吐いていた。 だから……私が学院は入ることに、おればと反対して……) そのときの問いを、ずっとけろうとしていたのか。 徐か、あのとき称さんはそう応えて

私はもうあの頃のような子供ではないのですよ?」 シスサーネはシオンの背板つこを思いきり組み、引き倒した。

突然の暴言に、シオンが瞠目した。

「な、何しやがるった」 - ぐべっ」と軽視けな声を振らし、地画の上にお尻をついてひっくり現るシオン。 **怒鳴り声を上げる扇を欲口に、シスリーネは入れ替わるように弱へと出た。** 「縁さんはそこで大人しくしていてください」

そして、かつて憧れていた縁に向かって、苦い嫉情を飲み込みながら告げる。 で なぜなら 幼い切り私をいつも通ってくれた様さんには感謝しています。ですが、

380 日を無く前を置いて 私はなか締さんよりを強い シスターネは迫るマンティコアを迫え撃った。

だがそれを軽いステップで躱すと、 繰り出される石病類による爪根。

水の矢が、マンティコアの顛倒に吹々と突き刺さる。 関製入れずに当政歌館から〈永福〉を発動 恢く降れ、落然たる水川 白髭の煌めきは破骸の色彩

ともらの位置に気づいたマンティコアが、素単 すでにマンティコアの倒弱へと回り込んでいた。 だポシスリーキはそこにはいない。厳しく密を引っ扱いただけだ。 マンティコアは領知の協声を上げて、左の前脚を精理を く上体を通らして再びの爪幣 に取るった

だがそれをシスリーネは軽く身体を沈み込ませるだけで避ける。



マンティコアの暗か

無事ですか、超さんて それから行後を振り振り、 有地と同時に直を吐くシスリ 発売され

彼女の方へと近づいていく。 声をかけるが返移はなく 及せかシオン社小別みに身体を殴わせていた。

いきたりシオンが抱きついてきた 結さんった」 心配したよおおおっ!」

「山王ええまえん! お締ちゃんつ、

「け、軽殺はつ、軽殺はないかっ! 倒れた。遊が回っているというのに敷くからだ 今すぐお勧ちゃんが回復をつ 30+0 ああつい

シスリーホは学康になりながら、彼女を助け起こした。 鼻を打ったらしく 自が出ている。 液の着いてく

Photogram A

..... 8 88

そ、そうだけどよ 大した経我ではありません。見れば分かるでしょう」 たしなめると、少し冷静になってくれた

し、心配したんだせー そうですか。……ほんと、 言い聞かせるようになけると、 いつまでも総膜れができないんですから」 不能そうに耐を合けるシオン。

つーか、なんだよ、私の方が強いだっ? そうに施旦十 ると、シオンは「う、 確かに少しは成長したみたいだけど うるせえな」と概を示くし ž

シオンが声を近らげたそのとき、背後から複数の足音が聞こえてきた。

「シオン隊員、生きてるつずかり」 彼らの姿を見て、シスリー ハンティスたちが駆けつけてき そは安地の息を吐 たのだ サイ、

やっぱり、楽ていたのね、うふふふふ

マンティコアを削されたにもかかわらず、 類髪の女は開展出場にそう扱いていた。



「あっちゃありますー」 して、好をつ、胸を除られたああああるっ! 「い、今の丝不可載力だ! 0000000 おとがいに数を引て、 他の子たちは密層な そんな彼女を眺めて、女は脱靴を寄せた サヤが勢攻を認わに双剣を構える 楽気なくフラれたデャンクがこちらへと恨みの視線を向けて でもどめんなさい、お助さん、その子以外に解除ないの」 色っぽい声音で訊かれ、デャンクが即答と なんやじぶん、あんな美人に知り合いがおったんかけ チャンクが詰め扱ってきた。 ウットリと微笑な彼女に動物質な成し目を送られ、ハンティスは悪意をうかぶ、まさか、どんなところで会うととができるなんで、これはもう。 カリロ広場で会った、あのときの女だった。 お前は・・・」 分降い外数を看た試験な気吹 そんな中、魔物の御の一つに数形と 雑児で河原 不変に現れたフェニックスが、 料気で拘禁されてるの!」 その数も同様だが、何よりも残っ然に染まっていることが不気味さを</table-row>長していた。 ハンティスは視線を転じて、 それにしても、これは…… その間に、すでにマロンとロセポシオン部隊のメンバーたちの毒の胎療を 何をやってるのよ……」 何をやっているのですか ぐすぐす品を明らし、四腸で胸を抱えるように隠しながら吹くシオン。シス **幼児退行してしまったかのように、シオンが泣き叫ぶ。** おってい どめんし 3+5550-L っかりとした弾力と柔らかさが伝わってくる。 シオンの胸を掘り締めていたのだ。とてもシス 石手に得る言われぬ柔らかい被無があった。 別を置わせるシオンに、ハンティスはハッとする。 なぜかシオンが特徴らしい意情を握らした おい、大丈夫か?」 だが立ち上がろうとした遠端にふらついた。何れかけたシオンを、 世で、これくらい、なんとも 見ると、シオンの前は音白になっていた。 ええ、私の方は、ですが、助さんたちが **坑道の根でようやく欲女を発見したハンティスは、** お飾さんに興味あるの、ぱく?」 遅れてやって米をサヤが冷たい能でこちらを睨んでくる。 あいつただちのじゃないわっ ŧ しばし船舎してか 6 あるない! 先信 ヘンティスの耳式で呼ぶ お嫁に から気になっていた大量 - いかない 40000 いた人物が 在んな意味で 会談に満分詞るだと」 うわあああん! 他に駆け寄って声をかけた。 ともらへと様いてく の機能の称を以続き 紹介して ハンティスは慌て 運会以外に考

大丈夫が、シスリー

初から解った確物の数は、ゆうだ二十 チャンクが核を踏わせて明んだ。 な、なんちゅう数やつ……」 称を突き続り、中から離物が溢い出してくる。 その直流。先ほどまで静かに転がっていた際に次々と負数が走った。 フェニックスが慌でたようにハンティスの関りを験場 を超える。 その大羊がヘルハウンドで、中にはトロルやマンティコアの姿

ゼーつ、指気が膨れ上がってるの!」 女が咲いた次の瞬間、周囲の空気が変わったような気が 決めた。どうせこんな数雷らないし。それに、少しくらい早く精しちゃっても大丈夫よね」

Ł.

違え報つぞ! まだシオンたちの回復は終わっていない。彼女たちを助うように立ちながら、 (24.3

彼女の手には、身の式ほどもあろうかという巨大な網、その色は、 展を推って活躍しているのか! 妖能を笑みを浮かべる女は、 あなたの相手はあたしよ? 暗様に倒を持ち上げ、頭上から迫る輪撃を受け止めた。 浴に浮かんでいた。外野が散しくはためき、 うふん、お願い、あたしをめちゃくちゃに指 問例の光を吸収しているかのよ

[SAN 情だった。 (見へと終いし附別の種) -力性せに月を探き、 ハンティスは附継を取った - これがあたしの紋章音楽

言って、下降をねっとりと飲める。 切の子なら興奮しちゃうでしょ?」 - 一 随分と大照な名前だた」 大雄を恐々と片手で振り回しながら、 いちいち仕取が官僚的だ。 境面に降り立った彼女が明かす。

ちらには横いかかってとない。 ハンティスが女と対許している間に破壊が開かれ、 体制たちが現物と選択 総位はこ

レヴィアタンを呼び出し、全力を出したサヤが叫んでくる。 知物したいところだが、目の前の女が進がしてくれないだろう。 もっちは任せなるらー」

100

応じて、 それをハンティスは何ひ (球形剤) で受け止めた。 古気を斬り裂いて迫ち、小様工なしの大上設からの一門 そんを他ったい台間を呼びながら、女が地面を除る ハンティスは (試を何) を構えた ギイイインフ、 と後まじい官が響き渡り、

と配を取く

あはははつ!」 大振りにもかかわらず、 一型一型が進く 策い。原の力で

おすがなり」 だがハンティスはそのすべてを、最小限の動作で受け渡していた。 女が大雄の新撃を次々と繰り出してくる。

激しい動作のせいで残君をはだけさせながら、女が熱に浮かされたよ それでこそ、あたしが求めていた相手 連撃を停止し、女が跳び遊る。 …何ぞだ、 「お押さ」 ある人、身体がこんなに然くなってきちゃった」

うふと、本当の名前じゃないけどれ、 其情れない名に、ハンティスは罰をしかめる。 メデューサラン ベンティスード

一応、メデューサなんで呼ばれたりしているわ」

「な・い・しょ♥」と言いたいけど、別に除すようなことでもないわね。別べきせてもらったの。 のことが好きになっちゃったから、小小、一目惚れってやつ?」 心臓、他には好きな人がいるんで」

なぜ俺の名詞を知っている?」

こ、誤解されそうな言い方をするなっ」 「あら、続けちゃう。でもいいの、あたしが求めているのは、あなたとの肉体だけのカンケイだから」 ハンティスは放たれた情報をの一撃を(現代別)で受け、得く。しかしメデューをは得かれた勢いをも味力に 理解しがたい傾倒観を一方的に言い放って、再び縁を晴えるメデューチ。既に乗り、超遠性で叩 間違ってないわ。だって、会話けの殺し合いこそが、あたしにとって最も頻繁する最高の肉体関係だもの」

-00E がくなる範囲させた。 気砲の声と **に打ち出された、高速の第二駆目**

それを明井で受け渡したハンティスだが、微烈な一駅に上体が後方へと愉ぐ。

昭昭に身を投げ出して回端 だが粉を釣り捉かれた そとを描され さらに勢いの乗った三様日が迫る

1000 単者な関節に思いきり単を叩き込む。 だが斬り下された線を満り抜け、ハンティスは彼女の情へと跳び込んだ。 ■飛沫が舞う中、メデューサが追儺のため距離を詰めて

さすがに強く殴り過ぎたか 推出を提度かパウンドして、統治の場へと呼きつけられた。 くぐもった売船を掴らし、メデューサが吹き積んだ 機能で大阪の

そうハンティスが楽したとき

転き込みながらも、まだ使っている。 げ姓つ、げ姓つー 前に埋もれていたメデューテが、なぜか様実しながら立ち上がった。 あはははつ、いったあるるい」

「でも今の、手加減したでしょ?」 ハンティスは不気味な挙動に思わず顔を引き繰らせた 何だ、こいつは、

土で汚れた外套を観ぎ拾てるメデューサ。ほとんど権同核の下着姿と化した。 女性を抱るのは気が引けるってところ? 四星を指され、ハンティスは意を飲む他句する。 いい子れる。だけど

「そんな甘いとんやってると、あっという間に逝かせちゃうわよッ!」 決して小さなダメージではなかったはずだが、メデューサは避暑と叫びながら大郷を振り回して難りかかってく

「あはははつ、ねぇ、ねぇ! ちっと、ちっとできるわまねっ! お結さん、ちっと気持ちよくたりたいの!」 何なんだよめんたは! だったら個み通り、全力で行ってやる!」

「全力で遣ってくれるのけ」 1000 「そっちの意味じゃない!」

そうね! 公司等三班位款收据 (元 ·成)。 思想を発言を無視して、ハンティスは跳び廻りながら紋景詞を詠唱 大気を置わすは熱用の響き、端せるへ だってお除さんの方が適きたいもの! | 減を式 大矢の樹皮 ああでも一緒に道

であああん、然いいいっ!」 だが迫りくる类の彼を前に、メデューサは抑っ而だ

Noon あははははなっ、熟い、熟いわっ。お話さん、身体がとおっても熟いのおっ!」 下着や髪の毛の一部が燃えているにもかかわらず、彼女はケタケタと笑う。 総市を 上げて、炎を排り続けてくる

そり小燃えているのだから無然だっ

「やっぱりいいわ! そこらの紋章輪士なんかより、 ハンティスは不気味を通り越して恐怖すら覚えた ずつと強い!

----ならなかなること 厳しく何り合いながら、メデューサが聞かとして語る

「もうあの都市に用はないから言っちゃうけど、伯爵社しの犯人、 メデューサは粒子様子もなく、別分なく応えた その言葉に不穏なものを感じて、ハンティスは関い質した。 実线

「護衛の騎士が何人かいたけど、みんなつまらなかったわ」 メデューやは残念そうに口元を歪めた。

遊かせてあげたけど。でも、ペテランなおじ様とはなかなか楽しめたわ。もっとも、 傷を避けてあげるようにしたの。でもそうしたら、早く殺してくれって言われちゃって。酷いわよね。その通りに 「最初の子は、ちょっと彼めに鏡を振っただけなのに、あっさり巡っちゃった。だから次の子は、 一な前の たけどね 絶別までは遊かせてくれなる

超速の衝撃が、ハンティスへと迫った。 メデューサが身体を批散させたかと思うと、 あたたは、あたしを最後まで遊かせてくれるかしらす 語々と明かされる場像な民実に、(環境部)を頼りる手 風を深心力で一気に加速 気づけ (100 att)

ないほどの連携

一 提動ける、 松の脾性 容赦なる破役

熱風に耐え、メデューサが振風に煽られてパランスを摘して ハンティスは前身も抱き込まれる かの水田やく様 大) か発動で いる間をつらせ、 校道内に報音が高いた。 ハンティスは「気時度に軽き

新型は大蒜の折に受けまめられる。 ああて、なんて強小なのフ

彼女が起き上がる前に、 面を舞い、地面に淡下して繋がるメデューナ。 だがそとから右の事をメデューサの難へと叩き込んだ ハンティスは容赦な 治療を繰り出していた

空間を紅閃が刻む。

大雄の一閃を躱してメデューサの足を喰り払うと、 いいわ いいわアット さらに大雄の脳側を縫って、(投夾剣) 彼女の脳腹を斬り裂いた。 メデューサの胸から座の飛沫が舞い、燃える。肉の焼ける臭いが辺りに使った。 880 ハンティスは体勢を崩した彼女の傾面へ合

それでも笑いながらずぐさま立ち上がると、我我名様に大理を振って攻撃「ある、痛い、痛いっ……うみふ、あははっ」 行ちをは関う メデューサは脳震震を起こしたか、フラフラとよろめいで地面に手をついた。

身体を「く」の字に折って倒れ込むメデューナ。 ハンティスは体別さだけで躱し、彼女の腹路に殴り だが、原調な動物だっ

ない前女に ハンティスは目い捨てた

子がに、前戯はこれくらいにしておいた方がいいみたいね」

大人しく抽まれ」

花気のようなもの。 同づけば、彼女の全身から何かが立ち上っていた。 背筋にヒヤリとしたものを感じて

いや、根廷できるほど最密な、質点だ

つい先日のことだ。維か、学院で それをハンティスは、どこかで見たことがあった。 さらにメデューナの新に繰りしい紋様が行き出 ちっと最質で、似ましい だが、ただの窓力とは違う。何よりど子思い 11/4

66 一般人 表た。 をあんな出来倒ないと一緒にしないではしいわね!

出来前ない・・・・・・・ ハッとして口にした言葉を、 メデューサが少し不満げに否定した。

そのみれ 編纂を思わせる質に、先端が織のように尖った尾 何々しい生き物が確認に出現する あたしは選ばれた存在なの。 くすくすべ という笑い声が疑こえた 彼ら難人は、 この力に耐える

我が脂壊して人間辞めちゃうんだ。そう その通りだよ、 そうよれ、マステマ?」 とっても残念なんだけど なると長くても一か月くらいで死んじゃう

「じゃあ、やっぱりお前が魔人を生み出していたのかり マステマと呼ばれたそれは、 年前 俺たちを使ったるの難人も お前の仕葉だった

787 型わず声を流らげ、 くすくすと使けるように笑うだけ ん、そんなに作のこと、ボクちう情 性政策を同い詰めるハンティス かいかるこ

ハンティスは撤額を押し取し、低い声で問う。 そしてそんなことを言いたがら、メデューナの背後に隠れ ど主人さまし、あのお見ちゃん、すどく作いよう とれだけの摩物をとる

消炎气 うふみ、今度ごそ、な・い・しょ 大様を構え直す。

・・・・ 体 何が目的なんだ?

大雄が影響がけに振り下ろされる 一瞬、彼女の姿を見失い贈目するハ

田の田 及撃の結束すの一撃を放つ 関一覧、身を住めて回避する、前期が数本、 「観光網」で売りじて受け止めたかと思った。 切り飛んだ すでにメデュ 単日の学典へ移っていた

限を繰り上げられ、 西後、賦下から飛来上 観罪が強調的に上くと何いた 長野

ハンティスは反射的に横転して軽撃を躱し いつの間にか背後にいた。 被ろよう すぐさま起き上がり、相手を睨みつけるが、 さらに戦節に初の朝突を喰らい、ハンティスは大きく吹き飛ばされる。 すでにそこに統女の姿はない。

了解なの!」 フェニックス! 力を貸せ!」

今度とそ本当の全力で応載する。 人間が相手だり 大気を振わすは熱唱の響き、 との報度で 思って福存していたが、 報せるへ NO. おかが 大夫の展式

4 200: メデューサが継を大上投から一関しただけで、第二指性の〈夾 波) ハンティスは目を殴った。 それならり 妻でよ、焼炸の音色、熄めけ、焼の紅色。 效の因為で おおい

開髪入れず、〈夾一波〉よりも強力な火薬第三階位校章術(灼熱) を扱つ。 天をも数やせ

これくらいの売じゃ、あたしを助くす 第二階級やつ……す」 だが、今度はメデューサの〈戦・風〉に行ち前された。 - 前巻きて吹き吹れよ、嫁嫁なる機才

既とは相性が思いとは言え、これほどの恋があるとは これで阻撃なんだからつ!」 としまるいろう もつと力を保せり ハンティスは声を張り上げて自身の容弱意識に呼び

こう いっしんだつき

前回はもつ

をおる日

光左ら……) 「そんなとと問われても!」 まだといつの力を引き出し切れていないのかー ě

「どうしたの? 権人を倒したときは、 全さく首を傾け、 不思議そうに試いてくるメデューサ。 そんなものではなかったでしょう?」

100 そうだわ。大事なことをおれていたわれ。

「おそり、 ここやしゅりゃ」 迎る大雄、がりぎりで何で睨さながら、 と疑問が過ぎ上がるも、それを訊いている金粉などない。 ハンティスはだ手に力を込めた

(447 だが、 たんで出ないんだよっ……?) そこに就明が現れる気配はない。

と何能させてあげる。 ねま、どうして出してくれないの? 一〇代神の私間)

お姓の 総後に做しい突线によって突き飛ばされ、ハンティスは婉唱の壁に強から衝突した。 防御に施するも、 さらに透度を増した動撃の風が襲いくる。 漆原の軽型が飼く皮に身体に関が刻まれていく もはや目で遊り切ること Š, Ņ

あばらの数本が折れているようだった。 ハンティスは立ち上がれない。動こうとよ メデューナが攻撃の手を止め、鍵をくるくると光子。 傷の見つかは内臓にまで届いてしまっ ると、腹部に釣柄の痛みが走った。 血が離れ出

他し)で流典だけは止めようと努める。

アヤンクの紋章術 さらに開始入れず放つ水系第三段位収収函(大津石)が、摩物数医を大質量で押し直した 一斉に残びかかった計三氏ものへルハランドが、サヤの友膚が生み出すべつの報因に一聴される。 はちもちつ! しょナは大的なトロルに果故に立ち向かっていた。保修を振り回し迎え撃たんと (六条機器)!

そのとき揺れる世界の場に、履物と戦う仲間たちの姿が過った。

マロンも彼らに負けじと紋政則を続く。 昭 松)に視得を奪われたトロルは、ミイナの道根を近びて行体を境面に倒れ伏した 一脳関へ疲う。放了視ねて、ソシテ花型ア」 - それは天の前き。様を倒せ、遊かなる事物に神風の鉄縄を」

ORES. 三十匹もいた機物は、いつの間にかは哲全滅していた。 さらに溶から回復したシオンが、膝負たちと連携して独築なマンティコアを仕情める。 が迷動し、腹物数医をまとめて吹き飛ばした。

だポメデューサに動じる様子はない。それどころか、不敢に微笑した。 付取にいた場別をすべて提回してかせたシスリーネが、レイピアの切っ先をメデニ 「覚悟しなさい、疣疹女」 **メデューナが航空くなさそうに暴を鳴らした。** ふっん。なかなか順張るじゃないの」

あたたたちに、とっても実際な物型を教えてあげるわ こことは全部で五日医分の整物の形があるのよ」

メデューサが明かした言葉に、ハンティスは愕然と声を裹わせる

いつまで持つかしら? 蟾蜍の耐久レースの始まりね」 先性と

しかそをない…の~」 直後、抗能の概からさらに確物の大群が押し寄せてきた。 も多い。 ざっと見渡しただけで、四十四以

「さやし、げんかいだよー?」 同で息をしながら規刻を構えるサヤに、相棒が心配そう に忠信する。

「あ、あかん……こんなの、どうしょうもないやろ 「はぁはぁ……み、しゃナ、そろそろ原物だよ マロン、ミィナ、デャンタが迫りくる多数の確物を前に場合を零す。

妖しげに鳴うメデューサへ、シスリーネが背後から躍りかかった。 誰かにこの数を相手取るのは続しいでしょう。ですが、それなら関物を扱っている木体を倒せばいい」 うふふ、このままだと全緒しちゃうわねぇ」 いつもは傾気なシオンの細に熱機が浮かび、彼女の隊員たちが呆然

だが、そこへ機合いから攻撃してくる巨大な影。

くそったれがつ……

80-織み上げた。翳れるシスリーネだが、トロルの怪力から逃れることはできない。 トロルに敬吹され、シスリーネの秘密な体験が密を舞う。さらにトロルは、岩壁にぶつかって認能す る彼女の首

「あの子、あなたの彼女だったわよね? メデューサが楽しげに目を歪めた。 総一級)に吹き飛ばされ、妨害されてしまう。

どうにか立ち上がり、トロルに斬り

たハンティスだったが、

り抜くことができる。 そして、かつての仲間たちの否。 そとは先位どまでいた抗道ではなく 連れをご達するために生み出されたという、超古代の兵器 質機質な歩い目を点減させながら、侵入者を排除すべく最適している。 だがそれを構成しているのは、巨大な人型の化材物たちだった。 日の前には取物の大耳。 ハッと、その声にハンティスは顔を上げた その特度で読めるつもりかい?」 絶望が胸を視い応くし、気力が萎んでいく しかしどんなに力を込めても蜿蜒することはなかった 脳裏に思い続き、別望するのは、畑めく統列 一のり明めがあればー ハンティスは凹の左手に視線を落 ムストリア、 石造りの作用。 (858)

「僕が集めたのは、蛤蟆のメンバーだったはずだよ」 だが物が生産を辿めている中、ただ一人だけその際に至めの力を消す少年がいた。 その結果 迷宮の守護者の前に憔悴し、全滅の危機に瀕してしまったのだった。 そこに懐かしい友の彼があった

既視感のある光景に、ハンティスは日を見聞いた。 (002000) 全員が見て分かるほどの鎮建領機で、

一様に絶望に染まった表質をしていた。 ハンティス自身も

だ結成して供もない頃のことだ。

11分たちの力を指信し、学院の規則を無視して挑んが高レベルの速官の悪。

光の排丸に射拔かれてただの土権と化した。 「この特度じゃ、最強の部隊なんで夢のまた夢だ」 「だけど、どうやら情の見込み違いだったようだね」 後方から歩み回てきながら、彼は閉鎖たちに告げる。 五人全員が学院の過去組造成績を超えて入学した中にあって、 背後から腹いかかった一体のゴ 首席の座を射車のた天才。

語のの経路の環状

そうですわれ。こんなところで終わるわけにはありませんわ」 まだつつけんどんだった頃のサヤだ そう総型的に臨し、双剣を構え直したのは、 ……誰に向かって言ってんのよ 別数の少女

その言葉に

間で旦をしながらも、アルレナが換気に言い故つ

そんな母易な口調で言い返したのは、かつての自分 はっ、上等だ、との野郎…… 理部から庭を流し、大刺を地面に突き立てて辛うじて立つ 一調えかけていた糖恵に光が灯った。

なのに、行く道を再っ直で貼らすその先を追って、 個性と我の強い隊員たち。最初は衝突してばかりだった。 バラバラだの

タースはまさしく光だった。

```
「ものしはくりかる」
随員たちの貸債を見取って、
                                            気づけばその背中に遊い付き迫い抜こうとして、必死に迫り続けていた。
リースは爽やかに簡実んだ
```

ハンティス自身、嫉妬がいつの間にか憧れへと変わっていた。

そしてリースの言葉に質起した節りり節弊は、 行とう。彼たちの戦いはまか

次の瞬間、確認の幻覚は消え会り、 ハンティスの意識は就道へと戻っていた。

だが彼らの除長は、誰だ? あのときと同じ状況だ 後郷し、 服物の大群 収益を失いかけた何間たち

にもかかわらず、 3ースに頼ろる

8661 全さくだす。 ースはいない。

シスリーネはトロルに首を指すれ、

を使えない。

マロンが駆けつけて来よっ

脳質を死への無指が指る。 とのまま望起して殺されるのか。 軽信に無れるも、怖ろしい智力に扱うことはできなかった。 胸を動かすことができず、(単枯燥)

--- P --- P ---だがその背中を独って ヘルハウンドが躍りかかった

体質が起き 焼け無げていく 次の瞬間、ゴウァ、とへルハウンドの全身が燃え上がった。 通けてください! ったのか密解す そう味ばうとするも、声が出ない。 る前に、今度はトロルの力が緩んだ。 火に耐性があるはずの歴火の身体が、

地面へと落下して味き込むシスリーネの目の前で、トロルは脚から先が失われ げほげほり……っ?」 直後、汚い恋明と グポガッロ に巨体が崩れ落ちるように倒伏し、 は嵌へと続け出されていた

どうやら助かったらしい。だがそこへ、すかさず他の際物が襲いくる。

紅い時 時、韓の君中か 先を纏う様 たが、

泊りくる疑物を同じ、

ij

能になってやる」

恐らく結果は変わっていただろう。 一日報 ですかり 試合自体は敗北を吹したが、それはその落脚がある 楽しい夢から覚めたときのような、表失感だった。 それは導く、遠く、きっといつまでも自分の目標であり続け いつしか韓の背中が、すぐ日の前にまで迫っていたことに シスリーネは気づいてしまった。 縁を追って入学した直後に、その縁と手合わせをしたあの日。

語き返すシスリーネに、彼はそう断言する たとえ一生かかっても、雑は絶対に追いつかれや

自信? 違うな といつは確信だ 開分と自分に自留があるようですね?」

久しく記れていた感情が焼き上がってくる その不遜な物門いに対して、思わず気みを案

製むいいのだ」 ならば栽倒してください。少しでも気を抜くと、 それを悟られないように押し隠して、シスリーネはいつもの淡々とした声で言った。 すぐに迎いついてやりますから」

……マロン、あなたの明を見る目は、 そんな彼の背中を見つめながら、システーネは小さく寄すのだった。 弱ってきたのは、 力強い傾き あながち問題っていなかったからしれませんね」

シオンは物熱としていた。

た、職数 (無理だ----とんな数の確物を、アタシらだけで倒せるはずがない-どれだけ倒しても、 もら、限界っす **推物の数は一向に減らないのだ。それどころか、孵化した維物が**

すでに観点を表失して 第39部隊も一年生の部隊にしては健康したが、 ロセの個気の声。そしてそれはシオンを含む総員全員の状況を代弁 それてもちら臨れたろう。

行くぞき 第二ラウンド国地だり

複物の取除す らも様き消して潤いた声は

だがたとえ彼一人が複粒したところで、もはやこの逆境を確すことなど不可能 どういうことだ。つい先ほどまで、あのメデューサという女にやられて立ち上がること シオンは日を日間

「あ、あたしも! ――毎点と破滅の状物。四親さと、かの服务なる背景の反常体に、近くにいたベルハウンドが押し張される。 「おおおおしつ、マイチだっちー」 ミイナーミクランが、単身でトロルに吹っ込む。模様を繰し、その尾に巻を鳴き込んだ。

「おいも負けてられへんで! さらに、デャンク・デーフリックが大限の権物に優先して〈培・転〉をかけ、味方を提進する マロン=マーマードが放ったのは、驚くべきことに構立芸と水立室の融合、第三階位の ・結開ハギラ。次ノ規算ラ、 ソンテ衛間ア

(雑銭田) だった

彼女が二万を掲述すら不可能な速度で振るったその直後、計八匡ものへルハウンドが、 (八岐大蛇) 上 サヤニテクライの判例を水成が覆き

わー、さやがんばるー」 レヴィアタン、誰がもう

船界だってけ」

無くべきことに、第39回豚のメンバーたちが見を 吹き遊していた

その光鏡に、シオンは特を掘わせる。 ハンティスト 問題であるハンティスーハーミリオンが (一のかまなー) 絶像の中にあった仲間たち

一シオン雑芸……?」 ななな、何でもねえよ! 枝皮 様でて初級化す。 らもに思わず他いを比解してしま それを聞いていたらしいロセが目を

心息を吸い込み、収の集から明んだ。 一分の部隊になんで 我けてられれ大で三」

お前ら続えり部隊に続けった

育はマシヒなったみたいだけど

二刀満はして くれないのお?」

1日んどん! 一てめえなんか、こいつがいれば十分だっそうだよな?」 とちらの覚悟に呼応し、ハンティスの背中に大夫の異が概え上がった。 ハンティスが声をかけると、フェニックスは怒ったように顔を膨らませた。 よーやく分かったの!」 H b 化(数据)

の火災を纏う。舞い散る火の粉が抜らただけで、地面が焼け焦げ

100 ハンティスは空間を聞き出り る建度で疾駆。

関類入れずに手首を返し、ハンティスは次の新聞を見得る 例と継がぶつかり、問例に得まい メデューサが目を飼いた。 い明朝成が炸裂した

以公司が加り終め² だが優勝なのはハンティスの方だった。 **独担を巻き上げながら、一出一副の攻助を繰り広げ** 二つの武装が生み出す、推測もの紅と建筑の新聞。 一進一脳の攻劾を繰り広げる

初めてメデューサの顔に釣りの色が嵌んだ。だがすぐにそれを快歩 遠度で、力で、何より気道でメデューヤを押している

事実の反作用で配敵が開いた一瞬の隙をついて、メデュ ・技術観では分が悪いようねエット」

さらにハンティスも紋原洞を口ずさんだ 了解なの! 最く治疗 切り続く メデューサは別々と経安司を明える

互いの途明が重なり合い、辺り一様で変な 機物性特

数形の田地の 古き上がる出版。 航機の施品

その様、古の天空の墓書のごとし」 ・に展開したのは、一つの害大な立体検索 水準すらも焼く

商系等因数位就收纳(能/整约)

大空を指行させるかのよう

及いに無意 の力を込めた一撃が、 METALS INC.

だが、

やはり風とは相性が悪いのだ 僅かに炎が押されていた。 ねえもっと頑張ってよ

あははは、 メデューサが楽しそうに唱う。

そのときだった。背後から治ややかな声が投げかけられた。 歯を食い縛りながら、それでも何とか押 Come graphs 近れさんと鑑力を振り絞るハンティス。

別越しに振り取ったハンティスは、彼女の全者から溢れ出 級の数を組織に帰られながら、シスリーネがこちらへと近つ 様そうなことを言っておいて、 そのサマヤナか」

言ったでしょう。気を抜いている暇はないと」 ……ゆしはマシな歯になったじゃねーか **ネの問例で、肌が切り裂かれると**

50%の機能

本美気が凍り、視器がキラキラと舞る 観女が紋章調を唱え始めた瞬間 それは絶対常度の水液たる水鉄 特別に親いた の地面が一脳にして水崎

さながら観世界だ。

器製の少女が締めの文句を結いだ

水系第四時位収申由(水久東土) 様らわれの囚人は親思なる料機を表で

どとく、メデューサ目がけて辿りゆく ハンティスが思わず目を殴る中、まるで大 新五年四. 熱せられた安安

強烈を対策が発生す そして炎と風の意実点に適したとき、

200: ハンティスはすかさず境間を蹴っていた。 メデューサが成す術もなく吹き飛び、坑道の間に微変して それがメデューサの規を圧し、 樹稈 あたしの風がっ!! きゃあ 彼我の詐嫌を詰める。

おおおっし おいまのはのは

的な規を纏った。 (飲売餅) が超高熱の大売を噴き出 それぞれの容易な言い 人の名に応じて課題した しながら紅く短めき、(死へと誘いし指揮の練)

フェニックス!

決裁と決談がぶつかり合い、そこで再び炎と風が釣磨り合いを演じる

私の存在を忘れてもらっては困ります」 互いに容誦意霊の力を限算まで引き出 物味が高く

はああああああっ!

極年の冷気を纏り(現析整) ハンティスの(飲食剤) そが跳び込んでも が扱い閃光を描いた。 田田子

総称が書いた。 ぎゃああああっ!」 甲高い言とともにメゲ 経典合致 (水及十字解) *

メデューサはその場に倒れ 揺みに関絶して後回の上を転げ回った。 間欠品のよう 紅と音の十字内はそのままメデュ

常戦を盛したその光景に、ハンティスとシスロ だが、笑っている。 編いー 報い! さすがにてれは痛いわっ!」

不意に、メデューサが失うのを止めた。

いいえ、さすがにとれ以上、この子たちの数を振らされるわけにはいかないわ」 まだ扱う気か。----いいだろう、そいつらもまとめてギっ倒してやる」 その直後、魔物が一斉に押し谷せてきて、瞬く間に彼女の問題を取り問む。 切断された腕の先間からばたほたと前を無れ流しながらも、 ……うふぞ、お助さん、本当に楽しかったわ」

それから、そっちの組製ちゃんも、思っていた以上にお妹さんを興奮させてくれたわ **複物に守護された彼女は、血の飛沫を飛びた赤い唇を歪めて不敢に笑** …じゃあね。次にまた全う機会があれば、もっと楽しいプレイを期待す

やがですべての機物が抗消の無へと消えていった 先世どはある言ったものの、実際にはすでに資身利利。 シスリーネが苦々しげに呟く。 もう一、一本は手足を斬り落してやらなければ気が済みませんが

様な甘葉を残し、

権物と信収室を引き逃れて抗道の商へと逃げていくメデ

突然、よろめいて後ろ向きに倒れそうになった彼女を、ハンティスは慌てて抱きとめる。

そのときハンティスの親界の期を白い何かが開切った。目で追ったが、 すぐ的国際へと語



推物の大群の行方は、あれから一週間が経過した現在も不明のままだ。 グラウンドの中央で二人の前妹が始終していた やがてその定路板も無事に終了 そんな中でも、学院では定開戦が継続して行われていた。 すでさまチルクルス騎士団への報告がなされ、同騎士団から近隣地が出された。だが、メデュー 最初は半信半院だった教官たちも、廃核迫へと釈迦した講査隊が戻ってきて、 Á 一今のところ町村への報告もないようだが、 ようかく連続の様ち

キルクルスへ帰還したハンティスたちは、すぐさま模括地での出来事を学時に報告した。

600 性論はいいですか、終さんで シスリーネとシオンが、だいに紋章式装を網班させて明み合う お歯がアタシより 強くなったってんなら

「解我の、やっちまってくださいっすー」 「シスちゃん網袋れ!」 先日の一件で、システーネのととをある程度は認めたはずのシオンだったが、「それはる

「私が時では、お父妹を説得してください。 7條引を主張により、シスリーネの選挙を続けて約束通り勝負することになったのだ。 - ネが約束率項を確認する そして読得できるまで知って来ないでください」

で、アタシが勢では……な、何でも一つ、あいつに命令できる……」 どうしたんですか?

がなると それと、始さん」 既でて首を振り、治験化ナシオン。 なぜか顔を示くして呟くシオンに 何でもねえよー **未は保護を創で関る**

総体の戦闘が開始した 進が致くかより 負けても深かないでください

総様の!

気料です 第29部隊はいつもの一張家わった名前のお店 ハンティスの音頭に続いて、グラスを明らす音が響いた。 「乾杯や」「うわぁ、とのお肉とっても単様しい!」「み、 戦起手で打ち

一支、まさか会話動っちゃうなんて、思いませんでしたっ それだけではない。 なんと第29世録は、 マロンが概を上知させながら言い、ミイナは食べ物で類を膨ら だって、くイナたち研集ったもん! 定期板で全轄をあげたのだった

うう……我が……おだに、娘の幻覚が…… その後継続が末だに短を引いているら

サヤ、大丈夫かり 中級クラスの迷れを

ラアし、解散も気れていた

ちつ、随分と盛り上がってるじゃねぇか」 サヤは青白な類でよつよつと呟いていた。 結局、巨樹の建宮にチャレングしたのだ。

誰かと思って振り向くと、そこにいたのはシオンだった。 吐き物でるような声。

「揺さん? どうしてことだいるのですか? ついさっき回って来たんだよ

```
「おいシオン、付き合ってないからなっ?」
                                                                                                                                                                                                                              高 天文色
                                                                                                                                                                                                                                               「ま、前から好きだった! だ、だだだ、だから、そのつ……」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       「は、ハンティス=ハーマテオン!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              はどこか悩ったような顔をしていた
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           あ アタンとつ
うそ、嘘だろ……そんな
                                   あまりに型々としたシスキ
                                                                       おい何言ってんだり
                                                                                                           ハンティスがどう応えるべきかと述っていると、突然、シスリ
                                                                                                                                                                    今は料理も調理も炊事もできないけど、といつになくしおらしい雰囲気で続けるシオン。
                                                                                                                                                                                      も、もし、物助りなところとかが縁だって言うんなら、アタシ、女らし
                                                                                                                                                                                                            軽命なシオンに、圧倒されるハンティス。
                                                                                                                                                                                                                                                                                       妨さん、まさか本当に行るとは……」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                         ---海々気づいてはいたけど」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             予想外の告白に、思わず確意返すハンティス。何かの冗談かと思い
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    時間が停止する。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   いきなり名前を呼ばれて、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               それからしばし あの、その
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 ハンティスが何気なく話
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    それはそうと、お前が終ったの何を要求するつもりだったんだ?」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   そんな何から見ると物味な蜘蛛のやり取りではあるが、そこには以前の
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            シスリーネが顔を上げ、不動に笑ってそんなふうに応じる。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                けどな、シスリーネ! 次は負けねぇからな!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  そんな彼女に、シオンが抱を突きつけた
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       全日から市をかけられて、シスリーネが南切れ様く班を下げる。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         ……あ、ありがとうなどのます
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                よかったじゃない」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  やったね!」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    マロンが跳び上がって変んだ。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          これで、シスちゃんも幾事に学
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            その瞬間、わっと第39部隊の全員が歓声を上げる。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             ……い、一応、仮父の説得に杜成功したぞ」
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               それがよっぽど飾しかったのか、苦々しく前機を寄せながら、シオンは報告した。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 実は先日の一騎打ちで、シスリーネはシオンを打ち負か
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   縁の問いに、ぶっきら棒に応えるシオン。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  1
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  からいのいかんだっと
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               の問題の報々
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     何だ?
                                                                                                                                                  そうだな・・・
                                                                                             その男はずでに私とマロンと行き合っていますので、
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   が小思るそうにす
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           3
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   低調を前で応じるハンティス
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        つつ、付き合ってくださいっ!」
                                   ネの度目に、シオンが標準と目を見聞いた
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 シオンはなぜか顔を買っ返にした。
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    胸が上下に描れる
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               ě
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         み、みんなのお飲です
                                                                                             持さんと付き合
                                                                                                                                                                        本当にできな
```

確ではありません。そうですよね、マロン?」 ハンティス仕様でて似まするが、シオンはこちらの信頼など行からだだ す、すでにせんばいとはつ、ななな も枝を直ねた的な

「生、枕を……なんども、だとし シオンはしばしぶるぶると身体を関わせていたが、 シスリーネに結構されて、マロンまでもが妄言を吐く 要ねておえるの

……また蜘蛛神を思くしてどうするのよ) そんな意味不明な呼び声を残して、唐を飛び出していってしまった。 うわああああんっ! お助ちゃんより使れた絵なんで、ぜったいに作る

サヤが果れたように呟く。

「お、何でもない」 「なんか、ないてた」 「一体何があったのですか? そびく聞いたよう こ それより、 を顔をしたアルレナがやって楽た。 ムスト シオンが物情い速さで走って行きましたけれど お前たちじをひり したんだ?」

語離化しながら、道に関う。

第39個聯北 「こく見のせき」 「あなた方にいいお知らせがありますわよ 先日の定規報での全務が経緯されて、 今年の原発式祭の出場指揮 種欠比弱はれましたわ

福久? ……まや、わたくしが強く検問したからでもありますが 別形できるのは! 一番味だけですが、 もしもの場合の終えとして二つの部隊が回行

600

れは健南で、実際には来年度に向けて有力な一年生態隊に駆聴武器を見学

せることが一番の目的だ

「これで一緒に容骸に行けまずわね」 こいう。だから何年、祖父の二世際は両力とも二年生世縁ではなく、一年生世縁が選ばれているらしい。 ちなみに当然のごとく、アルレナ途の移隊は出稿移隊に選ばれているという

「密都で美味しいものたくさん食べたい!」 アルレナの話を聞いて、しょナが総合の声をし

「マロンと二人きりで我の密路観光 「これで容然でナンパができるっ!」 あんたたち、動機が不純さ デャンタが最終を覚くし、

ハンティスが悲した吐きに、マロンが不思議そうに首を傾げていた。

100

サヤが突っ込みを入れた。

Pry 24 January 審判を務める生徒が決者を宣言 独ちゃ小様の親もですっ JAJAG

テンプス騎士学院。 試合の一部鉛終を見ていた観客たちが言葉を失っていた。

その最終戦にて、 ここでは毎年、曖昧武祭への出場小隊を決めるために選抜戦が行われていた。 一年生少隊と言っても、その隊員数は僅かに一人 一年生小様だ、 ここまで全勝を収めてきた二年生小様に圧勝

S.

かった「人かかからを飲むべきないだけられていまったののなっ人かかからない人かかからないとないだけくないでは、子のものないというないでは、女のかをはいた。 はかな女性が人は他のなく、彼ののをないた。

砂板型です。 お久しぶりです。

「イレギュラーズ・リベリオン」のシリーズ二作目となる合作を手に取っていたださ、ありがとうございます。 当然、小説の方もそれに負けないように細菌らればならないわけなのですががが、 今回も旧名同様、おちゃうさんの密明らしいイラストとともにお送りさせていただきました!

一巻の店舗が終ったのが昨年の十二月頃。その後、すぐにプロットのOKをもらって二巻を書き始めたので、も 実はとの二巻、なかなか思うように書けず、執挙にものすどく時間がかかってしまいました。

最初は誘拐されたマロンを助けにいく話でしたが、色々と問題があってお戯入りに、そしてシスリーホにフォー 本業に加え、もう一つ間のシリーズを進めていたということもありますが、何よりボフに次ぐボフがキフかった かれとれ一年近くが経つととになります。 (01)

Ĕ, ンオンヤメデューナを登場させることにしてからも、さらに也々な紆余曲折を経て、ようやく今の類へと読ち着きカスを当てる話に変更したのですが、当初は是家のお飯様を出す予定でした。しかしそれもポプとなり、絵である いやゎ、大変でした。(ちなみにとの間、もう一つの方の2巻は様か一か月ちょいで完成してたりして

た応援してくださった情様のお助です。本当にありがとうございます。 それでは海路です。 それでも折れそうになる心を つにか朝き SH とうして無事に完成まで病ぎつけるととができたのは、 ひとえ

細当の佐々木域、今得姓んと時間かかってしまいすいません。別方30の手でアイアンクロー 「日絵のメデューサの皮質がとてもいいですね(笑)。これからもよろしくお願いします。 イラストレーターのおちゃう様、搬送しちゃいましたが今回も素明らしいイラストありがとうございました。特

うち ピクピクー それではまた次指でお合いできれば! しながら書いていました。 MON.

ファンレター、作品の感想をお待ちしています

<アンケートページはこちら> https://emob.jp/m/fi.php/g = mbspko&d = 6&u = 6664



(このページのスクリーンショットを辿って、QRコードリーダーアプリで読み取ればアンケート

ベージにアクセスできます)

(あせ事)

T106-0032 東京都後区六本本2-4-5

SB クリエイティブ (株) GARRISTE SOIL

「尾地 写先生」 係

「おちゃう先生」係 http://ex.shcr.in/

イレギュラーズ・リベリオン

NOR TO

2. 水灰片明 発行人 小川 淳

GA2N

単行所 SBクリエイティブ株式会社 T106-0032 #10780#10708:k2 - 4 - 5

終 T AFTERGLOW (日前 同じ 向野英根) 日前 - 原本 中央新版日前株式会社 2015年11月30日 初版第一研究行 2015年12月15日 電子第一展報行

@Shinuku Ochi ISBN 978-4-7973-8521-2









































